

False Mythos -屠竜王大征-

kiddys

登場人物表

ヴァスガルト——本編主人公。辺境で傭兵稼業を営んでいる。ウォレイス人。

フォルティス——傭兵ヴァスガルトの相棒。文武に長け、博識。ウォレイス人。

ティレイ——魔道の才を見出されて魔女に拾われ、その使い魔として育てられる。マティラン人。

ブレデン=ジュナ——マズレン大公領ダロウエの領主。マティラン人。

メルエーヴェ=ジュナ——ダロウエ王ブレデンの娘。マティラン人。

タナヴィス——ダロウエの宿将。メルエーヴェの婚約者でもある。マティラン人。

ラズモーヴ=レスレント——レスレンティオ連合王国の盟主。ウォレイス人。

メリーシャヤ=レスレント——ラズモーヴの妃。マティラン人。

キュクノス=アダン——王国宰相。マティラン人。

ヴロク=オーゼン——ロシェ大公。ウォレイス人。

ウラバルル=デュハマ——ムオゼト大公。マティラン人。

レクセント=デュハマ——ウラバルルの嫡子。マティラン人。

マレーヴ=ターニオス——マズレン大公。マティラン人。

ヴォートス=ルスオレン——ウィーゼン大公。マティラン人。

ダーケン=ディリゼ——ロシェの宿将。ウォレイス人。

ダルアム=ディリゼ——ダーケンの息子。ウォレイス人。

フェイトン——ナバニール教団現教主。レイゼルクの領主を兼任する。マティラン人。

サルディエ=ローデンウェリ——ナバニール教の修道士。前教主の息子。マティラン人。

ユルベナフ=マイエ——アザフ=マイエ帝国皇帝。マティラン人。

フェルトゥク——森林を守護する亜人族。

ドゥメラク——鉱床に棲み、精錬に長じた亜人族。

月のない晩、人気のない塔の上——そこに今、一組の男女の姿があった。それを見る者がいたとすれば誰であれ、密会だ、とそう囁いたことだろう。

しかし、彼らに気付く者はいない。これは真実密会であるのだから。男女はそれぞれ人目を憚ってここに至り、そして人目を忍んでここにいるのだ。

だといって、彼らが恋を語り戯れているという訳ではない。二人はそれほど若くはなかったし、また、そのような雰囲気とは少々異なっていた。

男の目に宿る熱情はそのような穏やかなものではなく、視線はもはや自制も利かぬ激しさをはらんで視線を女に向けられている。だがしかし、それでいて彼はひどく怯えたように身を竦ませてもいて、相反する二つの感情の狭間で揺らいでいるばかりのように見えた。

他方、女はそれを超然と見下ろしている。そこには彼のような熱情はなく、まるで獲物を捕らえた蛇の如く、絶対の勝利者の視線を冷然と差し向けているばかりだった。

「——私には！ 私には出来ない、私は陛下を敬愛しているのだから。陛下をこの手にかけるなどと……」

気力を振り絞ってか、一旦は氣勢よく発せられた声も、女のその視線に射竦められると途端に勢いを失ってしまって、男は最後まで言葉を紡ぐことさえ出来なくなってしまう。

「左様か。ではわらわは世を去るその瞬間まで、ずっと王のもので在り続けるであろう。自ら敗北者に成り下がった者に目を向けることも、もう二度とはあるまいて」

視線同様に冷たい声が、淡々と事実を告げる。それが確実に男の心を深くえぐることを女は知っていた。すでにその心を掌中に収めていれば、ことさらに強い言葉を浴びせる必要もないと分かっているのだ。

事実、男はその言葉一つに、石の如く身を固くしてしまっていた。その固く閉じられた手の中に、小さな紙の包みがある。先ほど女から渡された包みの中にあるのは、飲む者に永遠の安樂をもたらすもの——毒薬。

それは今に至るまで王の気力を体力をじわじわと削ってきたものだった。今日までの王の容態を見れば、これが最後の一盛りであることは、彼にも容易に想像がついてしまう。

これが最後の一手であると分かって、それで男はようやく己が所業の恐ろしさに気付いたというように、事ここに及んで躊躇いを見せたのだった。

しかし、女は知っている。彼が自らの野心の為、この美貌の魔女を手に入れる為に自らこの薬を欲したということ。彼がもう、後戻りの出来ないところまで来てしまっていることを。それらのことを、彼自身がはっきりと自覚している、ということまでをも。

だから、彼に脅迫の言葉は要らない。魔女は嫣然とただ一言だけを告げた。

「そなたの望むままに。わらわはそれに応えましょう」

そうして女は塔を去った。男は彫像に変えられたかのようにその場を動けずにいたが、しかし、それでも夜明けまでには塔を離れたようだった。

長く病床にあった王が世を去ったのは、それから僅かに数日後のことである。彼の死は、出奔した王子の帰還を待つべく、しばらくは伏せられたままとなっていた。だがしかしどれほど手を尽くしても、ついに王子が王宮に姿を現すことはなく、結局のところ、喪を発して王の葬儀を取り仕切ったのは、いっそ憐れなほど悲しみに暮れた正妃メリーシャヤであった。

元来連合王国の政体を採るレスレンティオ王国において、レスレント王家とはつまり五つの大公領を取りまとめる連合の盟主に他ならない。盟主でありヴァドステン大公でもあったレスレント王の玉座が空位となったことは、他四領の大公らに要らぬ思惑——いや、彼らにすれば至極当然の欲求であったのだろうが——を抱かせることとなった。

ヴァドステン大公の代官を買って出た宰相キュクノス＝アダンやその他の諸侯は、この不穏な動きに反発して良好な同盟関係の維持に努めたが、大公たちの野心はそのようなものは顧みずに膨れ上がっていった。やがて大公たちが不和のままに王宮を去るに至って、王一人の手にまとめられていた拙い連携はついに音を立てて崩れてゆき――

――そうして、起こるべくして起こったのだった。レスレンティオ継承戦争に始まる大きな歴史の奔流は。

「へえ、じゃあその名前は偽物なんだ？」

「偽物って言うな！ 通り名だよ、通り名。ヴァスガルト。いい名だろ？ 三日寝ないで考えたんだからな」

「三日寝ないでも何も浮かばないから、俺に泣き付いてきたんだよな？ 何かいい名前はなにか、って」

「あ、てめえ、言いやがったな！？」

「何だ、自分で考えてすらないんじゃない」

「いいんだよ、三日考えたのは本当なんだから。最後にちょっと知恵を借りただけじゃねえか、悪いかよ」

男が慥然とそっぽを向いたのを見て、少女ともう一人の男とは、とうとうからからと笑い出してしまった。それが否応なく耳に届くと、男は更に顔を背けてしまう。その目に飛び込んできたのは、鮮やかな夏の緑であった。

この辺りは土地柄の割に、比較的緑が多い。彼らが歩いているのも、多少の起伏はあるにせよ、なだらかな草原の道であった。しかしぐるりと視線を巡らせれば、四方をすっかり山に取り囲まれているのは瞭然であろう。天高く鳥の視点を借りて眺めれば、すぐ西の裾野から弓なりに長く続く平原の緑の豊かさに比べて、赤い山肌に緑の斑紋を散らしたような山脈の景観は見るからに貧しい。

ダルケオ山脈——大陸東辺に座する広大な山脈である。全体を見れば不毛の地という他ないが、しかしこの辺りのように実りのある土地もないではない。聖都レイゼルクにほど近いこの辺りは、山脈中にあるのは特に豊かな土地といえた。

この道を三人は聖都に向けて歩いていたのだが、しかしだからといって、彼らがのどかな散策に興じている、という訳ではない。

治安など望むべくもない若い時代であるから、獣に始まり、野盗や悪鬼魔獣など危険は様々にあった。男二人はそのような状況を活かしての傭兵家業を生業としており、今回は田舎貴族の令嬢一行を聖都まで無事送り届ける、という仕事を請け負っていたのだ。今までの仕事に比べればこの仕事はさしたる危険もない上に報酬も少なくなかったので、これはもうおいしい仕事といってよかった。

無論雇われた傭兵は彼ら二人ばかりのことではなく、護衛の対象も令嬢の身一つではなかったのだが、他の者たちは少し離れて後からゆっくりとついてきている。正しくいうなら、危険を見定めるべく先行していた二人のところに令嬢が押しかけてきたのだった。

貴族令嬢といっても田舎貴族のことであるから、輿に乗って大人しくしていただけるような聞き分けのいい娘ではなかったらしい。最初は連れのものも傭兵隊の隊長も揃って猛反対したもののだが、しかし彼女のお転婆ぶりも相当のもので、結局危険の少ない場所に限っては、最低限の護衛さえつければ自由に振舞ってよいという風に、半ば以上なし崩し的に折り合いがつけられた。そうして生贄になったのがこの二人だったという訳なのだが、比較的歳が近いこともあってか、三人はこの数日の道程ですっかり親交を深めていた。

令嬢の名はメルエーヴェ＝ジュナ。ダルケオ山脈に隣接する小都市ダロウエの領主ブレデン＝ジュナの娘である。明るい金髪に小さな顔、丸い目はころころとよく表情を変えて愛らしい。数えで十三になるが未だよい縁組も成らず、そのこともあって少しは淑やかになってもらいたいという父王の意向で、しばらくレイゼルクのナバニール教団に預けられることになったということだった。

その護衛をする一人は、フォルティスと名乗っていた。数えで二十になる若い傭兵で、褐色の

肉体は均整をとってよく鍛えられている。野蛮と粗暴が横行するこの時代の傭兵としては珍しく聡明かつ理性的な考え方をする若者で、顔立ちも時折どこか貴族的に見えた。

そして最後の一人、笑われてそっぽを向いているのが、先に名の挙がったヴァスガルトであった。数えて十七、褐色というより黒に近い肌をしていて、体つきは未完成ながらフォルティスのように均整を保って鍛え上げられている。

どちらかというなら野蛮かつ粗暴な性質に近いようだったが、当人はそうであるよりもフォルティスのように理性的でありたいと考えているようだった。メルエーヴェも彼がフォルティスをあれこれと質問責めにしているのを一度ならず目にしている。

「ほら、いつまでもむくれていないでよ。それじゃ楽しくないじゃない」

そっぽを向いたままのヴァスガルトを、そう言ってメルエーヴェが揺さぶる。

「別に俺はお前を楽しませる為に雇われた訳じゃないぞ、護衛はちゃんとしてるんだからいいじゃねーか」

すねたように口を尖らせて、ヴァスガルトが応える。名前のことで散々に笑われたのがよほど堪えたらしく、それで機嫌を直す様子もない。

「だ一め、それも仕事のうちよ。それとも私の機嫌を損ねて、仕事を台無しにしたい？」

「ぐっ……」

そのメルエーヴェの言葉に、ヴァスガルトがびくりと背中を丸める。この年端もいかない少女が自分以上に頭が回るということは嫌というほど思い知らされていたからだ。こと悪巧みに関しては、彼女はフォルティスにさえ舌を巻かせるほどだった。

それで勝敗は決したようで、ようやくヴァスガルトはあさっての方を向くのを止めた。が、その時にはもうメルエーヴェの興味はフォルティスの方に向いてしまったようで、彼女はまた悪戯っぽい表情で問い掛けを始める。

「まあヴァスガルトってのが偽名というのはいいとして、フォルティス、あなたはどうか？ その名前はやっぱり偽名？ それとも——」

「偽名だよ、ぎ・め・い。大方どこぞの流亡の王子だとかと思ってるんだろうけどな。名前と肌の色が一緒だからって、そんなに都合よく物事を考えないでくれ」

少女は子猫のように好奇心で瞳を爛々と輝かせたが、しかし彼はそうやってするりとその視線をかわしてしまった。途端に少女は不満げな表情に変わるが、しかしそれにも彼は取り合う様子もない。

フォルティス＝レスレント。先だって病没したラズモーヴ＝レスレントのただ一人の嫡子で、しかし随分前に出奔したまま王の葬儀にも戻らず、後継ぎ問題で国を混乱させている渦中の人物である。死亡説をはじめ諸説紛々と囁かれている中で、我こそは、と名乗りをあげる偽物の噂がしばしば立つのは、つまり万が一にもそれで本物に成り代わることが出来れば、そのままラズモーヴ王の後継者になれるからだった。賭けなど成立するはずもない、莫迦げた話ではあるとしても。

「あーあ、あなたが噂の王子さまだったら面白かったのに。偽名じゃしょうがない、か——あ、そうだ」

「同名程度ならともかく、王権にかかる詐称は問答無用で死罪だ。命がけで茶番に付き合う趣味はないからな」

名案を思いついたとばかりぽんと手を打った少女を、しかしフォルティスは聞きもせずあっさり一蹴する。その読みの通りであつたらしく、メルエーヴェはまた恨めしそうに彼を睨み上げた。と。

「王子さまねえ……本物はどこで何をしてんだかな」

それまでの会話の流れなどまるきり無視して、ぼつり、とヴァスガルトが呟く。

「さあな、どっかで野垂れ死んだんじゃないか？」

と、フォルティスはそう素っ気なく返した。

「夢がない男どもねえ、それじゃ面白みがないじゃない。ひょっとしたらどこかで何かを企んでとか、そーゆー想像はない訳？」

「ほう、例えば？ 当然、王位を継ぐよりいい話なんだよな？」

「うっ……」

面白がってすかさず問い返すフォルティスに、咄嗟にいい案も浮かばず唸るメルエーヴェ。隣のそのやかましい遣り取りには耳を貸さなかったようで、ヴァスガルトは更に言葉を続けた。

「ま、出てこないってことは王さまになる気はないってことだよな？ ってことは、俺が王さまになってもいいってことだ」

「はあ？」

どこからそのような発想が出てきたものか、一人で納得してうんうんと頷いている彼の顔を、メルエーヴェがひどく怪訝そうな面持ちで覗き込む。が、その瞳の輝きを見る限り、彼は至って本気でものを言ったものらしい。

「どうしたよヴァス、いきなり権力に目覚めたか？ お前が？」

「だって、王子さまが出てこないってことは、誰も王さまにならないってことだろ？ なら、俺がなったっていいじゃねーか」

フォルティスも彼が熱に浮かされたものかのように恐る恐る問い掛けたものだが、さりとしてその様子もありはしない。

「んー……まあ、なりたいと思うのは自由だけだな。だからって、王さまってのはそう簡単になれるもんじゃないぞ？」

「それくらい分かってるさ。どうしたらなれる？」

子供に諭すように易しく言うフォルティスを、逆に見詰め返して更にヴァスガルトが尋ねる。子供のように真っ直ぐな視線を向けられると、もう答えようもなくなってしまって、フォルティスはどうしたものかと視線を泳がせた。

「どうしたら……ってもな」

「そうね、皆が納得できるだけの力を示せばいいんじゃない？ といっても半端じゃ駄目だろうから——」

東の山向こうの方から響いてくる地響きのような咆哮を三人が聞いたのは、ちょうどその時であった。それはダルケオ山脈に住まう者なら知らぬ者のない理不尽な存在——隻翼の暴竜クルヴォレクの咆哮だった。

クルヴォレク——ゾミウ山の麓の洞窟をねぐらとし、周辺に近づく者を容赦なく喰らうという大陸最強の暴君である。幸いにして片方の翼を失っている為に飛び立つことは出来ず、こちらから近づかなければ危険はない。が、これが山脈と中原の往路を塞いでいる為に東西は陸路での交流を断たれ、それ故メルエーヴェも海路を伝って聖都レイゼルクへと至る不便を強いられている。

とても人為で討ち果たせるものではないが、しかしレイゼルクの教団が莫大な懸賞金をかけるなどして、もしこれを討つことが出来たならばその名誉は王や諸侯の比ではないといわれるのも、なるほど確かな話ではある。

これほど離れていても心胆寒からしめるかの暴竜の咆哮を聞いて、しかし何を思いついたも

のか、メルエーヴェはにやりと笑った。

「そうね、あの暴竜を倒すことが出来たら、私が王さまにしてあげる」

ばかり、とすかさず少女の頭を叩いたのはフォルティスの方だった。振り向けば半眼でこちらを見下ろしている。

「あんな化けもんどろってんだ。出来る訳ないだろう」

「いいじゃない。言うだけなら自由って言ったの誰よ」

「そういうことを言ってるんじゃないでな——」

「——メル、それ本当か!？」

言い合うメルエーヴェとフォルティスの間に割り込むようにして、ヴァスガルトはおもむろに少女の両肩を掴んだ。彼女の言葉をすっかり本気にしたらしく、彼は彼女の首ががくがくと振られているのも気にせず、掴んだ肩をゆさゆさと振り回している。

「ほん……ホント……っだから、止め、て………目が回る……」

「本当だな!？ よしフォルティス、なんかいい方法あるだろ。考えてくれ!」

散々振り回されてふらふらになったメルエーヴェを、彼は今度は高々と持ち上げて喜びを表現したものだ。

呆れ果てたフォルティスが、額に手を当てて呟く。

「単純なうちの相棒を乗せてくれるな、と言ったんだよ、俺は」

しかし、糸の切れた人形のように茫然自失の状態ですらヴァスガルトに抱え上げられ続けるメルエーヴェに、その呟きが届くことはなかった。竜殺しの大業に一刻も早くかかるべし、とヴァスガルトがそのままレイゼルクへと走り去ってしまったからである。

そうして到着したメルエーヴェが丸一日寝込んだこと、ヴァスガルトのおかげでフォルティスまで傭兵団長の説教を受け、更に報酬を減額までされたことは、この際、実に些細なことであった。少なくともヴァスガルトにとっては、のことであるが。

災厄が起こってより、すでに百余年が過ぎていた。

が、未だに——或いは百年過ぎたが故にか、災厄が如何なるものであったかというのは伝えられていない。天災なり人災なり、いかがかと推し量るだけなら、それは容易かろう。しかし、過去の失われた事象を正しく知ることは容易ではなかった。

そう、多くのことが災厄によって失われたのだ。

城砦。宮殿。都市。橋梁。よく整備された街路。いや、形あるものばかりではない。平穩。安寧。文化文明。歴史。叡智。築城、造船などの様々な技術。或いは——魔術。

地を割り天を裂き、更にそれは人の探求してきた知識や技術というものさえ奪ったのだという。当時を知る者たちは皆畏れて口を閉ざし、一つとして言葉を継ぐことはなかったから、彼らがひどくその災厄を畏れたのだということの他には何も伝わってはいない。だから、何が失われたかということ、それすらもはや知る術はなかったのだ。

しかし、人はそのような過去は置いて、復興を遂げることが出来ていた。村を作り、街を築き、国を興した。その中でもレスレンティオ王国は災厄以後最大の版図を持つ大連合王国となって、一時の安寧を人々にもたらした。

そうして勤勉と協調とによって人は豊かさを取り戻したのだった。しかしその欲深い性のゆえか、ようやく得られたこの豊かさこそが、彼らから勤勉さと協調の精神を奪ってゆく。

その流れの中では、宰相キュクノス＝アダンの王殺しもきっかけに過ぎなかったのであろう。拙い協調を纏めていた賢き王が亡くならずとも、王の権勢を妬み篡奪せんと欲していた者たちが欲望を露にするのは、所詮時間の問題であったのだから。

もはやヴァドステンの王宮に人はなく、諸侯は国を五つに割って奪い合いを始めてしまった。土地も人民も顧みない、一握りの者たちの純粋な権力欲から起こった戦い——それは膠着し、徒に凄惨さを増してゆくばかりであった。

翻弄されるばかりの民衆は戦禍を逃れて彷徨い、救いの地を求めた。その地の名はレイゼルク——女神ナバニールが使徒を導いて築かせ、自らの御座とした聖都。

西へ西へと人々は向かう。豊かな中原を捨て、広大な森林と不毛の山地ばかりの西の地へと。そこにこそ神の救いがあるのだと信じて。

しかし、疲れ果てた人々の前に立ちはだかるものがあつた。戦禍より、長い旅路よりも明らかに絶望に近いもの。悪魔の使役の如くに人を焼き、人を引き裂くもの——暴竜クルヴォレクが。

戦争が、暴竜が、人々を絶望の淵に追いやっている。大陸の混乱は今まさに極みに達しようとしていた。望まれるのは唯一つ。救いだった。

さて。

ヴァスガルトとメルエーヴェが途方もない約束を交わしてから、実に三年が経過していた。

傭兵稼業を営む者の多くは戦功を求めて中原の継承戦争に流れていったが、そのような流れの中でも、彼と相棒のフォルティスはダルケオ山脈に留まり、日銭を稼ぐ生活を続けていた。難民の流入もあって依頼はいや増し、また傭兵人口の減少もあつたので、今は引く手あまたで食うに困るということもない。

初夏、港街スロバン。元は小さな漁村であつたのだが、近年、海路の開拓から目覚ましい発展を遂げた街である。加えて今は更に山脈の外、東のダロウェから絶えず流れ込む難民が、平時には三百ほどしかいなかった人口を十倍近くにまで膨れ上がらせていた。結果、二人は常宿に入る

ことにさえ一苦勞を強いられる始末となったのだ。つてがあったといえども、部屋を取れたことは全く以って奇跡に近い。

「全く、街にいてまで野宿ってのは御免だよな。……ったく、どうしてこんなに人がいるんだよ」

当世の宿屋の典型に倣って、ここも地階部分が酒場となっていたので、部屋を確保した二人は喧騒を避けるつもりでこの隅の隅に席を取って、昼間から酒を呷っていた。

散々満室だと断っているにも拘らず、主人の下には、納屋でもなんでも構わない、板敷きに雑魚寝でもいいから、と人々が列をなして詰め掛けている。その喧騒から離れたとあって、安宿にどれほどの広さがある訳でもなかったから、喧しいことに変わりはない。ヴァスガルトはそれを他人事然と眺め見つつ愚痴を溢していたのだった。

「俺は野宿でも構わなかったんだけどな。見ろよ、あんな小さな子を抱えてる」

向かい合って座るフォルティスも酒盃を持ってはいたが、しかし向かいに座る彼ほど酒が進んでいる様子はない。カウンター前の人だかりに子連れのを認めると、それとなく憐憫の視線を送っているようだった。

「は、お優しいことで。なら、あいつらに俺たちの部屋を譲ってやるか？ 好きにするがいいさ、だがな、ガキを連れた連中なんざ幾らでもいるんだぞ。まずあいつらに部屋を譲ってやったとして、次は何を恵んでやる？ 次の次は？」

仕事明けの疲れに酒と喧騒が効いたか、ヴァスガルトは絡み酒の態になってフォルティスを問い詰めるようにした。

「ああ、分かってるよ。言ってみただけだ。そんなに怒ることもないだろう？」

ヴァスガルトのその怒りが酒ばかりのことではないのを知っていたから、フォルティスもそれ以上は続けなかった。肩を竦めて、素直に折れてみせる。

「分かってるって？ いいや、分かってないな。誰のせいでこんなになったと思ってるんだ？ 継承戦争！ 手前勝手な連中のせいで沢山の連中が苦しんでる。このスロバンだけじゃない、レイゼルクにもダロウエにも難民が溢れ返ってる。あのクルヴォレクだって毎日毎日獲物が芋づる引いたみたいになってくるってんで悲鳴を上げてる始末だ。

それなのに、お前は目の前の一人二人にばかり気を取られていやがる。それじゃ何も変わらないって、分かってるだろ？」

だん、と酒盃で軋むほどテーブルを叩いて、ヴァスガルトはフォルティスに詰め寄った。それで一瞬辺りが静かになるが、しかし店はまたすぐに喧騒を取り戻す。フォルティスは何を思ったものか、薄く笑って、何を言うでもなくヴァスガルトを眺めていた。

「何だよ、急に黙りやがって。気味悪いな」

そのような反応は思ってもみなかったのだろう、興が冷めたか、ヴァスガルトの目からずっと熱が引く。

「いいや、何でもなし。気にするな」

「——いいえ、気になるわ。今の彼のご高説にどのような感想を持ったか、是非聞かせて頂きたいわね。ねえ、フォルティス＝レスレント？」

再び竦ませようとした肩に手を置かれて、はっとフォルティスは後ろを振り仰いだ。そこからは、場違いな黒の外套を纏った白肌の少女が、真っ向から彼の目を不敵に見返してきていた。

「ここ、座ってもいいかしら？ まさかいきなり逃げ出したりはしないわよね」

視線は彼から外さず、しかし彼やヴァスガルトの返事も待たずに、外套も脱がず少女は席に着いた。

「レスレント？」

「そう。知らなかった？ ——でしょうね、そんなことを軽々しく人に話すくらいなら、とっくに王都に戻っていたでしょうから」

鸚鵡返しに繰り返すヴァスガルトの声に、無知を哀れむように少女が応える。

「メリーシャヤの手の者、か」

「お母さまの、でしょう？ 躰に失敗したとは聞いていたけれど、母親の名をこうも憎々しげに吐くほどとはね」

皮肉たっぷりに動く少女の舌に、フォルティスがぴくりと眉を動かした。

「あれに躰けられた覚えはないな。母親だと思ったこともない——で、何の用だ？ ま、大方の予想はつくが」

「……フォルティス？」

話に取り残されて、ヴァスガルトが声をかける。いきなりのことだ、不審げな声の響きも仕方のないことであろう。が、それに構う余裕は今のフォルティスにはなかった。

「悪いな、ヴァス。詳しい話は後だ」

「あら、彼は除け者？ かわいそうに。相棒なんじゃないの？」

余裕たっぷりに、少女が嘲るような視線をヴァスガルトに向ける。

「使い魔風情が気にすることじゃない。さあ、話を続けろよ」

その仕草に嫌悪を隠さず、フォルティスが先を促す。動じず、少女はそれに応えた。

「じゃ、まずは自己紹介からね。確かに私は王妃メリーシャヤの使いよ。名前はティレイ」

年の頃は十五、六といったところだろうか、小柄な少女である。肌は白く、赤い髪は肩の辺りで揃えられている。目立った特徴はないが、しかし人を食ったような表情ばかりよく作る目は、いやでも印象に残る。

「メリーシャヤはあなたを待っている。あなたがそれを望もうと望むまいと、そんなことはお構いなしに、ね。あなたはラズモーヴの王位を継ぐ者。妙な気は起こさないで、素直に戻って王になって欲しいの」

それは目の前の少女が発したとは思えないほどに、異論を許さない強い口調だった。命令——メリーシャヤからの。だが、それはフォルティスには到底承服出来るものではない。

「俺は王にはならない。メリーシャヤがそれを望もうと望むまいと、そんなことは知ったこっちゃないな。王になりたい奴ならいくらでもいるんだ、そいつらに任せておけばいいだろう？」

幾分か余裕を取り戻して、フォルティスは皮肉を乗せて言葉を返した。

「そう——なら、言い方を変えましょうか。さっき彼が言った通り、王権を篡奪せんとする手前勝手な連中が、あなたのお父さまお母さまが育てた国を好き勝手に蹂躪している。正統に王位を継承すべき者が王座に就かなかつた為だね。

あなたには、王位を継承する義務がある。ラズモーヴの子として、今のこの混乱を収める責務が。誰でもいい訳じゃない、あなたでなければならないの。ラズモーヴの血を引く者、レスレント王家の後継はあなただけなんだから」

その余裕を打ち砕くように、更にティレイは続けた。高貴なる義務——それはフォルティスとて自覚している。自覚していて尚そうしないのは、彼なりの理由があつてのことだ。

だからといって、目の前にいる人々の苦しみから目を背けることも出来ない。それが出来るほど、彼は非情にはなれなかった。目の前の魔女は、その心の柔らかいところに無遠慮に爪を突き立ててくる。

確かに、大過なく王位を継げるのは自分ひとり。自分が王位に就けば今のこの混乱は収められ

る——

「おい、何なんだよ、勝手に話を進めやがって。なあ、辛気臭い顔してないで俺にも分かるように説明してくれよ」

そんな彼の内面など知りもせず、不躰に話に割り込んできたのは、無論のことヴァスガルトであった。どのようにあの喧騒の中を掻き分けたものか、要領よく追加の酒を仕入れてきていて、険悪な雰囲気など気にもしないのか、彼は気前よく少女の前にも酒盃を置いていた。

「こいつが王子さまだっての、本当なのか？ だったら確かにこいつが王さまになれば継承問題とかは収まる訳だよな。よしフォルティス、王さまになれ。そしたら俺は二番目に偉いのにしてくれりゃいいからさ」

説明しろといいながら勝手に話を進めてしまうヴァスガルトに、ティレイも呆れた風に口を空けてしまっていた。それを見て、ふっと拍子抜けしたようにフォルティスが笑い出す。

「あ、あんたねえ、二番目だか三番目だか知らないけど、あんたみたいな田舎者が王宮に入れる訳ないって少し考えれば分かるでしょう？ 王都に帰るのは彼一人、あんたはここに残るの。いい？」

「何だよ、いちいち偉そうに。決めるのは王さまだろ？ お前の決めることじゃないだろが。そんなに言うなら、お前こそ残れよ」

肩を戦慄させるティレイの言葉を、しかしその半分も彼は聞き入れてはいなかった。政治の作法や力学など知りもしない田舎者の物言いである。が、無知の故とはいえ、その素直な考え方にフォルティスは救われたような気持ちになることが出来ていた。

それで思い出したことがある。三年前のたわいのない口約束。人が竜を殺すなど出来るはずもない、と一笑に付したまま忘れていたが、しかし面白い考えである。ヴァスガルトを王に据えるのも面白いかも知れない——フォルティスはそう考え始めていた。

彼の予想の通りなら、人為を越える力を、目の前の少女は持っているはずだった。魔女——或いは暴竜よりも遥かに畏怖される存在であるなら。

「中原の混乱を収めること——そうだな、それは確かに必要なことだ。だが、その前にどうしてもやっておきたいことがある。ティレイ、君もそれを手伝ってくれないか？」

突然大笑いを始めたかと思えば、今度は途端に殊勝な態度を見せる。そんな彼の思惑が読めず、ティレイは初めて困惑げな表情を見せた。が、すぐにその表情は消える。

「どうしても？ ま、聞くだけは聞くけど……なあに？」

「暴竜の噂は聞いたことがあるだろう？ あれをな、倒しておきたいんだ」

表情こそ押し隠したものの、怪訝そうな声に動揺の色を残したティレイの言葉に、フォルティスが不敵に笑い返す。不測の事態に対応し切れていない。駆け引きに練れている訳ではないのだろう——彼女の反応から、そう彼は読み取っていた。

「ああ、あれね……念の為に聞くけど、何の為に？」

「俺が王都に戻ったとあって、それですぐに混乱が収まる訳じゃない。戦争が長引けば西に流れ込む難民はこれからどんどん増えてくる。王になってしまったら、こんな辺境に気を取られている訳にはいかないだろう？」

「だったら、その前に倒しておかなきゃな。それに、竜殺しの名声を得ておけば鳴り物入りで王宮に戻れるんだ、その後の統治にも役立つんじゃないか？」

彼がそれを言う間、意図を読み取ろうとしてだろう、ティレイは彼の目を凝視していたが、しかし少女はやがて大きく溜息をつく視線を外した。

「悪くはない話ね……でも現実味が無いわ。あなたと私であの暴竜を？」

「——怖いとでも？」

訝しげに問うティレイを、フォルティスが嘲う。

「まさか。それじゃ私一人の手柄になるんじゃないか、って思ってね。他力本願で竜殺しを名乗ろうっていうのは虫が良すぎるんじゃない？」

嘲われたこと、それが少なからず癪に障ったのだろう、少女は嫌悪を露にして言い返してきた。

「いやいや、そこまでやってくれとは言わないさ。多少力を貸してくればいい。後は俺たちでやるから——どうだ？」

「どうだ、って言われてもね。竜殺しって、そんなに簡単に出来るものだった？」

「簡単な訳はないさ。だから人を集める。幸い懸賞金が山のようにかけられているからな、それを山分けするって言えば、結構集まるんじゃないか？」

そう楽観的に笑って、フォルティスは返事を待った。周囲の喧騒をよそに、このテーブルにだけ奇妙な沈黙が流れる。やがて何度目になったものか、諦めの溜息を吐いて、ティレイが頷きを返す。

「分かったわよ、やり過ぎない程度に手は貸してあげる。で、どうすればいいの？」

しかし、問われた当のフォルティスは、きょとん、と呆けたような表情を作った。

「さあ、どうしたもんかな。今思いついたばかりのことだし、そうそうすぐに名案も出ないだろうけどな」

「……今……思いついた？」

目の前の男——玉座の主たるべく教育を受け、算段と謀略に長けたレスレント王家の継承者が、よもや思いつきで今まで話を進めていたとは思ってもしなかったのだろう。そのフォルティスの物言いに、呆気にとられた表情のままティレイは凍りついてしまった。それを見ると、にやり、とフォルティスが悪戯っぽく笑う。

「ああ、たった今、な。——だからって、まさか降りるなんて言わないよな？」

それを聞くや、ティレイは深呼吸をするようにして深い溜息をつき、そのままテーブルに突っ伏してしまった。やがて観念してかのそりと起き上がると、その高さから半眼でフォルティスを睨み上げる。

「言わないわよ、そうしたらまた逃げる気なんでしょう？ 本当なら今すぐ連れて行きたいくらいなのよ、私は」

「はっは、よく分かってるじゃないか。その通りだよ。——おいヴァス、……ヴァス？」

してやったり、と笑って、フォルティスは向かいに座っているはずのヴァスガルトに声をかけた。が、ずっと放って置かれたままだった彼は、酒に飲まれたかまたは単なるふて寝か、盛大にテーブルに突っ伏して寝息を立てていたのだった。

それから——ヴァスガルト、フォルティスの二人組のところにティレイが押しかけてきてから数日後のこと。昼より少し早い時間、とはいえ予定よりは幾分遅めに、聖都レイゼルクにスロバンからの巡礼団が到着した。

白亜の聖殿とそれを母体に広がる敬虔な者たちの住処は荘厳さを以って彼らを迎え、彼らはその壮大さを目の当たりにするに、ただただ感嘆の吐息を洩らしていた。感動と安堵とがない交ぜになってだろう、感極まって涙する者もみられる——だが、巡礼団、といったところでつまるところは難民の一群に過ぎない。

聖都の呼び名の由来にもなるナバニール教団は、このレイゼルクのみならずダルケオ山脈中に広く教えを広めていたから、寄進寄贈の蓄えで難民に施しを与えることは、今は出来ている。しかし、彼らに新たな土地を与えるにしても実りを期待出来る土地は限られていたし、またこれ以上の難民の流入を許せば、来期の収穫を待たずに今ある蓄えを出し尽くすことにもなりかねない。

打開策が必要だった。それも小手先ばかりの生半なものでは意味がない。それは今の窮状を切り拓く為には、画期的かつ効果的なものでなければならなかった。

現教主たる彼フェイトンは、外とはまるきり対照的な薄暗い彼の執務室で頭を抱えていた。そのような考えが簡単に出てくるなら、苦勞はないのだ。それが出てこないからこのように悩み苦しんでいるのである。

聖都に辿り着いたことを純粹に喜ぶ巡礼者たちの喜びの声は、このかび臭い執務室にも届いてくる。しかし、彼らもすぐにこの現実を知り、沈黙することだろう。これまでに訪れた多くの巡礼者たちが皆そうであったように。

教主たる彼は、頭を抱えている。打開策を打ち出さなければならないから——それもある。だが、今彼がそうしているのは、このような時に大風呂敷を広げてくる痴れ者がいるからでもあった。

「——教主、聞いておいでですか？」

雑然とした彼の執務机の前に立った若い修道士は、先からずっと宗教者らしからぬ多弁さで教主に詰め寄ってきていた。慇懃無礼とはよくいったもので、彼を尊敬するさまが表向きばかりのものであることは、老練の彼でなくとも対面していればすぐに分かる。

サルディエ＝ローデンウェリ——前教主の甥にあたる若者である。白肌の、線の細い青年だった。まだ少年の域を脱したばかりだというのに、教団の頂点にいた祖父の保護の下で育った為か、教義典礼などはよそに置いて、尊大な振る舞いばかりよく身につけている。

その上どこで妙な知恵をつけてくるものか、度々無謀な提案を持ちかけてくるのでフェイトンも彼を持って余していたのだが、しかしその中でも今回の提案というものは度を越していた。

ゾミウ山の暴竜を倒して土地を手に入れる——そのようなことが出来るというなら、とうの昔にやっている。それが出来ないから莫大な懸賞金を懸けているのだし、それでも暴竜討伐に名乗りを挙げた者は少なく、当然ながら竜殺しを成し遂げた者などはまだ一人も現れてはいないのだ。

「それは今までの者たちが名誉を惜しんで数に頼もうとしなかったからでしょう。十人やそこらで徒党を組んだところで、あれを倒せる訳はありませんからね」

大きく張った鷲鼻を誇示するように顔を近づけてきながら、サルディエは持論を披露してきた。

それが真実の一片を含んでいることは、フェイトンにも分かっている。どれほどの勇名を馳せようとも、たかが人間が十やそこら集まったところで、山ほどの体躯を誇る地上最強の獣に敵う

訳はないのである。

しかし、それは同時に詭弁でもある。十が百に変わったとて、それで人が神や魔神に化ける訳ではないのだから。そうしたところで、結局は単に犠牲を増やすばかりのことにしかならないだろう。

無謀にもほどがある——そう思い、返答の代わりにフェイトンは重苦しく溜息をついた。

「おや、お気に召しませんか？ いやいや、無謀に聞こえるのも無理はないでしょう。私とて先ほどこの話を持ちかけられた時は戯言としか思えなかったのですから」

フェイトンの反応を見て、サルディエは攻め方を変えたようだった。弁舌から熱を引かせて、教主の胆を探るように言葉を選ぶ。それで、話の風向きが変わった。

「持ちかけられた、と？ サルディエ、これはお主の考えではなかったのか？」

誰が考えたからといって、その無謀さが変わることもなかっただろうが、しかしフェイトンはその言葉に不意に問い返してしまっていた。しまった、と気付いたのは問い返してから。手遅れだった。

その表情を見るに、してやったとばかり、にわかにサルディエの目に色が戻る。

「私の？——いえいえ、とんでもない。さきほど、また難民の群れが流れてきたのはお気づきでしょう？ その護衛をしていた傭兵が迎えの者と押し問答をしております。何ごとかと問い質してみれば、暴竜退治の為に兵を集めるから、懸賞金を前借りしたいと申しているのですよ。なかなか面白い提案だとは思いませんか？」

サルディエは嬉々としてそれを言ったものだが、しかしそれを聞くとまたフェイトンは表情を消してしまった。それが誰の戯言でも知ったことではないが、傭兵というなら始末が悪い。前借りと言って、結局は酒代の無心に来たという程度のことだろう。そのような話なら珍しくはない。

「思わんな。とつとつ追い返して来い」

「ははあ、たかりの類だと思っておりますね？ そうでしょうそうでしょう、私も初めはそうだと思いますとも。ですが、その傭兵というのがフォルティスとヴァスガルトという二人組で——あ、ご存じないかもしれませんが、最近ではかなり名の通った二人組でしてね。この二人なら、その辺に転がっているやくざな傭兵よりはよほど信用できるでしょう。

それに加えてフォルティスという男は中々の知恵者とも聞いていますから、竜殺しとて何か成算があつてのことかと」

フェイトンがどれほど冷淡に言っても、まるで余裕の態を崩さずにサルディエは食い下がってくる。教主とてその二人組の噂なら耳にしたことがないではないが、だからといって、教団の財産で博打を打つ気になれる訳はない。

もう何も言うつもりはなかった——ここまで話を進めれば、誰が何を言ったところでこのサルディエという男は耳を貸さず、ただひたすらに自分の言い分を通そうとするだけだから。後は彼が無駄を悟って諦めるまでの根競べの時間だった。

が、サルディエはその教主の態度を見て取ると、含みのある笑みを浮かべた。嘲笑にも似た、毒のある笑み。

「無論ですが、私とて、彼らに金を与えたとしてそれで竜殺しが果たされるとは考えてはおりません。いえ、恐らく彼らが敗れることは必至であることでしょう。ですが、それならそれでよいではありませんか。金など貸さず、難民の中から兵を召し出せば、それがそのまま口減らしになるのですから。彼らに兵を集めさせるより、その方が簡単に人数を集められますし、なにより金がかからずに済みます。それに——」

それは聖職にある者として、口にしてはならない酷薄な言葉であるはずだった。しかし、戦禍の煽りを受けて抜き差しならない状況に陥りつつある今、口減らし、という言葉は魅惑的な響きでもってフェイトンを魅了した。

それで、禍々しいサルディエの笑みの先にある企みを、眉をひそめつつもつつい促してしまう。

「——それに？」

「もし万が一彼らが竜殺しを果たしたならば、その功績は彼らのものであると共に我々が教団のものともなりましょう。暴竜がいるために手の出せなかった土地も拓くことが出来るのですし、どちらに転んでも教団に損はありますまい？」

そのように言われれば、確かにそれは無謀な賭けではなく、むしろ堅実な投資のように思われた。聖職者としての罪悪感は否めない。が、今のこの閉塞しきった現状を鑑みるに、全体を生かすために多少の生贄は必要だということも確かなことだったからだ。

「しかし……そのような真似をして暴竜を刺激し、この聖都を危うくするようなことはなかるうな？」

それは、懸念というよりは教主の中の善なる面にとっての最後の抵抗であるように、彼自身には思われた。真実そのような脅威があるとは、フェイトンも思っていなかったのだから。

「翼が対をなさねば、鳥が空を舞うことはありますまい。それは竜とて同じこと。隻翼であるが故に暴竜はゾミウの檻に封じられているのですから、この聖都に危険が及ぶことはあり得ません。——無論、逆鱗に触れた者たちばかりは皆あれの餌食になるでしょうが」

フェイトンの僅かに残った躊躇いをそう言って無残に踏みにじると、サルディエはとうとう満面の笑みを浮かべてみせた。

聖都を預かる者として、善良であることを諦めたフェイトンは、しかし悪辣になる覚悟も持たず、そのこと的一切をサルディエに任せると言い渡した。

齢五十を越え、この時代にあってはかなりの高齢でありながらも壮健さを誇っていたフェイトンだったが、しかしこの日を境にどっと老け込んで見え、ついには健康を害して臥しがちの生活を送るようになっていった。だがそのようなこと、サルディエにはもはや何の関心も与えなかったのだった。

サルディエのとりなしでフォルティスらがナバニール教団の後援を得てから半年。それは長いような短いような時間だった。

フォルティスとティレイを中心として竜殺しの計画が綿々と練られ、またその計画に従って着々と準備が進められていく。

ゾミウ山の麓——暴竜クルヴォレクが狩場としている場所は、サルディエが檻と例えた通り、ぐるりと環状に稜線が巡っていて、巨大なすり鉢のような窪地となっている。稜線にはところどころに裂け目があって、ここから運悪く迷い込んだ者たちが暴竜の餌食となる訳だが、しかしそれは暴竜自身が通り抜けるにはあまりにも狭すぎるものようだった。

それは即ち、いうまでもなく暴竜の行動範囲はあくまでもその窪地の中に限られる、ということである。ならばその外から狙い撃ちにすればよい、というのが計画の第一段階だった。固定砲台を設置して、標的の行動範囲外から攻撃する——無論、火薬も砲もない時代のことであるから、主としては投石器、石弓を用いることになる。これの設置はフォルティスが指揮をとったが、当然、それらを作るには大量の物資、ことに木材石材が必要となった。

教団側が特に力を入れたのがこの部分であった——というより、サルディエはこれをレイゼルク周辺の開墾事業と組み合わせ、難民の殆どを、それこそ働ける者は女子供でさえ動員して行わせた。このことによって聖都周辺に未開墾の土地はなくなったとっていいだろう。効率重視の性急な指示の下での物資の切り出し、輸送にかかる作業の中、発生した幾つかの事故で少なからぬ人命が失われたが、このことまでサルディエが期待していたかどうかは定かでない。

それと並行して、暴竜の生態に関する下調べも行われた。ヴァスガルト率いる傭兵隊がこれにあたり、平常の様子、また獲物が迷い込んだ時の反応などを観察し、また隙を見て巣穴から鱗を盗み出したりして、有効な機、有効な攻撃というものを模索した。

結果、当時の武器の主流であった青銅器程度ではまるで歯が立たない、ということがすぐに明らかになった。フォルティスの持つ鉄剣が辛うじて竜の鱗の堅固さに対抗していたが、しかしこの時代、鉄器を扱えるのはまだ鉱床の亜人ドゥメラクのみであった。彼らに限らず亜人種と呼ばれる者たちは一様に人間嫌いで通っていた——人間の亜種などと称されれば当然のこととも思われる——のだが、ここは教主の責務としてフェイトンが交渉に当たり、今年聖都に集められた酒の半分を与えるという条件でダルケオ・ドゥメラク族の協力を取り付けることが出来た。

集められた傭兵はおよそ二百。その殆どに鉄製の武器が行き渡り、またこの地方では例を見ない緻密な軍事訓練が幾度となく繰り返された。その中心には、フォルティスから指南を受けたヴァスガルトがあり、最後には、彼の指揮で自在に軍が動けるようにまでなっていた。

また、フォルティスとの約束に従って、ティレイもそれらの行動とは全く別に独自の行動を取っていた。投石器や石弓が次々と設置されるゾミウ山周縁を巡り歩き、魔術の仕掛けなのだろう、何やら物を置いたり紋様を描いたりしていた。時間が要る、と彼女は言った——半年というのは、諸々の準備に費やした時間であるが、しかしそれと同時に、ティレイが要求した時間でもあった。魔女がその知恵を絞って何をしていたのか、ということは明らかでない。暴竜の力の源を断つ、という端的な説明があっただけだ。

そうして、半年は瞬く間に過ぎていった。長かろうが短かろうが、もはやそれは過ぎた時間である。為し得る限りの備えは果たした。

そして、決戦の時は来たのだった。

鉛色の雲が空を覆っている。

時節は冬の入りという辺りだが、ダルケオ山脈はすっかり雪化粧を済ませていた——このゾミウ山周辺を除いては。

暴竜が蠢く窪地と、人間たちがせわしなく動き回ったその外周部だけは、雪は積もるそばから踏み汚されて、化粧どころではなかったのだった。

だが、今だけは竜も人も動いてはいない。ただ、空気はこの上なく緊張して、まるで皆を一様に押し潰しているかのようであった。

皆、開戦の狼煙が上げるのを待ち構えているのだ。窪地の中央に四肢を張り、生ける城砦の如く四方を威嚇してみせる暴竜さえも、それを心待ちにしているのかもしれない。

その緊張の中、ヴァスガルトとフォルティスは決戦部隊となる傭兵隊を後方に置いて、今は二人でいた。この時、ティレイは派手な仕掛けを起こすといって別行動を取っている。

「いやー、長かったなあ」

「……、確かに。後は結果を出すだけだ」

自身も強く感じている緊張を紛らわす為だろう、努めてのんきに言うヴァスガルトに、フォルティスが半眼で応える。

「結果——か。きっちり出さないとな」

「ああ、その通りだ。——なあ、一つ聞いてもいいか？」

「ん？ どうしたよ、改まって」

「いや、な。前に言っただろ、俺が王になる、って。どうしてそう思った？ 贅沢がしたくなつた訳でもなからうに」

「贅沢ねえ……悪かねえけどよ、そりゃ柄じゃないな。なんでって、そんなの、いきなり聞かれても困るっての」

そう言って、腕組み首捻って、いかにもという態で考え込む。この姿勢を取った時の彼の考えといえば、大概休むに似たりといったところではあるのだが、そうはいえども彼は彼なりに考えているようではある。それ故、フォルティスの柔和な眼差しにも気付く様子もない。

「でもまあそうだな、今のまんまって訳にもいかないだろ？ このまま戦争が続いたら、ここは難民で溢れちまう。家も畑も足りなくなるし、したら俺たちの稼業だって、やっていけなくなつちまう。お前がちまちま施しをくれてやってるのは知ってるし自由だけどな、それだっていつまでも続くもんじゃねえし、第一なんの解決にもなりやしねえんだ」

たどたどしいその返答を聞きつつ、フォルティスはヴァスガルトの出自を思い出していた。

彼は親の顔を知らない。とある傭兵団に拾われ、団長を父親代わりにして育ったのだという。とかく盗賊まがいのならず者集団と思われがちな同業者たちとは一線を画し、その傭兵団は人々に信頼される数少ない一団だったらしい。

フォルティスが彼と出会った時にはもうすでにその傭兵団は過去のものになってしまっていたが、その団長の仁徳は確かに彼に受け継がれている。——こいつは親父譲りのとびっきりの馬鹿でな、団の仲間も依頼人も、見知った顔なら全部自分の身内だと勘違いしちまうんだよ——と、かつて同じ団に属していた古株の傭兵が嬉しげに彼をそう評していたのを思い出す。

養父から確かに受け継いだもの。それは万民を収めうる損得抜きに底深い懐。

「戦争を止めさせるんだ。王になりゃ、それが出来る。だろ？」

真っ直ぐな眼差しで、ヴァスガルトが問う。フォルティスの目には、その彼の全てが眩しく映っていた。

「……………、そうだな。——ほら」

言って、フォルティスが差し出してきたのは、彼が愛用している長剣だった。それは先には竜鱗を両断してみせた切れ味抜群の鉄剣である。急拵えだった為ということもあろうが、フェイトンの働きでドゥメラク族に鍛えさせた鉄剣でさえ、竜鱗に傷をつけることは出来ても、結局これほどの切れ味は得られなかった。故にこれは最も——或いは唯一クルヴォレクに有効な武器と目されていた。

つまりは、この剣を持つ者こそが最も竜殺しの名誉に近い、ということになる。

「……………あ？」

ヴァスガルトには、それを差し出してくるフォルティスの意図がまるで読めなかった。が、そのようなことには構わず、彼は言葉を続ける。

「お前が使ってくれ。俺には必要ない」

そう言うと、彼は剣をヴァスガルトに押し付けるようにした。訳も分からぬままただ反射的にヴァスガルトがそれを受け取ってしまうと、彼はさっと手を引いて剣を手離してしまう。

「何言ってるんだ、王になるのはお前だろ？」

「俺はな、……王になるつもりはないんだよ。竜殺しはお前を王にする為のお膳立てのつもりなんだ、そうしたら俺が手柄を立てる訳にはいかないだろ？」

するりとヴァスガルトの脇を抜け、フォルティスはそこから遠くを見るようにした。そこには、怒気を露にした暴竜が彼らの出方を窺っている。

「王にならない？ 何言ってるんだ、俺よりお前の方が頭いいじゃねえか。お前が王になればそれが一番だろ？」

その彼の方に向き直り、背中に向けてヴァスガルトがこともなげに言う。彼の中では、世の中というのはどこまでも単純明快な造りをしているようだった。権謀術数に倦んだフォルティスには、それがとても心地よく感じられる。

「向いているのはお前の方だよ、ヴァスガルト。お前が王になれ。王国も何もかも、古いものは皆打ち壊して、な。災厄に囚われた時代から皆を解放してやってくれ」

背を向けた姿勢のまま、フォルティスが告げる。その背中を見るに、ふと彼が遠く見遥かしているのは暴竜などではなく、もっと遠いものであるのではないか、とヴァスガルトはそう思っていた。だが、そうだと、それが何かなど彼に分かる筈もない。

ともあれ、フォルティスが王位を継ぐことを拒絶しているのは、もはや改めて問うまでもないようだった。説得に耳を貸さないのはお互い様だったから、何を言ったところで意味もないことだろう。

「……いいんだな？」

「ああ、よろしく頼む」

神妙な面持ちで言ったヴァスガルトに、ようやく振り返ったフォルティスは柔らかい笑みを浮かべて応えた。

本心は知りようもない——また、ヴァスガルトはそれを敢えて問うようなこともしなかった。フォルティスから受け取った愛剣の代わりに、ヴァスガルトは自分が腰に佩いていた剣を鞘ごと投げて彼に取らせた。

「さて——始めるとするか」

それぞれに心機を改め、そしてヴァスガルトは進んで稜線の上に立った。次いでフォルティスから受け取った剣を抜き放つと、彼はそれを高々と天に翳してみせたのだった。

「……………はあ」

対面する山向こうから照り返してくる剣の閃きを見て、どうしたものか、ティレイはひどく重々しい溜息を一つついた。

窪地の周囲には夥しい数の投石器や石弓が配備されていたのだが、彼女の周りにはそれはなく、また兵も置かれていなかった。それは、魔術の大仕掛けを動かす為だった。余人を置いたところで足手まといになるだけだったので、それで小さな魔女は一人でここにいるのだ。

仕掛けは二つ。目に見えぬものと、見えるもの——前者はすでに発動している。暴竜の動きようを見るに、もうその兆候も現れているようだったから、効果のほどは時間と共に分かるだろう。

後者は、これから発動させるところだ。傍らに錐のようにそびえるゾミウ山という巨大な岩塊を、暴竜めがけて崩し倒そうというのである。たっぷり半年をかけた目に見えない仕掛け——竜の無尽蔵な生命力の源である、地脈の流れを断つこと——の方が充分に功を奏していれば、衰えた暴竜にこれを避けるような機敏な動きはとれないはずだった。

およそ生物としての常識を超越した竜種のこと、無論これだけで倒せるということはないだろうが、しかし、単純な衝撃としてこれほど有効なものもない。これで効果が上がれば戦意高揚にもなろうし、後は投石器と石弓とで余力を削った上で、主力が暴竜を討ち取ることだろう。

竜殺しの第一の功を挙げることの出来る魔剣の持ち主がフォルティスでなくヴァスガルトだということは、この上なく不服ではある。が、しかしここまで大掛かりな仕掛けを動かした上で更に作為を巡らせる余力はなかったから、ここはフォルティスの企みに乗って恩を着せるしかない。

無論、竜退治自体が彼女の助力の上に為し得るものである以上、これを放棄する手もないではないのだが、しかしそうしてしまえば、契約不履行を理由にあの男が王城への帰還を拒否するなどと言い出すことは目に見えているのだ。

ともあれ、このように暴竜の体臭の染み付いた硫黄臭いところになど長居する気もない。ティレイはゾミウ山の岩肌に描いた紋様に杖をかざすと、日常の言葉とは明らかに違う耳障りな言葉を紡いだ。と——

にわかに紋様が淡く輝いたかと思うや、山は命を得たかのように鳴動し、その振動から自壊を始める。やがて山は神の振り下ろす巨鎚の如く、窪地の中心に向かってゆっくりとその身を傾けていった。

人などとは比べようもない巨躯を誇る暴竜クルヴォレクさえをも小さなトカゲのように見せて倒れこんだ山は、ず……ずん、と腹に響く鳴動と共に周囲を震わせ、そして窪地を土埃で覆い隠したのだった。

窪地を覆い尽くし、更にその外に溢れ出しさえた土埃が次第に収まっていく中、凄まじい怒りを乗せた咆哮がその底から天に向けて立ち昇った。

目の当たりにされた光景の凄まじさから、最初のその一撃で暴竜を倒せたのではないかと淡い期待を抱いた者も少なからずいただろう。が、咆哮はそのようなものは跡形もなく打ち砕いて山々に木霊した。

だが、それさえ人々の戦意を奪い去るに足るものではなかった——一陣の風に土埃が払われ、暴竜のその満身創痕の姿が露にされると、勝機を見出した人々の意思はむしろ高揚し、暴竜に向けて巨石巨木が礮打ちの如くに打ち込み始めたのだった。

背後から倒れこんできた山塊に半身を潰され、今や隻翼どころか両翼を失った暴竜が、もはや逃げようもなくそれを全身に浴びる。左の前足後足だけで巨軀を引きずるようにし、長い首を四方に巡らせて逃れようとするさまは見ていて憐れですらある。そうだとって、今更容赦加減し攻撃の手を緩める訳にはいかなかった。

たっぷり半年をかけた夥しい量の備蓄が消費し尽くされるまでには、半刻すらもかからなかっただろう——周囲を赤黒く硫黄臭い血溜りに変え、半ば木石に埋まるようにしてもなお暴竜は動くことを止めなかった。それどころか、死の一步手前にありながらも火砲の如く吐き出された炎の息は、窪地の中央から稜線まで吹き上がって戦端の一角を崩してさえいた。

しかし、そして——

「行くぞ！！」

それまでずっと虎視眈々と行方を見守っていたヴァスガルトが、氣勢鋭く声を上げると同時、稜線を飛び越えて斜面を駆け下り始める。フォルティスがそれに続き、そしてまた、竜殺しの野望に溢れた二百からなる傭兵隊が、彼らに呼応して四方から散開しつつもそれぞれに暴竜を目指した。

ようやく現れた目に見える敵の姿に、しかし再び暴竜が吼える。半身を潰され、折れた翼が歪に天を衝き、ところどころ鱗を剥がされまともに動くのは首から先という有様でありながら、この地上最強の獣は、なおも痛みも恐れも怒りで塗り潰して、魔眼の如くに人の矮小さを見下すようにしたのだ。

鎌首を巡らせて、東から南東にかけての斜面を炎の息で凧ぐ。心の深層から否応なく恐怖を喚起させる咆哮に身を固くした数十の兵たちが、岩をも溶かす灼熱の炎に巻かれて為す術もなく炭屑と変えられてしまう。

が、そこにヴァスガルトらはいない——彼らは前哨戦であった砲戦の合間に正面から側方へと居場所を移し、更にすり鉢の腹を廻りこんで暴竜の背後へと回っていたのだ。さすがの暴竜とて、背後に口を向けることは敵わなかった。が——

「うわっ！」

最大の脅威を察しているとでもいうのか、それまで岩と岩の間に埋もれていた尾を無理矢理に振り上げて、暴竜クルヴォレクはヴァスガルトらの行く手を阻んだ。

地を割るように振り上げられたそれに、足を取られそうになってヴァスガルトがよろめく。その隙めがけ、背後に目があるかのように鋭く狙いを定めて天頂から尾が振り下ろされた——しかし間一髪、フォルティスが脇から彼の姿勢を支え、そのまま引き下がらせる。

ござっ！——ヴァスガルトの鼻先一寸前を掠めて通った尾は、次には足元の大岩を粉々に打ち砕いてしまっていた。風圧だけでも堪え難い勢いだ、このようなもの僅かにでも掠めれば致命傷になりかねない。

「無事か！？」

「ああ——このっ！」

しかしすぐさま体勢を整えて、ヴァスガルトが反撃を加える。よく見れば尾はやはり動かすことも奇跡に近かったようで、ところどころ肉が抉られ骨が剥き出しになり、今にも千切れそうなほどだった。

ヴァスガルトの一撃は骨には達しなかったにせよ、確実に鱗を裂いて肉を斬っていた。が、そのような状態でなお動いているものに傷を一つ与えたとして、どれほどの効果があるかは疑問に思えてしまう。

その間にも、功に逸る傭兵たちが彼らの脇を抜けて暴竜に迫る。だが、今度は横風ぎに尾が一閃され、彼らはその一撃のみでヴァスガルトらの視界から消し飛ばされてしまっていた。

そうしながらもクルヴォレクは先の仕返しとばかりに間断なく炎の息を吐き、少なくとも首が巡り視界の及ぶ範囲に関しては群れ来る人間どもを一掃することに成功していた。

「やべっ、……後は俺たちだけかよ」

今更ながら、不安げにヴァスガルトが呟く。それは背後に続く最後の兵たちには動揺を与えたようだったが、しかし、長年相棒として行動を共にしてきたフォルティスだけは、それが下手な道化芝居であることを見抜いていた。

「困ったな……この大蛇みたいなのをどうにかしないと、クルヴォレクの首は獲れない、ってことか」

「そのようだ」

思案げな声で彼の後を続けるフォルティスに、ヴァスガルトがこれも神妙な声で応える——彼らが表情ばかり不敵に笑っていることは、背後の者たちには窺い知ることは出来なかった。

今は尾はこちらを威嚇するようにゆっくりと左右に振られている。だが、間合いに入れば途端に襲い掛かってくるだろうことは容易に想像がついた。目がついている様子はないが、しかし何らかの方法でこちらの行動は察知できているようだった。

「このまま野垂れ死にするのを待つ、ってのも一つの手かもな」

「それで死んでくれるんなら、な。——よし、俺が囷になる。しっかり仕留めろよ？」

どうしたものかとヴァスガルトが軽口を叩くのを横目に、先行したのはフォルティスだった。無造作に一步、竜の尾の間合いに踏み込む——と、袈裟懸けに一閃するように尾が振り下ろされる。

しかし慌てず一步後に退いて、フォルティスは難なくそれをかわしていた。その場に爪先で跡をつけて、間合いを測る。

「……、よし」

そしてまた、フォルティスは一步——先よりも大きく歩を進めた。袈裟懸けに振って外した為か、今度は横風に尾が振られてくる。

それも危なげなくフォルティスはかわしてみせた。と、大振りになって外に振られていく尾の先端を横目に、今度はヴァスガルトが剣を腰溜めに構えて飛び込んでいく。

地中から生えた尾の付け根を狙うが、しかし予想外に戻りが早かった為に、ヴァスガルトが剣を突き立てられたのは尾の半ばほどのところとなった。骨に達する手応えがしたが、しかし彼が更に踏み込むより先、クルヴォレクは尾を持ち上げて剣を振り落とそうとしてきた。

が、ヴァスガルトは剣を手放さず、尾は装備を固めた大の男一人を剣を支えに持ち上げさせられることとなった。そのまま右に左に振り回されても、しかしヴァスガルトは何とか剣を抜かれまいと持ち堪える。だが、しかし骨を断とうにもこれでは力の込めようもない。

と——クルヴォレクは尾を振るのをやめ、一際高くそれを振り上げた。高く高く天を衝くよう

に掲げ上げられたヴァスガルトが息をつく間もなく、それは今度は勢いよく地面に叩き降ろされる。

「がっ！——」

岩塊の敷き詰められた地面に叩きつけられれば命はない。間一髪飛び込んだフォルティスに受け止められてヴァスガルトは命を救われたのだった。しかもそれどころか、彼はその叩きつける勢いを利用して、剣を貫き通してさえた。

受け止めたフォルティスごと地表に組み伏せられながらも、しかしヴァスガルトはそのまま剣を捻った。ぼきり、と丸太をへし折るような鈍い音がして、それから二度三度の大きな痙攣の後で、ようやく尾は動きを止めた。

「ありがとな、フォルティス——生きてるか？」

尾を押し退け、起き上がりつつヴァスガルトは下敷きになっていたフォルティスに声をかけた。

「……ん、なんとかな」

鎧を着込み、柔軟に受身を取って勢いを殺したとはいえ、固い地表にしたたかに打ち付けられて無事であるはずもない。が、それでもフォルティスは苦悶の表情は見せなかった。

命に別状はないとはいえ、しかしすぐ戦列に戻る余裕もないようである。ヴァスガルトは彼の無事だけ確認すると、後は後続の者たちに任せて先に進んだ。

骨を折られたところから先を無様に垂らして、尾は再び抵抗の素振りを見せていたが、もはやものの役には立ちそうにない。ちらりと一瞥だけすると、彼はもう一顧だにせずそのまま脇を通り過ぎた。

ゾミウ山の残骸やらなにやらが積みあがる上から、いつの間にか竜の胴体の上に移る。土埃に汚されていたが、しかしところどころに赤銅色の鱗が見えて、またあちこち抉られて肉が剥き出しになっているのもすぐに分かる。しかし血を流しすぎた為か、もうそこから流れ出すものは何もなかった。

不規則に、呼吸の為かヴァスガルトの足元で暴竜の胴体が上下していたが、それももう弱々しい。すでに死力を使い果たしているのだろう、そのさまは哀れという他ない。

「さて、人間さまの恐ろしさを充分思い知らせたところで、止めといくか」

横倒しになった胴体の中央、およそ心臓の上と目される辺りで、ヴァスガルトは立ち止まると剣を突き立てる構えを取った。

と。

『人間さまの恐ろしさ、か。確かにこのわしを倒して見せたのだ、大したものよ』

それが暴竜クルヴォレクという言葉と察するまでに、ヴァスガルトはたっぷりの時間を要した。鎌首を巡らせ、視線の端をヴァスガルトに向けるが、しかしそれは抵抗する様子ではない。

「どうした、今更命乞いでもする気か？」

この状況でもいささかも動じず、むしろ不遜なまでの態度で、ヴァスガルトが言う。と、それを聞いてクルヴォレクはすっと目を細めた。竜の表情など知りようもないが、しかし、嘲るような哀れむような、そのような表情に彼には感じられた。

『命乞いとな？ これは面白いことを言う——このわしが仮初めの生に執着などするものかよ。』

おお、人間とはどれほど憐れな存在であるのだろうか。数に頼み魔術に頼り、それでもわしのところに辿り着いたのはお前一人。おお、おお、なんと弱い生き物なのだろうか』

瀕死の態でありながら、しかし暴竜は饒舌にそう弁を披露してみせた。それを聞くのはヴァスガルト一人、後の者は近づくこともせず成り行きを見守っているだけだった。

「無様な死にかけの大トカゲが、何を言いたい？」

元々気の長いほうではなかったから、持って回ったクルヴォレクの物言いに彼は嫌悪感を露にして応えた。それを聞いて、暴竜がくつくつと喉を鳴らす。

『人間は脆弱だ、ということよ。貴様はわしを倒して栄誉を得るのだろうが、しかし魔術には敵わぬ、大軍にも敵わぬ。人である限りはどうしようもあるまい？

憐れな人間よ、慈悲をくれてやろう。この竜の如き力を得たいとは思わんか？ ならば我が心臓を裂き、我が血を浴び我が心臓を喰らうがよい。さすれば、貴様はただ一人の王にもなれようぞ』

甘言、ととるにも甘味が過ぎる話だった。この暴竜に思うさまの暴虐を許した力を、果たして人間の身で得られるものだろうか。フォルティスやティレイのような深慮も機知も持ち得ないヴァスガルトには、その話を推し量ることは出来なかった。

「貴様の心臓を喰らえと？ 冗談じゃない、そんな得体の知れないものを喰らうほど俺は悪食じゃないんでな」

これまで人間を狩りの獲物としてしか見ていなかったこの暴竜が、今際の際に至って改心する訳もない。妙な話に乗って危機を呼び込むこともあるまい、と思い直してヴァスガルトは再び剣を構えなおした。

『得体の知れないものとな？ 毒か薬か、決めるのはわしではない。それは貴様自身だ。

貴様が王の器でなければ、我が心臓は毒となって貴様を滅ぼすだろう。だが、もしも貴様に王の器があったならば、その時には我が力は貴様のものとなろうよな。

まあもっとも、貴様はすでに竜殺しの栄誉を得る身だ。この上に博打を打つ必要もない。それで満足するような男であれば王の器などあるはずもないだろうて——さあ、見事わしに止めを刺したならば、どこへなりと失せるがよいわ』

それで言も尽きたか、クルヴォレクは首を地に降ろすともう何を言うこともなかった。

しばし考えた後、ヴァスガルトは今度こそクルヴォレクの心臓めがけて剣を振り下ろし、そうして今、多くの人命を戯れに奪った暴竜は、一人の傭兵によって討ち取られたのであった。

災厄以後、ダルケオ山脈最大の脅威が除かれたという事実は、すぐにレイゼルクへと報じられ、そして瞬く間に周辺の街に村に伝えられた。

暴竜クルヴォレク討伐戦において正義に殉じた者はおよそ三百、その大半は傭兵隊であった。犠牲者は決して少なくない——が、しかしそれによって得たものは計り知れない。

今はもう跡形もないゾミウ山跡から戻り、竜殺しの英雄を迎えるべくレイゼルクの城門前に集まった人々の喜びようを見て、ヴァスガルトは改めてそのことを思い知らされた。

聖都レイゼルクに辿り着くと、迎えた教主フェイトンから正式に竜殺しの称号を賜ることとなり、続けてまた公に向けての彼の厳粛な説教があったが、とても待ちきれるというものではなかったのだろう。それが終わるか否かといううちに、祝勝の宴は盛大に執り行われる運びとなった。

宴は収穫祭、降臨祭に劣らぬ規模のものとなり、また竜の首と竜殺しの英雄とを一目見ようと日毎に人が増えていったので、祝いの中心とされたヴァスガルトは三日三晩眠ることも許されず、ひたすら勧められるままに酒を呷っていた。それでも全く潰れない辺りは、さすがに英雄の大器とあってよかったです。

そのように、大教団のお膝元とは思えぬ乱痴気騒ぎ——実際のところ教主は早々に自室に引き上げてしまい、多くの場面で接待役を勤めていたのはサルディエだった——が繰り広げられ、その喧騒に紛れてか、誰もそこからフォルティス、ティレイという陰の功労者が姿を消したことに気付く者はなかった。また、気付いてもヴァスガルトは二人を敢えて探そうとはしなかったようである。

そうしてたっぷり七日ほど宴が続き、皆宴に倦んでようやく幕が引けると、それからやっと正式に懸賞金の分配というような話も行われるようになった。

フォルティス、ティレイの二名が姿を消したことでヴァスガルトは功を独占する形となり、懸賞金の半分を得て、後の残りを生き残った傭兵や工夫らで分配することとなった。が、皆を驚かせたのは、彼がその莫大な報酬を受け取る権利を放棄したことであった。

確かにこの支出が都市としてのレイゼルクの経済を圧迫し、結果、教団を頼ってきた難民に困窮を強いることは事実である。が、そうだとしたとしても全く惜しげもなく、彼はいともあっさりとこれを教団に寄贈すると言い放ったのであった。

英雄はやはり常人の想像を越える、と様々に皆を驚かせて、そのままヴァスガルトはレイゼルクを後にした。

それから次に彼が姿を現したのはダルケオ山脈の外、ダロウエの城門前のことであった。

「だーかーらー、王女さんに取り次いでくれって言ってるだけじゃねえか」

「取り次げ、と言って軽々しく取り次げる訳がないだろうが！ 知遇があるというなら、紹介状なり何なり、身の証の立つ物の一つでも持っているはずであろう？」

「んなもんあるかよ、会えば分かるんだって何度言やあ分かるんだよ。ヴァスガルトが来た、って王女さんに伝えてくれれば」

毎度のことというか、ヴァスガルトはここでも門衛と押し問答を繰り広げていた。

たかだか辺境の小貴族の城であるから大造りのものではない。中央の騒乱から遠く離れ、一度の戦争も経験していない城は、いかにもとりあえずといった佇まいで、どこか緊張感に欠けている印象である。それでも頑丈そうな門は固く閉ざされ、年老いた小柄な門衛が一人立ちはだかつて彼の行く手を遮っている。

ヴァスガルトにしてみれば、彼はかつてこのダロウエの領主ブレデン＝ジュナの娘メルエーヴェ——正直なところ、その名前すら彼は忘れてしまっていたのだが——と交わした口約束を頼り

にここを訪れたというだけのことであって、それを証明するものなど何も持っていない。竜殺しにしても、フェイトンから称号を賜りはしたものの、その証となるような何かを得た訳ではなかった——酷い話、竜殺しが果たされるとは誰も予想していなかった為、そのような物を用意することはすっかり失念されていたのである——から、クルヴォレク滅ぶの報が届いたとて、それが彼の手になることだということなど証明のしようがない。

更に元々田舎育ちの上に世事は殆どフォルティスに任せきっていたので、このような場の倅いなどヴァスガルトは全く知るはずがなかった。そのような理由から、この押し問答が不毛なまま異様に長引いてしまっていたのである。

「ええい喧しい、さっさと帰らないと牢にぶちこんでやるぞ。とっとと帰らんかい！」

不毛な掛け合いがどれほど続いたものか、とうとう堪忍袋の緒が切れたようで、門衛はびしっ指を突きつけ剣幕荒く叫んできた。

「ああもう、話の通じねえじじいだな！」

辛抱堪らずそう毒づきつつも、門衛の氣勢に圧されてヴァスガルトは一步後に退いた。

変に手を出して怪我をさせれば後々面倒であるし、それ以前に後味が悪いだろうから、荒事に及ぶ訳にもいかない。この状況は喋りの達者でない彼にとっては、ことによると竜退治よりも困難であるようにも思われた。

「何を言うか貴様、誰がじじいだと!？」

だというのに、迂闊に口走らせたヴァスガルトの無礼な物言いは門衛を激昂させ、余計に事態を混乱させたようだった。

と——

くすくすくす、と誰かが笑うのを、ヴァスガルトは耳聡く捉えていた。怒り心頭に達して門衛が向けてきた槍を片手で無造作に取り上げてしまって、彼はその声の出所を探った。

左右を見回しても誰の姿もなかったが、はたと上を見上げると、遙か門の上からこちらを見下ろしてくる視線があったことはすぐに分かった。

「あら、見付かっちゃった？」

そこにいたのは、身なりよく着飾った若い女性だった。日の光を受けて輝く明るい金の髪、小さな顔、表情豊かな目——ヴァスガルトは彼女がかつて約束を交わした少女であったことを悟っていた。だが、悲しいかなどうしても名前が浮かんでこない。

声を掛けようとして、何を言ったものか迷って指差し固まっていると、そのヴァスガルトを押し退けて前に出てきたのは門衛だった。

「メルエーヴェさま、そこは危のうございます！ どうぞお部屋へお戻りくださいませ！」

背後でほうと手を打っている者がいることになど微塵も構わず、門衛はあたふたと慌てて彼女に呼びかける。が、メルエーヴェは彼の言葉を聞き入れるどころか、その様子を見てからからと笑い出す始末だった。それを見る限り、聖都レイゼルクに預けられたとあって、性格が矯正された様子は微塵も見られない。

「変わってないな、メルエーヴェ。三年前のまんまじゃないか」

目の前で喧しくする門衛を頭を押さえつけて黙らせ、ヴァスガルトは満面の笑顔で再会の喜びを伝えた。

「変わってない、ですって？ 年頃の女性への気遣いを弁えていない辺りはあなたも相変わらずだこと。——でも、随分と出世したようね？」

一旦は大仰に拗ねたような表情を作ったものの、どれほども堪らず、メルエーヴェも彼に笑い返してしまっていた。それから彼女は、門衛に門を開けるように言い渡した。

「メルエーヴェさま、私に、この男を城に招き入れろとお言いですか？ 野蛮で粗暴極まりないこの男を！？」

頭を押さえつける手を払い除け、再び門衛は鼻息荒く抗議の声を上げた。その後ろでヴァスガルトがまともに表情を険しくするが、それを見るとまたメルエーヴェはさも愉快そうに笑った。

「そう、その野蛮で粗暴極まりない男をね。嫌ならいいけど、そうすると門を壊しても入ってくるかも知れないわよ？ 何しろ彼、ゾミウ山の暴竜より強いらしいから」

それを聞いても彼女が何を言ったものか要領を得ず、はあ、と門衛は後ろを振り返った。しかめっ面のままのヴァスガルトと視線が合ったが、しかしこの老人はあれこれと見回すとすぐにメルエーヴェの方に向き直った。

「……この男が……ですか？」

「そう。竜殺しのヴァスガルト——噂は聞いているでしょ？ 分かったら早く入れてあげてね、中で待ってるから」

門衛はまだ訝しげな表情のままであったが、構わずにメルエーヴェはそのまま奥に引き上げてしまった。

「んーで、どうする？ 俺は中に入れてもらえるのかな？」

ぞんざいな扱いに渋面を作ったまま、ヴァスガルトが門衛に尋ねる。訝しげな顔のまま老人がゆっくりと振り返って、そうして男二人はおかしな表情でしばし見詰め合っていたのだった。

「そのような莫迦な話があるものか！ わしは絶対に認めんからな！」

ヴァスガルトが侍女の案内で謁見の間に連れて来られた丁度その時、先の門衛に負けず劣らずの激しい剣幕でそのように言ったのは、ダロウエの領主、ブレデン＝ジュナその人であった。その様子は、玉座から身を乗り出し、今にも彼に掴みかからんとするばかりの勢いだった。

あまりに急のことであったから、謁見の間には近習の者しか集まっていたはいなかったが、ともかく、彼の前にはようやくこの場に立ったヴァスガルトと、今はその傍らに立つメルエーヴェの姿があった。

「認めないって仰ったって、約束は約束だもの。約束を違えることが道義に背くことだと教えて下さったのはお父さまでしょう？」

ブレデンを怒らせた実の娘メルエーヴェは、しかしまるで悪びれる風もない。しかし、まさかヴァスガルトが竜殺しを果たして自分を迎えに来るとは思ってもいなかったから、彼との口約束のことを話したのはつい先ほどのことであった。

貴族だろうが農民だろうが女性の権利などないに等しい時代のこと、分を弁えぬ彼女の身勝手な物言いに対してのブレデンの怒りは並ならぬものであった。

「竜殺しと言ったところで、こやつが一人でそれを成し遂げた訳でもあるまい。たかが一介の傭兵と行きずりに交わした口約束など守る価値もないわ！ ……メルエーヴェ、いいからこちらへ戻りなさい。そのような薄汚れた者の側になどいるものではない」

当人を前にしてこれほどまでの言いようというのは、愛ゆえの父親の盲目のせいだろう。少々溺愛し過ぎの向きもあるが、まあ微笑ましいことだとヴァスガルトは笑ってこれを聞き流した。

が、怒り心頭に達したブレデンにはそれが嘲笑に映ったらしく、うぬぬ、と彼は更に憎々しげに睨んできた。

「彼が傭兵だからといって約束を反故にしると？ それでは、お父さまは私に嘘つきになれと仰られるのですか？」

「そうではない！ ……しかしな、お前にはもう許婚がおるではないか。お前こそ約束を蔑ろにする気か？ この父を国中の笑いものにする気なのか？」

愛情の深さゆえか、劣勢に置かれたのは父親ブレデンのようだった。先ほどから話の流れについていけず、ひたすら聞くだけに留まっていたヴァスガルトだったが、許婚、という言葉によりやく彼にも話の輪郭が朧に見え始めてきた。

「許婚など、私がいつ認めました？ そのようなこと、お父さまが勝手に決めてきただけのことでなくて？ 私がお父さまの気持ちを蔑ろにするのは、お父さまが私の気持ちを蔑ろにしたことの報いだとお思い下さいな」

懸命に取り繕り説得しようとする父を、しかしメルエーヴェは冷然とはねつける。さすがにこれ以上は親子の関係にひびが入るだけだろうと察して、ようやくヴァスガルトは彼女の前に歩み出た。

「えーと、ちょっといいかな？」

「何だ？」

「何よ、せっかくいいところなのに」

唐突なヴァスガルトの横槍に、すかさず揃って言葉を返す辺りはさすがに親子である。不服げなメルエーヴェの、せっかく、というのが何を指すのかは興味がなくもないが、それには触れず、話を進める。

「何か大きな話の行き違いがあるようなんで、早めに誤解を解いておこうと思っただけだ——俺は別に嫁取りに来た訳じゃないんでな」

「は？」

「俺はあんたが王にしてくれるって言ったからここに来た訳であってだな。許婚がいるんだろ？それを横取りしに来た訳じゃないっての」

これには、父子ともども意表を突かれたようで、ぼかん、と口を開けて阿呆のような顔でヴァスガルトの表情を窺い見るようにしてしまった。

やがてブレデンは安心もあってか盛大に笑い出したが、逆に今度はメルエーヴェの方が激昂し怒りの形相で彼に詰め寄ってきた。

「だから！ 私と結婚すればあなたは王さまになれるの。王族の成員。分かる？」

「いや、そりゃ分かるけどよ。それはダロウエの王さまってことだろ？ こんなちっぽけな城、貰ったって嬉しかねえよ。俺が欲しいのはレスレンティオ王国全土だ」

今にも掴みかからんばかりに諭してくるメルエーヴェの勢いを、しかしヴァスガルトはするりとかわしてみせた。そうして、躊躇なく大言を吐いてのける。

これを聞いてさらに大きな声で笑ったのはブレデンである。その表情に、いつの間にか嘲りの色が混じっている。

「レスレンティオ王国全土、とは大きく出たものだ。野望は大きく持てと言うがな、しかし過ぎた大望は己が身を滅ぼすことになるぞ？ 反逆の罪で牢に投げ込まれたいか？」

ブレデンにしてみれば、さっさとこの無礼者は追い払ってやりたいところだろう。脅しが効いて帰ればよし、帰らずとも彼にことを穏便に済ませる義理はないのだから、その時には脅しでなく牢にぶち込んでやればいいだけのことだった。

が、このブレデンの物言いに、ヴァスガルトはがらりと目の色を変えた。

「反逆だと？ 面白い、やれるもんならやってみろよ。国が乱れ民衆が嘆いていても何をしてやるでもない無能に何が出来る。お前も他の領主も同じだ、誰も王の資格なんか持ちゃいない」

王への尊敬を欠いたこのあからさまな侮辱に、とうとうブレデンは顔を真っ赤に染め、勢い立ち上がると兵たちに彼を取り押さえるよう命じた。側にいたメルエーヴェは力づくで引き離され、そうして、衛兵たちの槍がぐるりとヴァスガルトを取り囲む。

「さあどうする、これでもまだ偉そうなことを言えるのか？ 言えるものなら聞いてやらんこともないぞ？ 言えるものならな」

圧倒的優位に立って、ブレデンは壇上から彼を見下ろすようにした。何か言おうものなら衛兵たちが一斉に襲いかかる。絨毯を血で染めるのは好ましくないが、この際、妄想じみた薄汚い傭兵を抹殺するのも世の為であると彼には思われた。

が、このような状況でも、ヴァスガルトは眉一つ動かすことはなかった。これを危機とも感じていない——ブレデンは気付くべきであった。自身を取り押さえよと命じたにも関わらず、衛兵たちが彼を取り囲むまでに留まった理由というものに。

「ああ、言ってやるよ。俺がこのダロウエに着くまでに何を見たか分かるか？ 街の外に溢れた夥しい数の難民たち。我が子が飢えても何も与えられず、物を乞う他に生きる術を与えられず、拳句に野垂れ死んだところで誰に省みられることもなく骸を晒している始末だ。お前はあの様を見て何も思わないのか？」

「そのようなこと、傭兵風情が考えることではない。貴様などは日も差さぬ地下牢で己の愚かさを悔いていればよいのだ！」

それから彼は、兵たちに彼を連行するように命じた。娘の婚儀成った折にでも、気分がよければ恩赦を与えてやらないでもない——たっぴりそう考えるだけの時間が経って、ブレデンはようやく目の前の事態がなんら進展していないのに気付いた。

「どうした？ 目障りだ、早うせい」

しかし、それでも衛兵たちは動かなかった——いや、動けなかった、というべきか。本能的な恐怖が、彼らを縛り付けている。目の前の男は危険だ、と各々の頭の中で警鐘が喧しく打ち鳴らされていたのだ。

ヴァスガルトが一步前に出ると、囲みがわっと広がる——が、しかし衛兵たちが逃げるより先に、彼は彼に向けられた槍の一本を右手で無造作に掴み取っていた。

若く体格に秀でたその衛兵は、先の門衛のように易々と槍を取られはしなかったが、今回はそれが災いしたようだった。ヴァスガルトがそのまま槍を横薙ぎにすると、それは槍持ちごと振られてぐるりと衛兵たちを薙ぎ倒していったのである。

片手一本でそれをやってのけるというのは、尋常な膂力でのことではない。当人もやってからそれに気付いたか、ふとその手を覗き込むようにした。

薙ぎ倒された方の衛兵たちは、倒されたというだけで傷を負った訳ではなかったが、しかしそれで戦意は粉々に打ち砕かれてしまっていた。向かって左側を囲んでいて巻き込まれずに済んだ兵たちも、恐れてか槍先が下を向いてしまっている。

「地下牢は趣味じゃないな、もっといい部屋はないのか？」

別段凄みを利かせた訳でもなかったが、しかしそれを聞くとブレデンはひっと唸って玉座から滑り落ちそうになってしまった。恐慌をきたしたか、これではまともな話は出来そうにない。

「いいわ、私が用意してあげる」

代わりに名乗りを上げたのはメルエーヴェで、彼女はもはや飾りにもならない衛兵たちの間をすり抜けると再びヴァスガルトの傍らに立った。

「竜殺しの英雄さまですもの、丁重におもてなしをしなければ当家の恥ともなりますものね。お父さま、よろしいかしら？」

そう言ってメルエーヴェが振り仰ぐと、ブレデンは玉座に凭れながらもふるふると首を横に振っていた。抗議の意図のようだが、すっかり腰が抜けてしまって声も出ないものらしい。

「ええ、分かりましたわ。ではそのように」

お伺いなど元から形ばかりのものだったのだろう、メルエーヴェはにっこりと笑って父王に言葉に向けた。

「ところでヴァスガルト、内緒のお話があるのだけれど、耳を貸して下さらない？」

向き直って、今度は傍らの彼に言う。唐突な申し出であったが、素直に従ってヴァスガルトは膝を折り、彼女の方に耳を向けた。

そうしてメルエーヴェは指先で彼の耳を摘むと、愛らしい唇を寄せて囁いた。

「さっきは……………わね？」

「へ？」

その囁きが余りにか細かった為に、思わずヴァスガルトは聞き耳を立てていた。と、それを狙い澄まして——

「よくも恥をかかせてくれたわね、って言ったのよ！ この朴念仁！」

耳元に口を寄せたまま、甲高い声で噛み付くように吼える。そればかりか、メルエーヴェは更に彼の耳を強く捻り上げてしまった。

「——あだだだだ！？」

何が起こったものかも分からぬまま、為す術もなく耳を捻られるヴァスガルト。それを見るに後が怖くなったものだろう、父王も衛兵たちも、とうとうその場で後ろを向いて尻を向け、皆一様に頭を抱える始末であった。

結局、父王ブレデンの制止もまるで功を為さず、メルエーヴェの計らいでヴァスガルトは彼女付きの衛士として登用されることとなった。後年でいうところの、騎士、というようなものである。

何だかんだといったところで、懸賞金を放棄したヴァスガルトは手持ちの金も少なく、また難民の流入で食糧難が慢性化していたから、当面の衣食住を確保する為の方策というのが一つ。しかしそれ以上に、王になる為には世情ばかりでなくその裏も知らなければならない、というメルエーヴェの説得が最大の理由となった。知識の欠落、ことに政治的なことに関して全くの無知であることは彼自身よく自覚していたからであった。

そのメルエーヴェにしてみれば、野心なく田舎貴族の地位に甘んじている父や、家名に押し潰されて自らの才を示せない婚約者になど興味はない。彼女が欲するのは、大望を持ち、なおかつそれを実現し得る大器の持ち主——まさにヴァスガルトその人であったから、決して彼との縁を諦めた訳ではなかった。衛士登用という風に一拍間を置いたのは、父王や臣民への手前、というよりむしろ彼を近くにおいてその御し方を知ろうという胆のことである。

そのようにそれぞれ思惑は違えども、新たな生活はそうして始まったのだった。

先の騒動は広まれば王の恥を晒すことになる為に口外無用とされ、知る者は少なかったから、竜殺しの英雄を臣下に迎えたことはブレデンの名を上げることに繋がった。顔色一つ変えずに臣民からの賞賛を受け止める辺りは彼も役者である。

が、ヴァスガルトが抗議した通り、難民及び食糧難の問題に関してはブレデンは無為無策を決め込んでいて、面倒事はさっさとダルケオ山脈に追い払ってしまおうという胆積もりであるのが目に見えていた。それについてヴァスガルトが不服を漏らすと乗ってきたのはメルエーヴェで、彼女はこのことに関して素早く父王からお墨付きを取り付けると、全くの手探りながらも彼と共に解決策を模索することになった。

とにかく、問題を困難なものにしているのは王国が戦争状態に陥っているという現実には他ならない。難民を生み出しているのも戦争だが、食糧難もまた戦争によって引き起こされている事態の一つだ。ダロウエも含め、王国諸都市は軍事物資として食糧を極限まで吸い上げられ、難民がおらずとも困窮に喘いでいる次第であったから、マズレン大公マレーヴ＝ターニオスに纏められる中原南西域の同盟都市に援助を求めるということも現実的でなかった。

となれば堅実なのは、やはり聖都レイゼルクの協力を仰ぐということになるようだった。

レイゼルクとて長く難民問題に頭を抱えていたのは同じだったが、しかし暴竜が退治されて居住と耕作に充てられる土地が増したこと、またヴァスガルトが寄贈した莫大な懸賞金で山脈中から食糧を買い上げられていたので、現在はこの問題は解消されつつあった。

ここで交渉の前面に立ったのは、やはり竜殺しの功績を持つヴァスガルトだった。無論、交渉ごとに向かない彼の補佐ということで、メルエーヴェが彼の脇に立つことになる訳だが。

問題が快方に向かったとあって、レイゼルクとて食糧を他に回す余裕がある訳ではなかったから、二人を迎えたフェイトンが難色を示すのも無理からぬことではある。が、ヴァスガルトがおらねば事態の好転など望むべくもなかったのも、教主とて彼に対して強く出ることは出来なかった。

ということで結局、交渉の行方はメルエーヴェとサルディエ、双方補佐役の力量次第ということとなった。

ヴァスガルトとメルエーヴェが迎えられた応接室はそれぞれ客分として訪れたこともあり、質素に纏められているのは知っていたのだが、しかし今は見るからに調度品が数を減らされていた。実務的なフェイトンのことであるから、贅沢な調度品などはすぐさま質草に出してしまったと

ということなのだろう。そのことには同情を禁じえないが、だからといって交渉に感情を差し挟む甘さは、少なくともメルエーヴェにはない。

「食糧がない、金がない、といって他に供出できるものがある訳でもない。はっは、ないない尽くしはこのことですか。——それで援助を乞おうとは、少々虫が良すぎるのではありませんか？」

そう物乞いを見るような目で語ったのはサルディエであった。何の代償もなく無条件で援助を得ようというのだから、確かに物乞い同然ではあるのだが。

「我がダロウエを始めとする諸都市は皆ターニオス大公の求める戦費を賄うだけでも汲々としている有様ですので、仕方ありませんわ。僅かな蓄えで難民を救おうとすれば臣民まで飢えさせることになりまして、かといって戦費の供出を止めれば、逆賊の謗りを受けるばかりか、街ごと焼かれかねない状況です。ですから、頼れるものはフェイトンさまのお慈悲のみと悟って、こうして恥を忍んでお願いに上がったのです」

嘲るばかりのサルディエの声には耳を貸さず、メルエーヴェはフェイトンに向けて深々と頭を垂れた。するとヴァスガルトもすぐにそれに倣って頭を下げる。

「いや、顔を上げていただきたい。わしとて飢える者が居れば皆に救いの手を差し伸べてやりたいと願っております。ですが、先のヴァスガルトどのの働きがあっても、我々には今ここにいる者たちにやっと施しを与えられるばかり。申し訳ないが、とても他に手を伸ばす余裕はないのです」

為す術のない無念さは常々感じているのだろう、そう言って返すフェイトンの悲壮さに芝居の色はない。

「その通り。このレイゼルク周辺に以前から定住している者が一万、難民を併せて数えれば軽く二万を越えましょう。ヴァスガルトどのの寄贈があつてこの冬は越せましょうが、しかしそれ以上は手に余ってしまいます」

言い方こそ違えど、フェイトン、サルディエ共ヴァスガルトの功績を讃えつつもその一方でレイゼルクの窮状を説き、援助のしようもないと言っている辺りは同じことであった。それはともかく、このサルディエの言う数字には誇張はない。

大陸最大の都市、レスレンティオ王国王都ヴァドステンで、この当時は人口三万余り。その他、諸大公領が一万強から二万弱というところで、小都市では人口が千人に満たないところも決して少なくないのだ。大都市建造に向かない山脈地帯に一万人規模の都市を築くナバニール教団の集人力こそ驚異だったが、しかし現状ではそれこそが仇となっていた。

その上、ゾミウ山の暴竜が倒されたということは、すなわち陸路が拓かれたということと同義であったから、ダロウエの難民のようにダルケオ山脈の外に立ち往生を強いられていた難民たちが流入してくるということもある。だから、まだまだ人口が膨れ上がるだろうことも容易に予想されることなのである。

「私とて、無理は承知でお願いに上がっております。ダロウエとて五千の臣民を養うのにも汲々としているところにやはり五千近い難民を抱え、田畑は荒らされ、野党に身をやつす者もおり、治安の維持もままならない有様ですゆえ。このままでは軍による鎮圧もありえましょうが、しかし元を正せばナバニールの救いを求めた人々、それは心ない行為であると、父王共々迷い心を痛めているのです」

フェイトンの誠実さに比するに、メルエーヴェは役者であると言わざるを得まい。彼女は女性であるという以上に演技演出に長けているようで、巧妙に相手の心理の隙を窺っているものようだった。

必要以上の口出しを彼女自身に禁じられていたヴァスガルトは、彼女のそのようなしたたかな本性を知っていたから内心呆れていたものだが、しかしそれを表に出すような愚行はさすがに犯さなかった。むしろ呆れてものもいえない、というのが正直なところであるが。

「ええ、ええ、それは我々も心を痛めておるところです。これが神の与えたもうた試練であるというなら、ナバニールは何と過酷な女神であることでしょう。災厄、暴竜、戦争、飢餓——わしにももう女神の御心は窺い知れませぬ。何か深いお考えの上であると、そう信じてはおりますが」

これを盲信と呼ぶことは容易だろうが、しかしフェイトンはこれまでも表立っては決して信仰に疑念を差し挟もうとはしなかった。実際のところは定かでないが、指導者として、この苦境で信仰をゆるがせにすることは決して行ってはならないことだと、そのことを弁えていなければ教主など務まるはずもない。

「神ならぬこの人の身では、ナバニールの御心を知ることなどは叶わぬことでありましょう。教主さま、我らにはもはや女神の救いを待つゆとりはありませぬ。我々自身の手で今を切り拓いてこそ、女神の救いも得られるのではありませんか？」

「それは同感ですな。為すべきを為してこそ女神も我らに微笑みましょう。……ですが、レイゼルクはもはや手を尽くし、為す術も残されてはおらんのです。援助を求めてくるのもダロウエばかりのことではありませんが、しかし全てを救おうとするなら、我らはどれ一つとして救うことは出来ないでしょう。であるなら、せめてレイゼルクの民ばかりは救ってやりたい。今の教団に出来るのはそこまで。教主とて、決して全能ではないのです」

そのようにどれほどメルエーヴェとサルディエ、フェイトンが舌戦を繰り広げたとて、現状を見るにそれが堂々巡りにしかならないことは、ヴァスガルトにさえ分かることであった。

根本的な問題は、戦争ではなく、レイゼルク、ダロウエ両者の生産性の低さにある。山脈中に位置するレイゼルクは元より、ダロウエも大森林と大海に挟まれ、耕作地はひどく限定されている。リモネ大森林と呼ばれるこの森は中原西部全域に広がっていたから、近隣の諸都市とて台所事情は同じであった。

生産性の高い中原東部のワトレ平原は、今はまさに戦場と化してしまっていたから、こちらは援助どころの話ではない。これが現状というなら、もはや手の付けようはないだろう。常識的に考える限りにおいては。

「——ああ、そうか」

メルエーヴェとサルディエの果てしのない舌戦をよそに、ヴァスガルトはふと何か思いついたようで、まるで悪戯を思いついた悪童のような顔をすると、ぽん、と手を打った。

「サルディエ、いい考えがある。また手え貸してくれないか？」

すっかり難民の押し付け合いに興じていたところに唐突な横槍を入れられて、サルディエはたっぷり一拍の間を置いてからゆっくりと彼のほうを向いた。

その怪訝そうな表情の彼に、ヴァスガルトがにいつと笑みを向ける。サルディエには、その笑みはひどく不気味に映ったのだった。

ヴァスガルトの提案は簡潔であった。

戦争を止めさせる、と。要は先の暴竜討伐と同じように、彼は考えているようである。

戦争が終われば今のような理不尽な兵糧の徴発もなくなろうし、よくすれば蓄えられた兵糧を難民に回してやれるかも知れない、と、そのような考えであるのだろう。

無論、現実がそのようにうまく運ぶ訳はない。一旦戦争が終わったとて戦後処理は長く続くし、火種はあちこちに残るから平穏がどれだけ続くかということも不確かである。

竜殺しのような簡潔な結末にはならない、と理性的な判断を下して、サルディエはこのヴァスガルトの提案には難色を示した。元来平和を尊ぶ性向のフェイトンも見解は同様だった。

ただ、メルエーヴェだけは彼の真意を測るように、隣から彼の表情を覗き込むようにしていた。

「戦争を止めさせる、と言っても方法は色々あるわよね。出来る出来ないは別として。ヴァスガルト、あなたはどうやって今の膠着状態を崩そうと言うの？」

「……………どうやって、って言われてもな。なんかすりゃ止まるんじゃないのか？」

同じ長椅子に腰掛けながら向かい合うようにして、メルエーヴェがヴァスガルトに尋ねた。が、特に深い考えがあつての発言ではなかったのだろう、問われて彼は困ったような表情を浮かべた。

「泥沼の混戦ですから、正攻法で止まるものでもありますまい。要人の暗殺、兵糧の篡奪や焼き払い、奇襲的な妨害や遊撃——どれをしても、一度捕らえられれば死罪は免れますまいが」

正式な交渉の場でありながらも堂々と蔑ろにされて、非難がましい声でサルディエが横槍を入れる。その彼に向けても、フェイトンが嗜めるような視線を送っていたものだが、残念ながら良識の通用する相手などこの場にはなかった。

「面倒くせえな。ダロウェに一万、このレイゼルクに二万、合わせりゃ相当の数だ。力押しで攻めた方が早いだろ」

傭兵家業の長いヴァスガルトである、命を賭けることに躊躇はなかったらしい。それよりはむしろ搦め手などと回りくどい戦法をとろうということの方に彼は難色を示していた。

「数の上ではそうでしょう。ですが、所詮彼らは戦禍を逃れて辺境に落ち延びてくるような弱い民です。しかも今は食糧の配給すらおぼつかずに飢える者ばかり、兵を募ったところで、量も質も揃うとは思えません」

どこまでも直線的なヴァスガルトの思考に半ば辟易しつつも、しかしサルディエは自らの弁舌にいつものような冴えがないのを感じていた。この男に吞まれている？ そんな考えが頭の隅に浮かんだのを、慌てて彼は頭を振ってそれを掻き消してしまう。

「ナバニールに救いを求めて、ってんだろ？ んなお題目を幾ら唱えたって腹の足しにもならないって、連中もいい加減分かってる頃だろうよ。あっちの戦争が終われば、こっちにだって容赦なく手は伸びてくるんだ。教主さんには悪いが、どっかで戦わなけりゃ、救いなんか一生得られやしねえ。だったら、胆を括るのは早い方がいいだろが」

至極明快な論理で、ヴァスガルトは涼しい顔をしたままこともなげに核心をついてくる。

彼が今口にしたとおり、それぞれ大公たちに野心がある以上、確かに大陸統一の機運はあるのだ。今の膠着状態が解消されれば、この勢いを買って統一戦争へと雪崩れ込む可能性は少なかつたから、その時にはダルケオ山脈の雄たるレイゼルクに戦禍が及ぶことも十分に考えられることだった。

「ヴァスガルトどの……貴公、ナバニールの子らに死ねと仰られるか？」

それを言ったのはサルディエではなく、目の前の豪胆な若者の突拍子もない提案からこちら、

ずっと発言のなかったフェイトンであった。身を前に傾け、しかし非難するのではなく、真意を確かめようとするようにじっと彼の目を見据えてくる。

「ああ、その通りだ。だからって、無駄死にさせるつもりじゃないけどな」

そのフェイトンの視線を真っ向から受け止め、そしてヴァスガルトは迷いもなく笑い返した。嘘偽りも企みも何もない。彼がそうと知らず備えているのは、全ての者への救済、二心ない寛容だったように、フェイトンには感じられた。

「——もし教主さまがお認めになれるなら、私に一つ考えがあるのですが」

これもしばらく発言を控えていたメルエーヴェの言葉であった。伺いを立てられたフェイトンが頷き返して肯定の意を示すと、彼女は更に言葉を続ける。

「もはや正統な後継者のいないレスレンティオ王国など滅ぼして、新たな国を築こうと思います。この竜殺しの英雄をこそ次代の王として。

国を憂い、民を哀れむことの出来るこの男には、品位を除けば、およそ王者に求められる風格は十分に備わっていると私は思っております。教団が後ろ盾となれば、この大陸の統一さえ不可能ではない、とも。この男自身、王道を往く意志を持つ者です。なればこそ、私はこの男を王にしたいのです」

メルエーヴェが柄になく熱く語りかけるのを見て、フェイトンはずっと眩しそうに目を細めた。

時はもはや乱世である。求められるのは賢者でも聖者でもなく、英雄であり覇者であるようだった。確かにもはやこの老体が出る幕はなく、ヴァスガルトは英雄の声望を置いても覇者の資質を持ち得ているだろうと思われる。その本性が善であることも分かれば、信徒や難民たちの運命を彼に委ねるのは神の意志であるのかも知れない、とフェイトンは考えられるようになった。

「彼を、王に」

それは肯定でも否定でもない、フェイトンの呟きであった。細めた目のままで視線を転じ、ヴァスガルトをまたじっと見据える。

その様子がどれほど長く保たれた訳でもないが、やがてフェイトンは薄く寂しげに笑った。もはや自分が教主でいる意味はないのだ、と、そう思い至って。

「ヴァスガルトどの、ナバニールの子らをよろしく頼みます。——サルディエ、唯一つ誓うがよい。ナバニールの名を汚さぬことを」

彼を王と認め、フェイトンは座したまま深々と頭を垂れた。それからおもむろに立ち上がると、隣の修道士に唐突ながら誓いを求める。

いきなりのことに、何を言い出したものか、と多少の動揺を見せながらも、しかしサルディエは教主の手を取ると、その甲を額に当て、聖句を紡ぐように短い誓いの言葉を声で発した。

「我、汝の誓いを認めん。——サルディエ＝ローデンウェリ、誓いによって今この時よりお前を教主とする。神と信徒の為に生きよ。……よいな？」

教主の威厳を持って言い渡し、サルディエが躊躇いながらも厳かにこれを受けると、フェイトンはヴァスガルトに再び頭を垂れ、そうして部屋を辞した。これが彼なりの幕引きであったのだろう、これ以降、フェイトンの名が歴史の表舞台に上ることはなかった。

「……………じいさん、呆けてたのか？」

「……………うーん、ここはおめでとう、と言うべきなのかしら？」

それぞれ呆気にとられて、ヴァスガルトとメルエーヴェがそれぞれの的外れなことを言った。が、サルディエは軽く頭を振る。

「いえ、幾分衰えはしていたといえ、そのような様子はなかったはずですが。つまりは面倒を押

し付けられた、というところなのでしょうな」

おどけたように言ってサルディエは肩を大袈裟に竦めてみせたが、生来野心家の彼のことである、その表情はまんざらでもないようだった。つまりはこの男も乱世に向く気質の持ち主だ、ということなのだろう。

「ま、あのお堅い先代よりもあなたの方が話は早そうだから助かるけれど。……それで、あなたはヴァスガルトを王と認めてくれるのかしら？」

呆気にとられていたのも過ぎたこと、メルエーヴェは早々に話を元に戻して新教主に意向を尋ねた。

「彼を王に据えることに関しては、私にも異存はありませんよ。——但し、何か堅実な策があるというのならば、ですがね？」

「らしくねーな。お前、クルヴォレクの時にはあんだけ乗り気で大博打打っただろよ。今度も素直にそうしてくれりゃいいってだけの話じゃねーか」

暴竜討伐の際にあれだけの工夫兵員を動員できたのは、サルディエが賭けに乗ったから、という面が大きい。それを知るヴァスガルトからすれば今回の彼の反応は意外という他なかったのだろう、身を乗り出して彼の表情を窺うが、しかしそれを見下ろしながらもサルディエは冷淡に首を振った。

「大博打？ あなた方がそう思うのは勝手ですけどね。ゾミウ山に閉じ込められた暴竜を倒すことは所詮籠の鳥を縊るようなもの、それを仕損じたところでレイゼルクに禍の及ぶ余地はなかったんです。

けれど今回は戦争です。万が一にも攻め返されれば、その時にはこのレイゼルクさえも血に染めかねない。しかも募って兵が集まるかどうか、動員できたとしてそれを養いきれるかすら分からないというのでは、賭けにもなりますまい？」

「ふうん……要はあなた、ヴァスガルトが暴竜を仕留めることなんてまるで期待していなかったのね？ 彼に兵を預けたのは、それで少しでも食い扶持を減らそうと考えたから——とても聖職者とは思えないわね。教主の座、早々に返上した方がいいのではなくて？」

つまり、このサルディエという男は、今やナバニール教団という膨大な物的人的資源を持つ投資家なのである。その本性は堅実かつ冷徹で、博打の要素など入る余地もない——それがひどく非人間的なものに映って、メルエーヴェは嫌悪感を隠そうともせず、辛辣にそう言ったのけた。

「……おい、どうした？」

そのように毒々しげに感情を露にする彼女の姿などは見たこともなかったので、宥めようとしたヴァスガルトが慌てて彼女の肩に手を置く。が、メルエーヴェは視線を向けることさえせずに、乱暴にその手を払い除けた。

「黙ってて。邪魔だから」

「おやおや、喧嘩かね？ このような場で、好ましくはないな。——君には悪いけれど、せっかく思いがけず転がり込んできた頂点の座だ、手放す気にはなれないな。いや、悪くなどないはずだよ。君の交渉相手として、僕ほど理想的な相手はここにはいないはずだからね」

交渉の場において、感情を露にすることは決して賢明ではない。それは自らの手の内を相手に晒すことになりかねないからだ。そのことを知っているサルディエは自身が優位に立ったと考えたのだろう、寛大な聖職者の顔さえ作って、彼女を嘲るようにした。

「理想的？ 自惚れもいいところ、私は相手が誰だろうと構うことなどないもの。

さあ、話を進めましょう。いいわ、あなたがそうまでレイゼルクを大事に思っているというなら、聖都には禍の及ばないようにして差し上げます。要求は二つ。一つは聖都周辺にある難民

窟での徴兵の容認、もう一つは彼らに対する最低限の食糧の援助。それだけなら、あなた方ナバニール教団の関与は表には出ないでしょう？」

あまりに簡潔なメルエーヴェの要求に一旦は目を丸くしたものの、しかしサルディエは顔つきをすぐに普通の抜け目ない表情に戻すと、その話の旨味を探った。

「まあ、悪くはないね。それで、協力した時にはどんな見返りがあるのかな？」

「徴兵した者たちはそのまま私たちが頂きます。食い扶持が減るだけでもありがたいのではなくて？」

「おいおい、冗談は止めてくれ。若い男は、耕作地を広げる為にも必要な人員だ。それを供出するというのは大変な痛手だよ。それで何の儲けもないというのでは、とても協力する気にはなれないね」

食わせ者なのはお互いさま、とばかり、サルディエとメルエーヴェは上辺ばかりは和やかに、再び舌戦を開始した。

「仕方ないわね、それなら私たちが勝利した暁には、占領地での布教権を認め、これを保護致しましょう」

「布教権、ね。いっそ国教に定めてくれればありがたいのだけれど？」

「教団が表立って我々の後援を買って出るといふならそれもあり得ますが。そのつもりはないのでしょうか？」

正直、教主がフェイトンのままであればそれもよいかと思っていたメルエーヴェだった。が、しかしサルディエに代替わりした今となつては、この狡猾な男に大きな影響力を与えることは後に不安を残すことにもなりかねなかったから、それは大いに躊躇われた。

一瞬、視線の交わるところに緊張が走る。だがこの時には、先にその緊張を解いたのはサルディエの方だった。

「いいでしょう。布教にあたって教会は不可欠なもの、勿論これの建造も認めてもらえますな？」

「教会……そうですね、それは認めます。その代わりという訳でもないのですが、ドウメラク族への口利きをお願い出来ませんか？」

「……いえ、それは出来ませんな」

国教化についてあれほどあっさり引き下がっておきながら、しかしサルディエはこの交易権についてはきっぱりと拒否の意向を示した。

これに関しては、交易を成立させたフェイトンの功績があったからメルエーヴェも無理に承諾を取り付けようとは思ってはいなかった。が、サルディエがこれを拒否したのは、そのことばかりが理由ではない。

暴竜討伐によって主を失ったゾミウ山周辺の土地は、ヴァスガルトの権利放棄もあって教団にその所有権が転がり込むこととなった。が、そのことが定まってから間もなく、ダルケオ・ドウメラク族がここに巨大な鉱床が眠っていることをフェイトンに告げ、サルディエが彼らにその採掘権を認めたので、その恩もあり、教団とドワーフ族の交易による利得は莫大なものになると予想されていたのである。

であれば、この期に及んでその利得を横取りされるような愚行は、サルディエが取るはずもなかったのであった。

「それでは、教団を仲介しての交易ということではいかが？ 鉄製の剣や槍、盾などが揃えられれば、勝機はずっと増すと思われませんか？」

「それならば構いませんよ、仲介料さえ頂ければ、ね」

改めてのメルエーヴェの申し出を、サルディエは大層機嫌よく承諾した。その顔は聖職者のそれではなく、すっかり商売人の顔であった。

それからまた幾つか細かい取り決めをして、メルエーヴェとサルディエの交渉は終わりを迎えた。双方思惑の全てを明かそうとはしなかったから、この場で優劣の決まるものではない。むしろ両者の争いは、今この場から始まったとってよかっただろう。

世俗と教団の主導権争い——これはこの先、歴史上において目まぐるしく上下を入れ替えながらもずっと続けられる事柄であった。

そうしてヴァスガルトとメルエーヴェはダロウエへの帰途についた。そのまま何事もなく城へと辿り着くと、彼女は旅の疲れも見せず、すぐさま行動を開始したのだった。

謀叛を起こす、などと軽々しく言えるものではない。ことに父王ブレデンは小心者であったから、メルエーヴェがまず召集したのは、彼女にとって信用に足る者たちだった。

父王への表向きの報告を簡素に済ませた後で、ヴァスガルトと共に彼女の私室に集められた者は四名。その中には、彼女の幼馴染みであり、許婚でもあったタナヴィスの姿もあった。

「これから話すことは他言無用、一蓮托生のつもりで聞いてもらうからね。その覚悟がないなら、今のうちに出て行って」

始めにメルエーヴェはそう前置きをしたが、しかしそれで怖気づくような者がいるはずもない。皆の真摯な視線が全て自身に向けられていることに満足し、おどけて肩を竦めてみせながらも、彼女は後を続けた。

教団の後援を得てダロウェ、レイゼルクの民や難民の中から多く兵を募れるようになったこと、当面の兵糧や鉄器の用意についても教団から得られるように約束を取り付けたことは、先のサルディエとの話し合いの通りであり、またメルエーヴェが父王に報告した通りのことでもある。

これから先がこそ、彼女の企みであった。

ヴァスガルトを王に据えること、これだけでも彼らを動揺させるには充分だった。が、更にメルエーヴェは至近の戦略について大胆な構想を提示し、皆を驚かせた。

どれほどの大軍を組織し得たといえども、それを維持するための兵糧を持ち得ないことが現状では第一の障害となる。教団とて長期にわたって食糧の援助は続けられないと言ったし、当のメルエーヴェも約束を取り付けたのはあくまでも短期の援助に過ぎない。

「兵糧がない——それは何故か。ターニオス大公が大公領全土から前線へと吸い上げてしまっているから。なら、前線の砦には食糧は幾らでもあるはずよね？」

「なるほど、そこを背後から攻めて食糧を掠め取ろうということですか？」

メルエーヴェの意味ありげな物言いから企みを見抜いたつもりになったか、将の一人が彼女の言葉を遮って後を続ける。が、彼女はそれまで机上の地図を指し示していた指揮棒を振って、ぺち、と彼の頭を叩いた。

「残念、大外れよ」

「そうですね、なまじそのようなことをして攻め返されれば一溜まりもない。やるならば反攻の余地を残さず一撃で攻め落とさなければ……しかし、飢えた兵ばかりで、そのような大胆な奇襲などかけられるのでしょうか？」

次に口を開いたのは、メルエーヴェの許婚たるタナヴィスであった。意外に考える頭はある、と感心しながらも、しかしそれとて彼女を満足させる解答には至らず、ぺち、と頭を叩かれる。

「どうして皆そう好戦的なのかしら。謀叛を起こすといっても、反旗を翻すまでは大公の軍のままなのに」

それでようやく皆にも合点がいったようだった。つまり彼女の企みとは、大公の軍として入砦し、兵糧を充分腹に蓄えた上で中から攻め落とそうというのだ。ここで大公を討ち取ることが出来れば、その時には、新王国興れり、と唱えて大公領を一挙に掌握することになる。

「——しかし」

と、また別の将が異論を唱える。

「砦を落としたとて、そこは前線。ターニオス大公を討ったとすれば、次にムオゼト、ウィーゼンの両大公と対立するのは我々ということになりましょう。砦の攻略に要らぬ消耗を強いられた時には、苦戦は免れますまいが？」

それはメルエーヴェも考えあぐねていた点であった。痛いところを突かれて、珍しく彼女が唸ってみせる。

ターニオス大公を暗殺し、その事実を突きつけた上で数の優位を示して降伏させようというのが彼女の策であったが、それが綱渡りの如き企みであることは彼女自身も自覚していることである。大公暗殺の成否以前に、大公の軍に匹敵する数が集められるかどうかは何よりもまず大きな壁となってくるから、何かもう一つ保険となる策が欲しいところではある。

「なら、兵を二つに分けて、北の大公領を掻き回すってのはどうだ？ 自分の領土が混乱させられれば、そうそう攻め手に出られもしないだろ？」

相変わらずこのような場の緊張を解さないのんきな声で、そう言葉を発したのはヴァスガルトであった。決して下策ではあるまい——が、しかしその提案を支持するような反応は、そこには一つとして見られなかった。

「いい案だとは思うわ。実行できたなら、ね」

南のターニオス大公領から北のデュハマ大公領へと進軍する為に避けて通れないもの——それは広大なリモネ大森林に他ならない。この大森林、正確にはここを住处とするリモネ・フェルトウク族がその策を阻んでいる事実を、メルエーヴェは彼に教えた。

それはダルケオ山脈育ちの彼の他は、皆が知っていることである。争いを好まないリモネ・フェルトウク族は、森に武器が持ち込まれることを断固として拒絶する。魔法を用い、森の精霊と共謀して彼らは人間を迷わせ、追い返し、時には死に至らしめることさえあるという。

それこそ森の浅いところでなければ狩猟を行うことさえ許されないという徹底ぶりだが、しかしその反面武器を持たないなら危害を加えることもない。だから難民が街道を避けて森を横切ろうとした時には、彼らは姿を見せてはいなかったと聞く。

しかし、ヴァスガルトらが兵を率いて行ったならば、その時に彼らが明確な敵対姿勢を示してくるだろうことは想像に難くない。森は、ここでは壁と同義のものであるのだ。

ダルケオ山脈から迂回しようにも、北部はクルヴォレクの存在もあって殆どが未踏域である。冬の到来もそう遠くない。デュハマ大公領に抜ける道を探そうというのも現実的ではないだろう。となれば後には東回りで森を迂回する道しか残らないが、この道の途中にはターニオス大公の砦が置かれているから、大公に気取られずに進行出来る余地はない。

「ははあ……武器を持っては、ね」

それでもヴァスガルトはまだ何か考えているようだった。が、その彼をメルエーヴェが半眼で眺める。

「まさか、武器を持たずに進撃する、なんて言わないわよね？ そんなことが出来るのはあなたくらいのものよ」

「何だよ、誰もそんなこと言ってねーじゃねえか」

見るからに動揺した様子のヴァスガルトを、顔にそう書いてある、とメルエーヴェが笑った。実際、彼の考えていたことは全く別のことだったのだが、言う機会を逃してしまって、そのまま笑いものにされてしまう。

結局のところ、この会合では明確な戦略は示されず、それは後の課題とされた。その為、ヴァスガルトを中心とする新たな王国の建国という話も公表されることはなく、徴兵も単にターニオス大公への奉仕と難民問題の解消という名目で行われることとなった。

本格的な冬の到来に先じてメルエーヴェは信頼できる者をレイゼルクに派遣し、後はダロウエ周辺において地道な兵員の募集が行われた。難民は皆戦争を逃れて来ている者たちであったから、数よりは士気を重視して、彼女は強行策を避けて彼らの自主性に訴えるように、と指示を發した。

ここで大きな効果を見せ付けたのはヴァスガルトの竜殺しとしての声望で、拙くも彼が演説を

披露すると、彼の英雄性に惹かれて志願する者も少なからず見られた。

そうして、春が訪れる。雪はまだそこに残っていたが、メルエーヴェの施策が功を奏し、難民の中からの餓死者、凍死者の数は最小限に留められた。それで得た信頼からも、兵数は増えていった。

難民まで含めたダロウエの周辺人口はおよそ一万強。そこから得られた兵数は、この時には千五百ほどであった。ダロウエも難民窟も、既に戦争に成人男子の殆どを取られてしまっていて、女子供や老人といった社会的弱者が人口の大半を占めている現状だったから、これだけの兵員でも動員できたということは驚異である。

そこにレイゼルクで徴兵された一団が加わると、その総数は五千強までになった。こちらは今まで戦争と無縁であったことに加え、ヴァスガルトの声望がダロウエ以上に強く印象付けられていたことが、四千近い数字に繋がることとなった。

残念ながら、ターニオス大公の軍に勝る数とはならなかったが、それは予想を優に越える兵力である。新教主サルディエの尽力もあって当面の兵糧の心配はなく、また、鉄製の武器防具もほぼ全員に行き渡らせることが出来ていた。

一時とはいえ、人口だけなら今や一万五千を数える中規模の都市となったダロウエ。ヴァスガルトが真に待望した人物は、訪れるなりその騒がしさに顔を顰めたのだった。

「おお、やっぱり来たか！」

そう言ったヴァスガルトに迎えられたのは、小ぶりの杖を持ち、煤けた外套に身を包んだ少女だった。ティレイ——クルヴォレク討伐に大いに貢献した、若いながらも実力を備えた魔女である。

といっても無論、魔術が疫病の如く恐れられる時代のことであるから、英雄の列に名を連ねてはいないし、この訪問も公的なものではない。

どのような手を使ったものか、彼女はこの夜更けにヴァスガルトの部屋のテラスから入り込んできたのだが、しかし彼はそのことにはまるで驚きもせず、ただティレイの訪問を喜んだので、むしろ驚かされたのは彼女の方だった。

「全く、神経が太いと言うか抜けてると言うか……にしても殺風景な部屋ねー、身なりもましになったんだし、何か少しくらい飾るものもあるでしょうに」

ティレイはテラスから一步部屋に入ったところで立ち止まって中の様子を眺めやると、溜息混じりにそう評した。月明かりに照らされた彼の部屋には調度品の類は何もなく、簡素な寝台と、今彼が座り寝酒を呷っているテーブルがあるだけだった。

冬からの活動で臣民に慕われたといっても、ブレデン王の好意は未だ得られぬままであったから、一向に財が形にならないこと、それ以前に一つところに留まらない傭兵暮らしの中で育った為、身の回りに物を置く習慣がないことが、この部屋を殺風景なものにしている。だが、これはこれで彼の性格を表している、といえない訳でもない。

「いきなり消えておいて、再会の一言もなしにそれかよ。相変わらず性格悪いなー、お前」

席に座ったままのヴァスガルトが苦笑混じりにそう言うと、よほど癪に障ったらしく、ティレイはじろりと眼光鋭く彼を睨んできた。

「あたしは別にあんたと再会したって何にも嬉しくないの。喜ぶのは勝手だけど、そんなのは他所で一人でやってちょうだい」

ティレイがそのようにすげなくしても、ヴァスガルトはほどよく酒が回っているようで、からからと笑って返してくる。

「おーおー手厳しいことで。ま、じゃあそれは置いといてだな、お前、何でここに来たってんだ？ まさか、俺を殺しに来た、って訳でもないんだろ？」

そう言って彼は酒盃を差し向けたが、しかしティレイにそれを受ける様子はなかった。その場に立ったままの姿勢で応える。

「あたしとしては、そっちの方がよっぽど気が乗るんだけどね。残念なことにそうもいかないのよ。あんたに協力するように、って頼まれちゃったから」

「頼まれた、って誰に？……まさか、フォルティスに、か？」

「外れ。……彼はどこだ、とか聞かないでね？ 王位を継ぐ気のない男になんて興味はないもの」

華奢な肩を竦ませて見せつつ、ティレイは気の抜けた声音で言った。竜殺しが果たされた際の祝いの席から揃って消えたことで、ヴァスガルトは二人がそれ以後の行動を共にしているものだとばかり思っていたのだが、そうではなかったらしい。思うままそのことを尋ねると、もう一度彼女は肩を竦ませる。

「最初はね。でも、すぐに別れたわ——王位を継ぐなんて、俺は一言も言ってない——あたしをあれだけ働かせておいて、いけしゃあしゃあとよくも言えたものよ。面の皮が厚いったらありゃしない」

つかつかとテーブルに歩み寄り、ティレイは乱暴に彼の向かいの椅子を奪い取ると、無理に軋

ませるようにして座った。憤懣やる方ないという態で鼻息荒く愚痴を突きつけてくる。

「あー、まあそういう奴だしな。……んで？」

決して不誠実な性格ではないが、必要とあらば舌先三寸で相手を煙に巻くこともままあったフォルティスだったから、ヴァスガルトにはその光景は容易に想像がついた。女のヒステリーは付き合いきれない、と天井の辺りに視線を泳がせる。

「ほんと、殺してやろうかと思ったわよ。でも、実際は何事もなく別れてそれっきり。全く、面白くないったらありゃしない」

言いつつティレイは、まるで人の首を捻るように杖を両手で絞ってみせる。そのあまりの激昂ぶりに、先に酒を入れてきたものかとも思われたが、どれだけ彼女が声を張っても、彼のところに酒香が匂ってくる様子はない——もっとも、それは手に酒盃を持っているから気付きようもないだけかも知れなかったが。

「そんだけ憎けりゃ、殺してやればよかったんじゃないか？」

長年背中を預けてきた信頼に足る相棒だったという割には、あまりにも冷淡に彼は言った。と、それを聞くやティレイはそれまでの激昂が嘘のように、さっと頭の血の気を引かせてしまった。

「あんたと違って、こっちには事情ってもんがあるのよ……色々ね」

そう皮肉げに言って、笑う。どこか陰のある笑い。

「事情ね……ま、どうせ探そうと思えばどうにでもなるんだろ？」

しかしそのことにはさしたる興味も示さず、ヴァスガルトは質問を変えた。

「まーね。でも、言ったでしょ？ 王座を捨てた人にはもう興味はないの」

「そっか。——じゃ、本題に入るとするか。ここに来た目的は？」

話題と共に、彼の口調、眼光が唐突に威圧的なものに変わる。対するティレイにも緊張が伝わり、一瞬、空気が剣呑な雰囲気帯びるが、しかしそれはどれほどの間も置かず、ティレイの側からあっさり崩されて終わった。

「別にね、あんたに危害を加えに来た訳じゃないの。初めに言ったでしょ、頼まれて協力しに来た、って。それが理由の全て。依頼者の名はメリーシャヤ＝レスレント。先王ラズモーヴの后にしてフォルティスの母。要はきちんと世を治められる器の持ち主を探し出して、王位に導け、とまあ概ねそのような話なのよ。それで、白羽の矢が立ったのがあんた、という訳」

言う側から話を聞き流しているヴァスガルトを半眼で睨み付けつつ、ティレイは彼女自身がここに来た理由をそのように説明した。が、メリーシャヤ、という名を聞くと、彼はひどく怪訝そうな表情を浮かべた。

「フォルティスの母ちゃんねえ……それが何で俺の手伝いを？ レスレンティオの女王ってんなら、俺なんかは国崩しを企んでるんだから、まるっきり敵じゃねーか。第一、俺が王になるなんて、そんな話どっから仕入れてくる？」

「……あんた、王になるって自分で言ったの覚えてないの？ まあいいわ、まともに取り合ったらきりがないし。

とにかく、それが本気だということを知ったのはフォルティスから。その上で女王メリーシャヤがあなたに手を貸すのは、今の王国にラズモーヴの後継と目すに足る器量の持ち主が見られないから。民衆にしてみれば、上に立つのが誰かなんて些細な問題。平和を実現してくれればそれが一番なのよ。女王が望んでいるのも、つまりはそういうこと」

ティレイは決して嘘を言う様子は見せなかったが、しかし、それを聞くヴァスガルトはあからさまに訝しんだようで、明らかに眉根を寄せてみせた。これまでのようにフォルティスに万事任

せ切る訳にはいかなかったので、仕方なしにとはいえ、最近では彼も自分で物を考えるようになっていたらしい。

「平和、ね。その為には息子の王位継承も、王国の存続さえ厭わないってのか？ そりゃ、俺だってさすがに怪しいって思うわ。それに、魔女なんてもんが実在して、しかも女王に加担するってのも分からん話だしな」

胸から上を前に傾けて、ヴァスガルトはティレイの目をじっと覗き込むようにする。その不躰な態度に顔を顰めはしたものの、それでもティレイは視線を外そうとはしなかった。

「事情がある、って言ったでしょう？ そうね、……レスレント王の玉座を獲ることが出来たら教えてあげてもいいけど。本当にそれが出来るなら、ね」

安い微笑ではある。が、それを受けてヴァスガルトは不敵に笑った。

「やるさ。戦争を終わらせてやりたいのは俺も一緒だからな。それに、お前だって協力してくれるんだろ？」

「断じて望んでのことではないんだけど。——先に言っておくけど、あんまり派手なことは出来ないからね？ この間みたいに誤魔化しの利くことならいいけど、あたしが魔女だってことは、知られたくはないから。……あなただって、魔女の手を借りてるなんて知られたら評判に関わるだろうしね」

魔女狩りという行為が、宗教的にでなく風俗的に行われている時代のことである。公にそのような存在が認められている訳ではないから、あくまでも人形を焼くような擬似的なものでしかないが、災厄や、人間の領域の外に広がる暗黒世界への恐怖と結びつく感情には未だ狂氣的な熱があった。

もし魔女やそれと繋がりのある——と思われる——者が見付けられれば、並々ならぬ責苦を負わされることも決して珍しくはないのだ。その時には、権力者として例外ではない。実際、魔女裁判で焼かれた領主というのも実在するのである。

「そうか？ 別に悪いことをする訳でなし、知られても問題はないと思うけどな」

「それはあなたが単純だから、よ。あたしは皆に理解を求める気はないし、そもそも素性を公にする気もないの。民衆ってものは、強い者を畏れるものだから。

魔女然り、竜殺し然り、強い力を持つ者が自分たちを虐げるってことを本能的に悟ってしまっているから、何を言ったところで、恐れられることに変わりはないのよ。竜殺しの英雄だって、民衆に殺されるかも知れない——あなたも気を付けておかないと、どうなるか分からないんだからね」

その軽薄な笑みの裏に底深い諦念があることは、朴念仁のヴァスガルトにも分かる。が、彼女の言うことは、まだ今は彼に実感できることではなかった。だから、返したのは気の抜けた空返事ばかりであった。

「んー、ま、そしたら気を付けるわ。

でもって、俺としては一つだけ頼みたいことがあるんだけどな。ああ大丈夫、目立つことじゃない。リモネの森のフェルトウク族を、うちの連中を通してくれるように説得して欲しいんだよ。魔法を使うっていうんじゃ、お前でもなけりゃ手も足も出ないだろうからな」

正直、北のデュハマ大公領を攻めるといふ彼の提案は暗礁に乗り上げたまま忘れられていたのだが、しかしそれに変わる奇策が出された訳でもない。失笑を買ってもヴァスガルトがこの策を諦めなかったのは、ひとえにティレイという存在を覚えていた為のことであった。

その辺りのことを彼なりに説明すると、ティレイは驚いて目を丸くしてしまった。この年若い魔女がここを訪れなければ成立しないというのだから、そのようなこと、下策とすら言えまい。

が、そういう当人は何やら妙に確信めいたものがあつたらしく、逆に彼女の表情に意外そうな反応を示していた。嘆息。何度目になるのか数える気も起きない。

「フェルトウク族……ね。手段は問わない？」

「説得、って言っただろが。ことを荒立てて余計な敵を作りたいとは思わないしな」

ティレイの不穏げな物言いに、ヴァスガルトが半眼で応える。

「あらそう。なら、敵が残らなければいい訳ね？」

「そうじゃねっての。——ま、こっちも切羽詰ってるのは確かだしな。話し合いで通れなければ、その時には力尽くで押し通るまでだ」

武力も交渉の一手——彼がそこまで考えた訳ではないが、必要とあらば荒事も辞さないというのは傭兵ヴァスガルトとしては流儀の内である。何にせよ、交渉や和解という穏やかな言葉よりは、先手必勝の一言の方がよほど似合う二人であった。

「了解、引き受けたわ。したらあたしは寝させてもらうから、出番になったら起こしてね。それじゃ」

さらりと言って立ち上がると、ティレイは彼の寝台に横になって、ヴァスガルトに背中を向けた。誘っているものかと妙な期待を抱いて彼は自分の寝台に近寄ったが、しかしその時にはもう魔女は魔女らしからぬ穏やかな寝息を立てていて、それでようやくヴァスガルトは寝台を奪われたことに思い至る。

「こいつ……ほんとに襲ってやろーか」

そうは言ってみるものの、色々な意味で後が怖いので、結局、彼は空の酒盃に酒を注ぎ直したのだった。

翌日、兵間にて竜殺しの英雄ヴァスガルトが自ら提案した無謀極まりない大博打の話は、瞬く間に全ダロウェ軍兵士に伝えられた。

おおよそ訓練も終わり、ウルガ砦——ターニオス大公の下に移動を開始するまで後数日、という日のことである。

博打の内容はこうだ。

ヴァスガルト率いる分隊が本隊とは別行動を取り、北のデュハマ大公領を攪乱してウルガ砦に戻る。三十日経っても戻らなければそのままターニオス大公軍に編入。しかしもし彼が無事に生還するようであれば、ダロウェの兵はターニオス大公に反旗を翻して、ヴァスガルトを王と仰げ、と。

これはブレデン王やその臣下は勿論のこと、新王国建国の企みを水面下で進めていたメルエーヴェからも預かり知らぬことで、全くヴァスガルトの独断専行という他なかった。

噂が広がる、ということはつまり人の口に戸が立っていない、ということで、これはその日の内に王の耳に入れられ、ブレデンは直ちにヴァスガルトを召喚することとなった。

今、玉座の左右には彼の臣下が並び立ち、メルエーヴェは彼が初めてここに立った時のように、ヴァスガルトの脇に立っている。

「ヴァスガルト、頼もしき我が臣下よ。今、貴公の周囲に不穏な霧が立ち込めているようだ。不当な疑いを晴らしたいと思うならば、臣下として我が問いに嘘偽りなく答えよ」

厳かに、しかし欺瞞に満ちた口上が、玉座から発せられた。ヴァスガルトは言葉では返さず、ただ一礼を返すだけに留める。これだけでもブレデンは感情に任せて無礼討ちにすることも出来ただろう。そうしないのは、彼にとってもヴァスガルトを失うことは躊躇われた、ということだった。

「我が兵たちがな、妙な話を囁き合っていたと言うのだよ。竜殺しの英雄が北を攻めて戻れば、彼を王として迎えるのだ、と。可笑しな話だよ、王とは私であり、ターニオス大公であるのだからな。竜殺しといえば、このダロウェには貴公一人がいるのみだが、しかしこのブレデンの臣下たる貴公が王になるとは、全く道理の通らない話でな。まあ、貴公がこれを下らん作り話だと言言ってくればそれで終わる話だ。さあ、それをわしに聞かせておくれ」

たっぴりと持って回った言い方で、ブレデン王は慈悲深くもヴァスガルトに贖罪の機会を与えてくれているものようだった。が、しかしヴァスガルトはそれでも言葉一つ発しようとはしない。

沈黙。ブレデンのその柔和な笑みの裏側にあるものを感じ取ってか、誰一人としてこの沈黙を破る者はなかった。父親に対して普段あれだけ不遜な態度を取り続けたメルエーヴェでさえ、ヴァスガルトの逞しい腕に弱々しく縋るのみだった。

そうして、どれほどか時が過ぎる。ついにブレデンの仮面が剥がれるかと思われたその時、ヴァスガルトは笑った。哄笑。皆が啞然として見守る中、ひとしきり笑って満足したか、やがて彼はそれを収めた。俯く。

「メル、覚悟を決めてくれるか？」

傍らのメルエーヴェの瞳を見据えて、ヴァスガルトはただそれだけを言い、そしてそうすることを求めた。彼女にだけ見せるその表情には、浮ついた表情の色は一つもない。ただ、厳しくも優しい力強い意思だけがそこにはあった。

逡巡も僅かな間のこと、彼女は彼の腕を掴む力を強くして、しかし弱々しく応えた。それはあまりにもか細い声で、周りの者——或いはヴァスガルトにさえ届かないかと思われるようなものだった。

「愚昧な王などいつの世にも不要なもの。あなたが新たな王になる覚悟であるなら、私はあなたの手に父の処断を委ねます」

その表情は複雑でどのような感情を読み取るのも困難であったが、ヴァスガルトはそこにある覚悟の色の他にはあえて目を向けず、そしてかたかたと震えながらも縋りくる細い指を優しく取って離れた。

そして、一步踏み出す。

「確かに、今俺はお前の臣下に過ぎない。だが、一つ思い違いをしているようだから、まずは訂正させてもらおう——俺は決してお前に忠実ではない。

多弁なのは、俺を惜しむあまりのことか、それとも恐れるが故か。残念ながら俺はお前の才覚の何一つとして惜しいとは思わん。

愚昧なる王、玉座の心地に耽り、その下に何を敷くかも分からぬ愚物よ。貴様が今俺に討たれるのは、ただその愚かしさの故だと知れ！」

ヴァスガルトの今のメルエーヴェとの接し様に憤り、愚かしくも立ち上がって指差し彼を罵倒しようとしたブレデンだったが、しかしヴァスガルトが言葉を発し始めると、彼の氣勢に圧され、浮いた腰が再び玉座の上に落ちた。

「わしを討つと？ 莫迦な、貴様、謀叛でも起こすというか？ 誰だ、誰に唆された！？」

彼の恫喝にすっかり動揺して——気圧されてまともに彼の目を見られないということもあつただろう——ブレデンは左右に首を巡らし、家臣の中から謀叛の首謀者を探そうとした。

もし首謀者なる者がいるとするなら、それはメルエーヴェの他にはない。だが彼女はブレデンに隠居をこそ勧めるつもりではあつたものの、実の父を討ち取るようなことまでは考えになつたから、覚悟を決めたとして、ヴァスガルトの背後で俯き、蒼白な顔を覗かせるばかりであつた。

それにそもそもヴァスガルトが王位を望んだのは、誰に唆された為でもない。それは彼が自ら望んだことである。だから、左右の家臣団を割って立ち上がる近衛たちの姿を一瞥した後で、さらに一步踏み出すことも、彼自らの意思によることであつた。

「謀叛？ 無粋だな、肅清と言って欲しいもんだが——これは俺の意思だ、誰に唆された訳でもない。敵はターニオス大公。お前やお前に顎で使われるだけの雑兵なんぞ、眼中にないよ。さあ、その玉座を明け渡せ」

更にまたヴァスガルトが一步を踏み出す。と、別段彼が凄んだ訳でもないのにも関わらず、彼の前に壁を作っていた近衛兵たちが、それに合わせて一步、或いは二歩後すぎる。それは以前にも見られた光景であつた。

「おーおー、お前の兵たちは優秀だな。勝ち目のないことは前の一件で身に染みて分かってるらしい。

……ブレデン、これが最後の警告だ。玉座を明け渡せ、そうすれば生かしておいてやる。あくまで俺に逆らうと言うなら、お前も一国の王だ——雑兵なんぞに頼らず、お前の力を示してみろんだな」

ヴァスガルトがとうとうそう言い放つと、途端、近衛兵たちは潮が引くように左右に分かれて壁を解き、彼とブレデンの間に道を開いていた。口を手を全身を戦慄させた王らしからぬ王が、そこには無様に玉座に張り付いていた。

ここで引き下がることが出来ていれば、彼には新王国の祖として誉れ高く生きる道もあつたかもしれない。が、今の彼には自らの引き際を悟る機知さえも欠けてしまっていた。ただ彼は周目が自身に注がれているのに気付いて、もはや欠片もあろうはずのない王の威信を取り繕おうとしてしまった。憐れだとして、それが彼の選んだ道であることは否定しようもない。

半ば権力欲の本能に押し出されるように立ち上がり、そして傍らの者から剣を受け取ると、段を降りてヴァスガルトと対峙する。

「もはや慈悲も枯れた！ 英雄といえど、竜殺しも所詮は数に頼んでの、借り物の看板に過ぎまい。自らの愚かさを、我が剣の露となって悔いるがよいわ！」

そう言うと、ブレデンは両手で剣を上段に構えた。世襲とはいえ、彼とて何の才覚もなしに王になったものではない。武力至上のこの時代に王でいられる以上、彼の剣腕は決して人並のものではなかった。

が、先んじて動いたのはこの時ヴァスガルトの方であった。剣を片手に下げ持ち、何を構えることもなく歩を進めて間合いを詰める。

「愚かな、死にに来るか！」

声と共に鋭く息を吐いて、ブレデンが踏み込む。目の前の叛臣を上段から両断にする姿を夢に描いて。

しかし。

両断されたのは彼の剣であった。ヴァスガルトの剣は、ブレデンが斬り下ろすよりも早く振り上げられ、そして打ち下ろされていた。

鉄剣が青銅のなまくらを断ち割り、次にはブレデンの体をも、肩から股間に両断してしまう。

左右に分かたれたブレデンの体は、それぞれに膝を折り、そのままどうと倒れた。びくびくと痙攣して、その場を血溜まりに変えていく——ヴァスガルトはもはやそれには構わず、左右に居並ぶ家臣団を睨み渡した。

怯え竦む者、驚嘆する者、皆表情は様々だったが、しかし何にせよ、王の敵を討ち取ろうとする姿勢はそこには見られなかった。

力尽くではあったが、皆彼を新たな王と認めざるを得ない状況がすでに出来上がっていた。少々物足りなさを感じながらも、ヴァスガルトはブレデンの死体を跨ぎ越えるとそのまま泰然と玉座についた。思ったほどの座り心地でもなく、ふん、と彼は鼻を鳴らした。

「メルエーヴェ、来い」

ヴァスガルトが、玉座から彼女に手を差し伸べる。彼女はさすがに父王の骸を跨ぐような真似はしなかったが、その脇を通り過ぎて、迷わず彼の手を取った。

奇妙な昂揚感が、今彼を包み込んでいた。それは感慨ではない。まるであの時——暴竜クルヴォレクを討ち果たし、そうして切り裂いた心臓から迸る鮮血を、浴びるように飲み込んだあの瞬間のような。

物足りない。暴れ足りない——まるで暴竜が乗り移ったような飢えを感じながら、しかし彼はその感情を押さえ込んだ。

そうして、ようやく玉座についた感慨が感じられるが、それは妙に空虚だった。傍らのメルエーヴェの、父を失った悲しみも、彼の心に影を落とすほどのものではない。

ただ、それで事実が変わる訳でもない。この時、この場においてヴァスガルト＝ジュナが次代の王として台頭したこと——これは明確な事実であった。

ダロウェにおいての突発的な政権交代劇は、その後メルエーヴェの推挙により速やかに再編が行われ、ブレデンの近親者は全て排除、純粋に才覚を基準とした序列が築かれた。

ウルガ砦への出兵も滞りなく行われたが、しかし一つだけ禁じられたのは、ブレデンの死とそこからの一連の出来事を口外することだった。ヴァスガルトの賭けは賭けのまま、緘口令を敷かれた四千の兵はターニオス大公の下へと向かった。

魔女ティレイの存在はメルエーヴェを含むごく少数の者に伝えられるだけに留められ、ヴァスガルトは魔女と三百の兵を従え、新たに彼の臣下となった者たちの制止を振り切ると、そのままリモネの森へと足を踏み入れた。

荒事を望んでのことではないから、極力フェルトゥク族に出くわさないように、とダルケオ山脈に沿う道を辿る。およそ三日で森を抜ける見込みではあったが、ヴァスガルトがダロウェで見送った兵たちと交わした賭けの期日は三十日。決して余裕がある訳ではない。

その行程の二日目。森は深く、日の光もまばらに数条差し込んでいる程度で、昼といえども薄暗く見通しも頼りない。周囲は静まり返っているが、耳を澄ませば鳥獣の囁きのみならず、種々雑多に生い茂った木々草木の葉ずれの音なども聞こえてくる。

その幾重にも重なる深緑のアーチの中を、追従する兵から二人選び出して先を歩かせ、その後ヴァスガルトが続いていた。その左右にタナヴィス、ティレイがいて、そこからまた少し距離を置いて三百の兵が後を追って歩いていた。

今までのところフェルトゥク族が来襲する気配はまだなく、ヴァスガルトはブレデン王を討った時以来の高揚を持て余してしまっていた。ひどく好戦的になっているのが自分でも分かる。それを感じ取ってか、一行は言葉少なに森路を進んでいるのだった。

と。

「——うわあっ!？」

「え!？」

「おい、どうした——!？」

ひどく混乱した声、それは背後から聞こえてきた。ヴァスガルトらは、すぐさま反射的にこちらを振り返るが、そうすると今度は先行していた兵からも、同様に悲鳴のような声が上がった。

見れば、蛇のように垂れてきた太い蔦に絡め取られている者、見境をなくしてか同士討ちを始める者など、とにもかくにもそこではまともでない光景が展開されているのだった。

「お、フェルトゥクか？」

「……うーん、ま、場所が場所だし、それで間違いないんじゃない？」

嬉々とした声で問うヴァスガルトに、のんきな声でティレイが応える。突如の混乱のさなか、この二人だけが著しく緊張感を欠いていた。

「新王、寛いでいなくてご指示をお願いします！」

そんな二人を苛立たしげにそう諫めてくるのは、ほんの数日前にヴァスガルトに臣下の礼をとったタナヴィスであった。

彼は新王の即位式——それは略式の婚儀を兼ねたもので、彼が王女の婚約者の地位を失う場ともなった——の際、この王に臣下の礼をこそとったものの、しかし他の者のように忠誠を誓いはしていなかった。ブレデン王を資質なしと討ち果たしたヴァスガルトに果たして王の器があるものかどうか、それはこのデュハマ大公領遠征の中で見極める、と公言したのである。

それを知った上でこのような態度をとる新王はとうにタナヴィスの想像を越えていたが、ヴァスガルトにしてみれば、自分とティレイはフェルトゥク族に対抗することが役割であって、兵の混乱を収めてこれを指揮するのはタナヴィスの仕事である、と考えていたのだった。

「指示ってもな——ティレイ、どうする？」

「このくらいは序の口だと思うし、あたしとしてはもう少し様子を見たい気もするんだけど...
...ま、仕方ないか」

相変わらずの調子で会話を交わした後、ティレイは短く何かを呟くようにした。周囲の喧騒に紛れてしまって、何を言ったものか聞き取れるものではなかったが、彼女が魔術を行使したということはすぐに理解された。

様々に起きていたあやかしの現象が、皆その拘束力を失って元の無表情な森に戻っていったのだ。——いや、木々のざわめきとは別に、囁きあう声が樹上から聞こえてくる。

「おー、凄い凄い。.....何したんだ？」

「おおよそ狙われそうな人にかけておいた抗魔の呪いを発動させただけなんだけど。全部が全部当たるとはさすがに思わなかったわ」

ティレイにしてみれば、フェルトウク族が最初から強硬手段に出てくるとは思っていなかったので、それでおざなりな対抗策に留めておいた訳なのだが、しかしそれは守られる側としては恐ろしい話で、ヴァスガルトはともかく、タナヴィスなどは背筋に寒いものを感じてしまう。が、当のティレイは至って涼しい表情のままだった。

「さて、何か言い分があれば聞くけど？」

その樹上の者どもに向けて、ティレイが呼びかける。彼らはそれでも少し躊躇っていたようだが、しかし森の守護者としての使命感からか、ようやく返事が返されてきた。

『今まで幾度となく警告してきたように、我々は人間が森に立ち入ることを好まない。森には森の秩序があるということを知ろうともせず、貴様らはこれを乱すことしかしないからだ。素直に立ち去ればよし、立ち去らぬならば、我々はこれを実力で排除する』

どこからともなく聞こえてくる声。その一方的な物言いに、ヴァスガルトが溜息をつく。

「あーあ、聞く耳持たず、ってやつだな」

「フェルトウクの人間嫌いは今に始まったことじゃないわよ、これはどうしようもないし、興味もないけどね。——あんたたち、実力で排除するって言うなら、こっちも本気で対抗するからね。あんたたちの集落を見付け出して、森ごと焼き落としても、こっちには全く支障がないの。他がどうあれ、あたしたちは手早くこの森を抜きたいだけで、森の秩序とやらを乱すつもりはないんだけど、それでも敢えて邪魔をするって言うの？」

高圧的に言うティレイは、頭上の一点を見据えていた。未だ姿を見せないフェルトウク族の所在を見抜いているかのように。

魔術魔法の飛び交う人知を超えた戦いが始まるのか、とタナヴィスが兵を下がらせた。ヴァスガルトは泰然とティレイの傍らから動かずにいる。場の緊張が沈黙を飲み込んで膨らんでいく。

「ティレイ、もういいわ。攻めるぞ——」

『——待て！ 分かった』

ヴァスガルトが堪えきれずにフェルトウク討伐の号を発しようとしたその時、それを遮るように彼に呼びかけて、一人の人物が樹上から飛び降りてきた。すらりとした細い体躯に狼の耳、獣のような下肢——それらはまぎれもないフェルトウク族の特徴だった。華奢で柔らかな体の線をしているが、男性である。

「あら、どうしたの？」

大して驚いた風でもなく、ティレイがフェルトウクに声をかける。

「恐らく、我々に勝ち目はないのだろう。通り抜けるだけというなら、もう邪魔はするまい。だから、早々に森から立ち去ってくれ」

観念ついた、という表情で彼はそれを告げた。その視線は、ティレイでなく、ヴァスガルトに向けられている。

「そんなこと言って、また何か企んでるんじゃないのか？」

急に軟化した彼らの態度に不審を抱いて、そう訊ねたのはヴァスガルトであった。が、それを聞くとフェルトウクの青年は憮然として言い返してきた。

「我々は人間とは違う。嘘偽りを言うのは人間だけだ」

「……純粋なフェルトウクは確かにそうだとするし、信じてもいいんじゃない？」

ティレイがそう口を挟んでも、まだヴァスガルトは彼を半眼で見やっていた。が、ふと思いついたことがあって、急に表情を変える。

「ま、それならそれでいいや。それより、もう一つ頼みごとを聞いて欲しいんだが」

「もう一つ？」

「実は、俺たちが来た街ってのが深刻な食糧不足でな。武器を持ち込むのは本当にこれっきりにするから、食糧を運ぶのだけ、森を通るのを認めちゃくれないか？ 森の食べ物を獲るってのじゃとっても足りないし、それはあんたらにしても望ましくはないんだろ？ 頼む」

言って、ヴァスガルトは躊躇わず頭を垂れた。つい今の今まで一触即発の状態にいた相手に、である。

これにはフェルトウクも面食らったようで、彼は当惑した表情で樹上に向けて何ごとか喋りだした。すると樹上からも言葉が返ってくるが、どちらも聞き慣れない言葉で、理解のしようもなかった。

「……何て言ってんだ？」

「さあ？ あたしだって、彼らの言葉が分かる訳じゃないからね」

しかし、言葉の調子から見て取る分では、当惑した様子こそあれ、拒絶の色はあまり見うけられなかった。ややあって、再びフェルトウクがこちらに向き直る。

「分かった、認めよう。但しそこまでだ、それ以上は何も聞く気はない」

「ああ、それで充分だ」

ヴァスガルトはそれを聞いて快諾したが、しかしフェルトウクは、それと、と言葉を継いだ。「やはりあまり自由に森に立ち入って欲しくはないのだ。何か目印を付けさせれば、その者たちの通行は認めるから、その代わりそちらで森への立ち入りに制限を設けてくれ。それ以外に立ち入る者がいれば、その時には今まで通りに対処させてもらう」

当然といえば当然の条件ではある。難民が徒党を組んで野盗崩れになり、森を隠れ蓑に使おうとしたり、そうでなくともこのご時世に様々な理由から森に逃げ込む者というのは少なくない。言うなれば、フェルトウク族が人間の後始末をつけている訳なのだから。

「うーん、元はといえば迷惑かけてるのはこっちの方だしな。もし無断で立ち入る連中がいれば、そんな時には無理矢理にでも森の外に追い出してくれよ。そしたら後はこっちで始末つけるから。すぐにとは約束出来ないが、こっちのごたごたが落ち着いたら柵でも何でも作って森には立ち入れないようにするからよ」

この言葉をどれだけ信じたかは怪しいところだったが、しかし、フェルトウクはそれを聞くと、ありがたい、と返した。

「それじゃ、目印は竜に剣を掛けた紋章にしましょうか。竜殺しヴァスガルトの紋章。分かり易いでしょ？」

ティレイが脇からそう言うと、フェルトウクは僅かながら目の色を変えた。

「竜殺し？」

「そう、暴竜クルヴォレクを討ち取った称号。ま、その風格があるかどうかは別の話だけどね」
ヴァスガルトの粗暴さを差してティレイはそう笑った。だが、それを聞いたフェルトゥクはその切れ長の目を細めると、ヴァスガルトを値踏みするように見やった。

「竜を、か——なるほど、あれの血を飲んだのだな」

妙に納得した声音で、フェルトゥクが呟く。といて、その呟きの意味を欠片なりとも察することが出来たのはティレイだけであったが。

やがて一行はエルフたちと別れ、また北を目指し進軍を再開することとなった。その折、どうせならとエルフに道案内を頼もうとしたのだが、それはすげなく断られた。

『フェルトゥクが恐れたのは、あたしでなくヴァスガルト——確かに彼は竜の血を飲んだ。でも、それが何だと言うの?』

フェルトゥクの呟きが耳に残り、ティレイは一人黙考していた。ヴァスガルトの様子が変わったところはない。確かに武力においては卓越したものを見せているが、果たしてそれがフェルトゥクにとって脅威となるものだろうか。

考えたところで、答が出るものでもない。だからそのうちにティレイは考えることを止めた。

そうして三日目の夜、ようやく木々の列が途切れ、目の前には広く北の平原の眺望が開けた。デュハマ大公領西端の地。春の訪れを知らぬかのような残雪の平原の中ほどに、さほど大きくもない一つの街が見えた。

「ホトの街ね。ま、台所事情はダロウェと一緒にだろうからどれほどの戦力も残ってないだろうけど。それで、あたしは何をしたらいいのかしら？」

ヴァスガルトの傍らに立って、ティレイが自らの役割を尋ねた。が、彼はすぐには応えず、ホトの街を見遥かしながら、ふっと笑ってみせた。

「ああ……いや、頼みごとは済んだし、お前はゆっくり休んでくれ。あれは俺一人で落とす——さあ皆、夜営の準備だ。明日からは本格的に働いてもらうからな！」

「陛下！ 攻めるならば夜の闇に紛れての方が——」

それを聞き、他方に控えていたタナヴィスが意見してくるが、言い終わるより先、ヴァスガルトは煩そうに、彼の口を鷲掴みにして塞いでしまった。

結局どのようにしてもヴァスガルトの考えは変わらず、この日は森の外れを夜営地と定めて皆寝床についた。王が何を考えているものか誰も知りようがなく、休もうとしてとても休めるものではなかったが、ともかくそのようにして夜は過ぎた。

北の平原に朝靄が立っている。日の出と共に目を覚ましたヴァスガルトは自らの考えに従い、すぐさま行動を開始する。

誰もが、悪い夢に違いない、とそう信じようとしただろう。ティレイは、そこでようやく竜の血の凄まじさを知ることとなった。

「ホト王と全将兵に告ぐ！ 俺はダロウエの王、ヴァスガルトだ。降伏しろ、大人しく従えば配下にしてやらんでもないぞ！」

まだ日も姿を現しきらない頃。ティレイもタナヴィスも夜営地に留め、二本の大槍を持たせた槍持ち一人を従えてヴァスガルトは単身ホトの城門前——僅かに弓の射程外と思われる辺りに立ち、何を思っただろうか唐突にそのような勧告を発していた。

「お、王！ いきなりそのようなこと、無謀ではありませんか！？」

鉄製の二大槍を携えて追従した為ばかりのことでもないのだろう、すっかり息の上がった槍持ちが慌てて彼の暴挙を諫めてくる。が、当のヴァスガルトは涼しい顔でそれを聞き流し、槍を置いて戻るように、と指示した。

後方で口上を聞いた兵たちとて気が気ではなかつただろうが、彼らは手出し無用とヴァスガルトにしっかり言い含められていたから、その場を動くことも出来ない。ティレイは我関せず、タナヴィスもこれで死ぬならそれまでのことと諦観して、まるで道化芝居を見るかのような面持ちで、それぞれに王の愚行を眺めていた。

そんな異様な緊張感の中を割って、ひゅ、と風を切って飛来したのは、幾筋か射掛けられたホト弓兵の矢だった。いかに通れぬ道を通っての奇襲だったといえど、鼻先に留まって一晩過ごせば気付かれるのも当然のことだったろう。応戦の準備は万端、ということだ。

ヴァスガルトも、それくらいのことには分かっている。たった一人このような場所において、攻め寄せられれば一溜まりもあるまい。それが分かっているなおここに留まる理由——それは理屈ではない。ただならぬ激情の滾り、戦いへの飢えが、深層から彼を突き動かしていた。

「交渉決裂——残念だ」

にいつ、と笑い、彼は二大槍の一本を軽々と取り上げた。大柄な彼の身の丈をも越える鉄の長槍。それを彼は片手で棒切れのように持ち上げていた。

そして——

大木を斧が砕き割る音、それを重く激しく、天地に響き渡る大音声と変えたかのような轟音が平原に轟き渡った。

ホトの城門が失われていた。木製の門扉が粉々に砕かれ、石造りの城壁には遠目にも判るほどのひび割れが幾筋も走り、さらには余勢に圧されてかところどころから石壁が崩れ落ちていって城内の様子をさらけ出していく。

誰が信じるだろうか。矢も届かない距離から投げられた鉄槍が、放物線ではなく直線の軌道を描いて城門を吹き飛ばしたなどという法螺話を。ただでさえ設営に手間が掛かる上に命中精度の低い、当たれば幸いという投石器や石弓といった攻城兵器を遥かに凌ぐ威力を、彼は片腕一本の膂力で引き起こしたのである。しかも、一発必中という精度で。

前後に煙のように湧き上がる動揺の声を聞きながら、ヴァスガルトはもう一本の槍を拾った。

戦いたい！ 戦いたい！

衝動はまだ彼を支配していた。矮小な者たちのどよめきが彼に歓喜を与えている。

どれほど余韻に浸っていたのだろう、日はもう地平線を離れて、地平を明るく照らし出していた。城内の動揺は鎮まるどころか時を追って熱を増しているようで、ついに内紛を引き起こしたか、矛と盾の打ち合わされる音声が響いてきていた。

やがて、それも収まる。唐突に、城内は音を失った。

と、門扉を砕かれたホトの城門から、十数人ほどか、集団が姿を現してきた。木の板に何者かを磔にし、それを担ぎ上げているようだった。

訊ねるまでもない。磔にされた男は、ホトの領主だった。散々に暴行を受けたようで、すでに

彼は絶命していた。彼らはこれを土産にヴァスガルトの下に投降してきたのである。だが。

戦いたい！ 戦いたい！

衝動は未だ彼を突き動かそうとしていた。目の前に平伏し、ただただ彼に許しを乞おうとする矮小な者たち。それを見下す時、衝動は更に膨らんでゆく。

戦いたい！ 戦いたい！

殺したい！ 引き裂きたい！ 喰い千切りたい——！！

それが自らのものでないこと——否、我が身の内に棲まう禍々しい何者かの衝動であることに気付いた時、彼は既に大槍を振り上げ、今にも振り下ろさんばかりに腕に力を込めていた。

異変に気付いた者たちは、領主の遺体を投げ捨て、取るものも取らず逃げ出そうとしていた。自分は、この者たちを殺そうとしている。あの暴竜のように理不尽な力を以って——！

正に投げ打つ寸前——そのぎりぎりの瞬間に自制を取り戻し、辛うじてヴァスガルトは槍の放つ先を自らの足元に変えることには成功した。決して柔らかい土壌ではなかったが、しかし槍は泥濘に投げ込まれたかのように、すっかり土中に埋め込まれてしまった。

それで冷静さを取り戻したヴァスガルトは彼らの投降を受け入れ、そしてホトの兵を自軍に吸収編入した。三百の兵には無論被害はなく、ほぼ同数のホト軍も、ヴァスガルトの門扉破壊の際に十数名が軽傷を負ったのみだった。

ホトの統治に関しては、領主が死に、彼らが竜殺しの力を畏怖して必死に忠誠を示してきたので、殊更に介入するようなことはせずに彼らの自治に任せた。ヴァスガルトは一夜にして六百に膨れ上がった軍を率い、その日の内にホトを後にした。

それから、東進し立て続けに二つの街を攻める。

ヴァスガルトが単騎で攻めたのは結局ホトの時のみで、この二つの攻城戦に関しては先に投降したホトの将兵に説得させたり、或いは兵力の差を示して降伏を求めたり、と彼は嫌っていたはずの搦め手で戦いを有利に進めていった。

無論のこと、戦闘が全くなかった訳ではなかったが、しかし全般タナヴィスの用兵が功を奏したこともあり、被害は最小限に留められた。そうして、デュハマ大公領の公都ムオゼトを併呑した時、ヴァスガルト軍の総兵力は千を超える数になっていた。ターニオス大公領と同じく膨大な戦争消費に喘ぐ民衆は、戦争からの解放を唱えるヴァスガルトに同調し、士気も高い。

これに対し、大公ウラバル＝デュハマは前線の砦を捨て、ムオゼト奪回に全兵力を投入した。

ムオゼト郊外にて、ヴァスガルト＝ジュナの千の兵と、ウラバル＝デュハマの三千の兵が対峙する。ダロウェを発ってから二十と七日が過ぎた日のことだった。

「王！ ——王！？」

右も左も敵ばかりの絶望的な戦場で守るべき王を見失い、タナヴィスは気が気ではなかった。僅かに残された正常な部分は、早く悪い夢が醒めればいいのに、と神か何かに祈っている。

「タナヴィス、こっちだ！ 足を止めるな！」

目の前に立ちはだかってくる敵兵を数人まとめて斬り払い、前方からヴァスガルトが呼びかけてくる。気を取り直し、タナヴィスは剣を振り回しながらも彼の元に駆け寄った。

このようにして間近で見れば見るほど、この竜殺しの力というものは尋常なものでない悟る他なかった。後方よりどこより、ヴァスガルトの近くにいることが一番安全なのだ、とタナヴィスと彼に続く兵たちは理解した。

三倍の兵力を見せ付けるように横長に布陣したデュハマ軍に対し、ヴァスガルトは鏃のように陣を組み、一点突破によって勝機を得ようとした。その先陣を切ったのはヴァスガルトとタナヴィス、そしてダロウェから追従している二百の兵で、その後を残りの兵が続いている。

後方の兵がデュハマ軍に阻まれれば八方を塞がれて逃げ場を失いかねない下策だったが、王はタナヴィスの制止を振り切って出陣、今に至る。だが今、他ならぬヴァスガルトの力をこそ牽引力として、彼の軍はデュハマ軍を二つに割ってみせていた。

「ウラバルだ、ウラバルを探せ！」

タナヴィスが後続く兵に号を飛ばす。その声に惹き込まれてか、デュハマの兵が彼を討ち取ろうと群れ来るが、しかし彼の兵はよく彼を守ってくれていた。単身突出するヴァスガルトも全く危なげなく斬り進んでいる。

祈ることを諦めた彼の正常な神経は、あの魔女がいてくれたら、と語りかけてくる。だが、魔女ティレイはいつの間にか王の傍らから姿を消してしまっていて、ヴァスガルトがそれに構わなかった為そのことはうやむやにされてしまっていた。

「——覚悟！」

そのような隙を見抜いて斬り込んでくる敵兵の剣を、タナヴィスは辛うじて受け流し、そして斬り伏せる。

前進また前進、そうして人の波が消える。その先に単身ヴァスガルトが立っていた。鏃の陣形が、ついにデュハマの軍を貫いたのである。

「よし、生きてるな？ タナヴィス、ウラバルの首を獲るぞ！」

正面から自軍の兵、その左右からは敵兵の視線を受けて、こちらを向いたヴァスガルトが、にっ、とふてぶてしく笑う。そうして、タナヴィスに近寄ると彼の肩をぽんと叩いた。

「もうすぐティレイが援軍を連れてくる——それまでに大将の首くらい獲っとかないと、面目が立たないだろ？」

そうして再び敵兵の群れの中に飛び込もうとするヴァスガルトを、タナヴィスは腕を掴んで引き止める。

「どうした？」

目の前の敵兵から注意は逸らさず、ヴァスガルトが行動の意味を問い質す。

「闇雲に攻め込んでもウラバルには辿り着けやしません。居場所を突き止めないと——」

言いながらも、タナヴィスの目は投降兵から聞き出したデュハマの旗印を探していた。そうする間にも次々と敵兵が波頭のように押し寄せるが、後に続く味方の兵や、他ならぬ王自身がしっかりとそれを食い止める。

そして。

タナヴィスは右方に流れていくデュハマの旗印を見付け出していた。あれだ、と差し示すと

同時、ヴァスガルトが猛獣の咆哮の如く号を発して再び敵陣を掻き乱してゆく。

乱戦。やがて――

「ウラバルを獲ったぞ！ 俺たちの勝ちだ！！」

ヴァスガルトのその勝利宣言に、周囲の兵が一斉に勝鬨の声を上げる。それですぐに戦闘が終息した訳ではなかったが、しかし大将を失ったデュハマ軍の士気は目に見えて瓦解してしまっていた。やがて南方から攻め上ってきたターニオス大公軍の姿を見ると、ついに戦意を失い、彼らは皆武器を捨てて降伏したのだった。

「いやー、まさか丸ごと連れてくるとは思わなかったわ」

つい先までの戦闘の疲れも見せず、ヴァスガルトが明るく言った。

「丸ごと連れて来いって言ったのは誰だっけ？」

呆れて言い返したのは、ターニオス大公軍をここまで率いてきた魔女ティレイだった。彼女は先だってヴァスガルトの命で大公軍を動かす為に行方を離れたのである。言い出した当人がこの言い様では到底報われるものではない。

「それくらいに発破かけときゃ、半分くらいは連れて来れるだろーと思っただけなんだけどな。ま、おかげで助かったわ。ありがとな」

そう素直にヴァスガルトが頭を下げると、むず痒そうにティレイはそっぽを向いてしまった。

それで会話が途切れたのを狙って場に割って入ってきたのは、マズレン大公マレーヴ＝ターニオスだった。彼は半ば脅迫めいたティレイの説得に応じて軍の指揮権を彼女に委譲していたから、正確にいうならもはや大公と呼ぶことは出来ない。

ウルガ砦に辿り着くや、ティレイはダロウエの兵を扇動して砦を占拠し、その上でマレーヴ＝ターニオスに兵権の委譲か死か、と迫ったのだ。ブレデン王と違って彼は引き際というものを心得ていたようで、殆ど流血もなく兵権はティレイに移され、そうしてここデュハマ大公領への北征が実現した。

「全く、よもやこのような形で私の野望が砕かれるとはな。しかも、このような小娘や若造にしてやられたとは！ 一体私のしてきたこととは何だったのかと思ってしまうよ」

言うことは全くの恨み言であったが、しかし言うマレーヴの表情は奇妙に晴れやかだった。新たな王に向けて短く自己紹介を交わすと、彼は葡萄酒の入った酒瓶と干し肉を王に差し出してくる。

「そう言うなよ。——ま、ターニオス大公は死んだってことにしといた方がいいかも知れないな。あんた、辺境じゃ相当に恨まれてるからさ」

喉が渴いていたこともあり、ヴァスガルトはそれをひったくると浴びるように飲み、殆ど一息に飲み干してしまった。その様子を眺めながら、マレーヴは苦い笑いを浮かべた。

「それはそうだろうな、臣民に重責を強いたことは申し訳ないと思っているよ。私とて野心ばかりのことで兵を起こした訳ではないが、今となっては何を言っても言い訳になる。処断は貴公に任せよう」

彼の笑いはやがて自嘲めいたものになっていった。が、それを聞いたヴァスガルトは意外そうな表情を浮かべる。

「処断？ ああ、んなこと全然考えてなかったわ——つーてもまあ確かに償いは必要かもな。ティレイ、どうしたらいい？」

「だから何であたしに聞くの。あたしはあんたの配下じゃないのよ？ ……………ま、とりあえずは自業自得だし、難民と食糧不足の問題を解決してもらったら？ その先の処遇は働きを見てからでもいいと思うけど」

少し距離を置いて草原に座っていたティレイが、相変わらずむくれたままで、それでも律儀に応えてくる。

「なるほどな。よし、それでいくか」

ぽん、と手を打ってヴァスガルトはティレイの案を採用した。その判断の速さに、マレーヴが目を見張る。

「……それでいいのか？」

「ん、こんな若造に使われるのは嫌だったか？ 人手は絶対に足りやしないしな、使えそうな奴

なら何でも拾って来いって言われてんだよ」

ぼりぼりと頭を掻いて、ヴァスガルトが面倒そうな表情を作る。そのことは、ダロウエを発つ前に散々に言われてきたことだった。

「言われた？ 誰にかな？」

「メルエーヴェだよ。ダロウエのブレデンの娘。……っても知らないか」

「いや、そうでもないよ。聡明な娘だと聞いている。うちの配下の者が求婚して断られた、ともね。気難しいご令嬢だというのが、実際のところはどうなのかな？」

気難しい、という言葉に思い当たることが幾つもあって、ヴァスガルトは思わず顔を顰めてしまった。それを見て、マレーヴがさも愉快そうに笑う。そこには全く暗い影は見られなかった。

「なるほどな。——あい分かった。辺境の問題は私の不始末でもある、これは引き受けよう。安心してくれ、私は有能だからな」

そのようにしてヴァスガルトがティレイ、マレーヴらと話している間に、タナヴィスは兵を率いて敗残の将を狩り出し、後顧の憂いを排しようとして努めていた。反抗する者、恭順の意を示す者、身の処し方はそれぞれだったが、討たれたウラバラル＝デュハマの嫡子レクセントを始め、多くの者たちは望まずながらもヴァスガルトの元に降ったのだった。

レスレンティオ継承戦争が起こってより三年。この間の停滞が嘘であったかのような、それはあまりに鮮烈な新王ヴァスガルト登場の三十日だった。

国号、スウォン＝ジュナ。ジュナ家の新たな王国——

メルエーヴェの到着を待ち、旧ターニオス大公領首都マズレンで行われた即位式は、三軍約二万の兵、一万余の臣民を証人として大々的に行われた。

マズレン大公マレーヴ＝ターニオス、形式上ウラバルルの後継に仕立てられたムオゼト大公レクセント＝デュハマがそれぞれヴァスガルトの前に跪いて臣下の礼をとり、これによって正式に両大公領は新王の下に併合された。

これを統治する新王の紋章はティレイがフェルトウク族にそれと告げたものを意匠化し、剣が交差する上に竜の首が乗り、更に上部に王冠が配された図となった。竜殺しの王を示す意匠はよく凝らされ、まさに我が紋章とヴァスガルトを大いに喜ばせた。

次にメルエーヴェが正妃として壇上にあがると、彼女は自ら辺境——それはもはやダロウエ、レイゼルクのみならず中原西部全域を指している——が抱える諸問題の解消を約束し、そうして女性らしい慈悲深さを臣民に強く印象付けた。

彼女がそうすると、続けてヴァスガルトが根本的な問題、すなわち戦争の終結を約し、そのようにして救世主の如く現れたジュナ王と正妃を臣民たちは淀みない大歓声で迎えたのだった。

後はもう宴会また宴会、街中あげての祝祭となった。楽士は歌い奏で、芸人は舞い踊り、糧食が贅沢に振舞われて上も下も皆労われた。

ヴァスガルトを主賓とするその乱痴気騒ぎはレイゼルクのそれを数倍上回る規模で繰り広げられたが、その陰でメルエーヴェを中核とするスウォン＝ジュナ体制は性急に基盤固めを行い、それとともに難民、食糧問題の解消と東征準備を両主軸とした施策の検討を始めていた。

蓄えは多いに越したことはない。といえどもマズレン、ムオゼト共その備蓄量は相当なものになっていて、それはすぐさまダロウエ、レイゼルクを始めとする被搾取地域に返還された。また、災厄以後最大の規模となる二万の軍はしかしその教練、維持が困難であるという理由から傭兵、独身者を中心に八千を残し、後は故郷へと帰されることとなった。

八千の兵は四千ずつ南北の砦に割り振られ、そこからロシェ大公領に睨みを利かせた。統治に関しては、南部はヴァスガルトの直轄、北部はタナヴィスに委任されることとなり、それぞれ旧大公を補佐として玉座の脇に置いた。

また、それまでの統治形態——王、大公、領主、以下家臣団の暗黙の序列という曖昧な権力構造は排され、メルエーヴェは王の下に公候伯子男と爵位を授けて序列を明らかにした。マレーヴ、レクセントら旧大公は家名を取り上げた上で一先ずこの序列の外に置かれ、逆にタナヴィスは新たにヴィセルの家名を与えられて公爵に任ぜられた。

三十日に渡る戦闘があったとはいえ、兵の消耗は驚くほど少なく、士気も高かった所以他们はすぐにも東征を開始することを求めた。だがヴァスガルトは臣民への慰労を優先し、夏までは軍を動かすことを控えた。

この期間はまたメルエーヴェが思惑を巡らせた期間でもあり、彼女は早産の王国の憂いとなるもの——新王よりも旧大公に重きを置く者、或いはレスレンティオ王国への帰属意識を捨てられない者を降格、厳罰、または追放という手段を用いて悉く排除していった。

とはいっても彼女は臣民に対しては慈母の姿勢を崩さず、厳しい面はヴァスガルトら男性の役割だとして彼らに任せている。但しナバニール教団に対してのみはサルディエへの警戒もあって常に強硬さを保持し、布教権、教会建設権に関しては約定通り認めたもののそれ以上の譲歩は一切せず、同盟者としての関係を維持した。

そうして夏、ついにヴァスガルトは自ら軍を率いて東征を開始、一挙にロシェを包囲した。包囲を完了し、勧告をし、さらに一時の猶予を与えて、それでようやく彼らは気が付いた。それは

誰も予想し得なかったことではある。——まさか、一大公領の公都が無軍の廃城であったなどということなどは。

『古き都レスレントにて待つ』

ロシェ王の玉座に鎮で打たれた羊皮紙を、ヴァスガルトは乱暴に破り取ったのだった。

廃都レスレント——その名が示す通り、レスレンティオ王国発祥の地である。スラ河を挟んでロシェの東の対岸に位置するこの寂れた街は、災厄直後の黎明期には最大規模の都市として栄えたが、しかし一時期を境に衰退し、近年ではロシェ近郊の地方都市という位置付けがなされてしまっている。

一時期、というのは、大国としてのレスレンティオ王国が興り、王都が北のヴァドステンに遷されてから間もない頃のことである。

元々レスレンティオ王国は周辺の王国とともに中原に栄える小国であったのだが、初代王により諸王会議が開かれ、紆余曲折の末に中原諸国を纏めた連合王国が形成されることとなり、そうしてレスレンティオ王家が初代の連合王国国主となったのだ。

この背景には災厄という悲劇を共有する世代の戦争回避という意図と、東部のダファルマン山脈以南に勢力を拡大したアザフ＝マイエ帝国への対抗力が早急に求められたということがあったが、諸王会議が平和裏に進められたといえ、何の代償もなく連合王国になった訳ではない。

その条件の一つとして、レスレント大公領からオーゼン大公領に譲られたのが、このレスレントであったということだ。その後大公が河向こうに新たな公都ロシェを築いた為にレスレントは衰え、住む者も疎らな廃都となっていったのである。

その廃都の、荒れるに任せた城。置き捨てられ、煤けた玉座に今、一人の若者が悠然と腰を落着けていた。その前に跪くのは、ロシェ大公ヴロク＝オーゼン。老人はその姿勢のまま留まり、壇上から下される言葉を待っていた。

玉座から眺められる夏の中原の景色は、川向こうに田園の鮮やかな緑と晴天の青が広がり、そしてその先にロシェの街が一望できる。街の周囲には大軍が動かされた為だろう、今は土埃が舞い上がっていて、そこだけ色が褪せたようになってしまっていた。

「ロシェも落ちた……か。いずれこのようなことも起こるかとは思ったが、案外早かったものだな」

玉座の主は、顔にも声にも色を浮かべず、ただそれを眺めていた。

それまではあくまでもレスレンティオ王国の後継を争っていた大公たちによる内紛に過ぎなかったものが、スウォン＝ジュナ王国の台頭により、戦争はその様相を急激に変えつつある。

幸いにして、今はまだ最大の懸念であるアザフ＝マイエ帝国の介入は見られていないが、新王国の征服速度は率いるヴァスガルト王の英雄性の故か甚だ驚異的である。帝国がダファルマン山脈を越えたならば三つ巴の争いは避けられないが、しかしレスレンティオ国内の再統一さえも、残る三大公の間に生じた溝はもはや修復の仕様もなく、実力による決着を見ずには内紛は収まりそうになかった。

かつて熱望された王子の帰還さえも、ことここに及んではもはや何の意味も持たない——ならば、ロシェ大公が彼に跪く意味はなかったのかも知れない。それでもなおヴロクがそうするのは、彼にそれだけの資質を見出したからのことであった。

「これでスラ河以西、版図の半分が失われたことになりますな。今になって我が城を訪れたこと

、どのような思惑あつてのことか、そろそろお聞かせ願えませぬか？」

玉座から下された言葉に、ゆっくりとヴロクは顔を上げた。その振る舞いは、たった今自身の城が落ちたものとはとても思えぬ落ち着きぶりだった。

「思惑？ いいや、何を企んでいる訳でもない。ただ、決着をつけたいと思っただけだ。お前たちには、それを見届けてもらおうと思ってな。

——ヴロク、お前が俺を迎えてくれたことには本当に感謝している。俺にはそれに報いる術はないが、しかしお前の臣民を無用に傷付けるような真似はしない。せめて、それだけは約束しよう」

それで言葉を切ると、彼は立ち上がって段を下りた。そのようすをじっと見据えていたヴロクは、それ以上のことを訊ねることはせず、応じて立ち上がると彼と肩を並べて歩き始める。

フォルティス＝レスレント——唯一にして最後の王国の後継は、そうしてついに戦場に赴いたのだった。

「我をおいて王を騙る強欲なる篡奪者よ、兵の数になど頼らず、一人河を渡り我と剣を合わせるがよい。さすれば、我は王位が不可侵にして唯一絶対のものであると、この場にて証してくれようぞ！」

レスレントの北辺、今しもスラ河を渡河しようとする新王国軍の前に立ち、何を臆することもなく朗々と告げたのは、フォルティス＝レスレントその人であった。彼の背後にはロシェ大公の軍五千が控えている。

対する新王国軍の兵数もまた五千。自領の防備に三千を残していたから、数の上では拮抗している。とはいえ新王国の軍は、レイゼルクを仲介としてダルケオ・ドゥメラク族から仕入れた鉄製の武器防具を兵の大半が手にしていること、またヴァスガルトが決起からこちら負け知らずで攻め進んでいたことが士気を高めていた。

反面、ロシェ大公の軍は死守すべき首都を一つの抵抗も許されずに放棄させられ、その後の指示に関しても明瞭さを欠いていたから、こちらはどうしても士気は上がらない。地の利を捨ててこのように正面から向かい合ってしまうと、勝ち目などどこにもなかった。

が、両軍とも動く様子はない。

動いたのは、この広い戦場においても、ただ一人ヴァスガルトのみであった。彼は今も先頭に立って兵を率いていたから、先の口上が誰のものかは、誰よりも先に知ることが出来ていた。

竜殺しの後、すぐに別れてしまった相棒——いや、フォルティスは相棒である前に、ヴァスガルトの師であり、また越えられない目標でもあった。卓越した剣技、優美な物腰、機知、明察...それらはどれも当時のヴァスガルトには望んでも得がたいものであった。今でも、それを得られたとは彼自身思っていない。

しかし、越えなければならない。そうでなければ、大陸を統べたとて、真の王であるなどとは誰も認めはしないだろうから。

気付けば、背後にはすでに動揺の色が広がり始めている。河向こうに立つ男が何者であるか、まずは勘のいい者たちがそれと察し出したようだった。動揺だけで済めばよいが、しかしあまり徒に時間を消耗すれば、それはいずれ軍を割る結果をも引き起こしかねない。その辺りはマズレン、ムオゼト征服後、旧王国寄りの者にも寛容さを示していたことが裏目に出てしまっていた。

「フォルティス、どうしてお前がそこにいる？」

思いもかけぬ事態にも動揺は奥底に隠して、ヴァスガルトは王者の声を対岸に向けた。

「どうして、だと？ 知れたこと、王を騙る無法者に真の王が裁きを下しにきたのだ。もはや問答は不要、とくここに参れ！」

「.....はっは一、どこにいるかと思えば、こんなところにいたとはね」

河向こうのフォルティスを眺めやりつつも、いつの間にか新王の隣に立ったティレイは、感心したような呆れたような声を発した。

「.....知ってたのか？」

「まさか。——でもまあ、さすがは生まれながらの王族、というところね。あんたよりはよっぽど風格があるじゃないの。さあ、あたしはどっちについたものかしら？」

ヴァスガルトが疑わしげに睨むが、しかし魔女は飄々とそれを受け流した。尖った顎の先に拳を置いて、しばし黙考する。

ティレイにしてみれば新王に与したのはあくまでもフォルティスの代役を務めさせる為でしかなかったから、当のフォルティスがこのように行動を起こしたなら、彼の側に立つのが筋というものだろう。

「俺よりあいつを選ぶのか？」

声を低くして、再度ヴァスガルトが問う。王として最大戦力を奪われることを恐れた、というよりはどこか惚れた女に取り縋る男のようでもあって、むしろそのことにティレイは背筋に寒いものを感じてしまった。

「怖い顔しないでよ。……確かに筋を通すつもりなら彼の側に立つべきだとは思うけど、でも今となっては王座に近いのはあんたの方だしね」

それが分からない男ではなかったと思うけど、とこれは胸中で呟くに留める。

「だから、今回私は一切手出ししないわよ。あちらがああ言ってくれてることだし、ここは決闘で白黒つけてきたら？」

「どうしたヴァスガルト、よもや臆したなどとはいうまいな？」

そうか、と明るく応えようとした彼の言を遮り、さらにフォルティスが挑発を重ねてくる。新王は今度こそ迷いなく彼の方に向き直った。

「いいだろう、どちらが上に立つべきか、はっきり思い知らせてやる。今すぐ出向いてやるから、その間にしっかり首を濯いでおけよ」

言うが早いか、ヴァスガルトは身につけた鉄鎧を剥ぎ取るや河の深さも確かめずに歩を前に進めてしまっていた。スラ河は大河の一支流に過ぎなかったから浅く緩やかではあったが、そうではなかったとして今の彼なら何も構いはしなかっただろう。腰まで河に浸かっても、大股で危なげなく進んでいく。

「陛下、危のうございます！」

兵の動揺を収めようと努めていたタナヴィスがそれに気付いたのは、もうすでに新王が河の半ばまで進んだ辺りでのことだった。彼は王を追って河に入ろうとしたが、横から伸びた杖に阻まれて歩を止めてしまった。

「大丈夫、野暮はさせないから。——それに、向こうの彼もそんな無粋な横槍を許す性質じゃないしね」

「……、彼？」

後の方は声をひそめたつもりだったが、ティレイの言葉を耳聡く聞き取ったタナヴィスはそう鸚鵡返しにしてきた。

「ええ、彼。……そっか、あなたたちが知る訳はないのよね。フォルティス＝レスレント——元々は傭兵ヴァスガルトの良き相棒。彼にその気があれば、今頃は竜殺しの王子として名実ともに備えた大陸の王ともなれたんでしょけど。でも彼はそうしなかった。だから、今頃になって落ち目の王国を継いでも意味はないとあたしは思うけど」

応えながら、ティレイは我知らず少し表情を翳らせている。そこで切れた言葉を、タナヴィスが継いでくる。

「ですが、もしフォルティスが陛下を下すようなことがあれば？ 民草の支持もありましょうが、陛下とて覇を以って西を掌中に納めた方。ここで彼がそれ以上の力を示すようなら、皆正統に傾くのではありませんか？」

私自身は陛下とお后に忠誠を誓っておりますが、と付け加えるのを忘れず、タナヴィスはそう懸念を明らかにした。だが、それを聞くとティレイは大きく溜息をついてみせる。

「だったら、レスレンティオの先王が逝った時に素直に跡を継いでいればよかったのよ。今更フォルティスがこんなことをする意味はないの。全くね」

彼女自身フォルティスの考えがまるで読めず、声には多分に苛立たしげな色が混じっていた。

「それに、フォルティスがどれだけの力を持っていたとして、今のヴァスガルトに勝てるはずは

ないわ。確かに腕は立つけど、所詮は人間、人外の者に勝てるはずはないもの。それどころか、振り返りにあった時には、レスレント王家は断絶。連合王国は墜滅することになる——」

「人外の者？」

確かにヴァスガルトは尋常でない強さを誇るが、しかし人外の者とは些か言い過ぎではないか——タナヴィスは諫めるようにして問い返したが、しかしティレイはすでにそれを聞いてはいなかった。不穏な想像が黒雲のように彼女の心中を過ぎっていた為だ。

そうして、その時にはヴァスガルトは渡河し終えて、フォルティスと正対していた。かつての相棒は、五千の兵を背後に控えさせて、悠然とこちらの様子を窺っている。

その視線には取えず構わず、ヴァスガルトは水を吸った鎧下を脱ぐと、それを後ろに放った。歴戦を重ねた逞しい黒い上体が露になる。

とうとう完全に無防備な姿を敵前に晒すことになって、タナヴィスや他の家臣らは今にも泡を吹かんばかりであったが、今となってはもう手の施しようもない。ただ新王の悪運の強さを信じて祈るばかりであった。

「久し振りだな、ヴァス。いや、出世したもんだ」

さすがにお互い剣の間合いにまでは踏み込まなかったが、フォルティスはなるだけ距離を縮めると、周囲の者には聞こえない程度の声でそう切り出した。

「それはティレイにも言われたよ。王さまなんて言われてもいまいちしっくり来ないけどな」

声量をそれに合わせて、ヴァスガルトが応える。さすがに再会を素直に喜ぶ心境にはなれなかったが、だからといって敵意を向けることも出来ない相手である。正直、戸惑いが感情の大半を占めていた。

「ま、お前には元々縁のない世界だっただろうからな。だが、活躍ぶりは俺の見込んだ通りだったよ。ちゃんと皆が笑い合えるだけの活気を取り戻させてくれた——本当に感謝している」

「お前に言われると何かくすぐってえな、今まで褒めてくれたことなんてろくになかったらうによ。………一体全体、これってのはどういう風の吹き回しなんだ？」

フォルティスが虚を交えず真摯に語っていることは分かっても、その笑みにかかる鬨りの理由はヴァスガルトには理解できなかった。彼の中で、焦燥が戸惑いに取って代わろうとしている。

「お前がこれだけ気を張ってくれているんだ、俺も報いてやらないといけないと思ってな。それに、いつかは幕引きをしなきゃならなかった、ってのもあるし」

「……幕引き？」

「ああ。お前の王国が統一を果たした時に、レスレンティオの王子が行方不明のままってんじゃ、後に火種を残すことになるだろう？ お前に後を託したのは俺なんだから、けじめはしっかりつけないとな」

悲壮な笑みが、ヴァスガルトの黒瞳に映る。フォルティスにはもう躊躇いなどはないのだろう、新王が見て取った廃王子の鬨りは、むしろ彼自身の迷いが映り込んだものであるかのようにも思われた。

「フォルティス……」

「おいおい、憐れんでくれるなよ。今は敵同士、向ける顔が違うだろ？——それでな、最後にもう一つ頼みがある。聞いてくれるか？」

努めて明るい表情を見せて、フォルティスがそれを告げる。それが遺言だと分かれば、ヴァスガルトには首を縦に振る他に採る術はなかった。

「王都ヴァドステンの下に、メルクドネアという街がある——王族の他には誰も知る者のない、魔女メリーシャヤが統べる死人の城だ。俺の祖父は魔女と契約を交わし、それによって中原を統

べる力を得た。

だがそれはつまり、魔女の傀儡に成り下がるということではかない。俺が玉座を拒んだのは、魔女に魂を売り渡すのが耐えられないことだったからだ」

それを聞くなり、ヴァスガルトはそれまでの動揺が嘘のように、眼光を鋭くさせた。

「俺に、その魔都を滅ぼせ、と？」

「ほ一、察しがよくなったな。ああ、それを頼みたい——っても、お前がここで俺に勝てたら、の話だけだな。お前が俺にすら勝てないというなら、俺がお前の軍を使ってメルクドネアを攻めるだけの話だ」

そこで話は終わりだ、とでもいうように、フォルティスも視線を剣呑なものに変える。

半裸のヴァスガルトに合わせてのことだろう、ぱちりと留め金を外して、自身も鎧を脱いだ。しかしそれを見るだけでも、彼が当時の強さを些かも失っていないだろうことは容易に想像することが出来た。背後のロシェ大公軍が動揺の声をあげるも、そのようなこと、全く意にかけようとはせず、すらりと腰の剣を抜き放つ。応じて、ヴァスガルトも剣を抜いた。

「俺だって昔のままじゃない。楽に勝てると思うなよ？」

「当たり前だ、油断なんかするものかよ——さあ、時は来た。全ての力が、正統たる我が元に返還される時。そして篡奪者ヴァスガルト、貴様に裁きが下される時だ！」

その口上はヴァスガルトにではなく、この決闘を見守る周囲の者たちに向けて発せられたものだ。ついに新旧二つの王国の戦いに、一つの決着が着けられようとしている。

二人を取り囲む一万の兵たち。彼らは今、水を打ったように静まり返っていた。

ゆっくりと、しかし確実に両者の距離が縮められていく——機先を制したのはヴァスガルトだった。

号も激しく、鉄剣を喉元に突き込む。が、跳ね上げられたフォルティスの剣は、それを難なく弾いていた。その動きに無駄はなく、体ごと旋風の如く回ったかと思えば、その勢いを買って彼は袈裟懸けに剣を打ち据える。

「うおっ！」

それが打ち込まれば、鎧うもののない骨肉など容易く打ち碎かれるだろう。間一髪、ヴァスガルトは引き戻した剣でそれを受け止めていた。

だが、それに囚われず、フォルティスはヴァスガルトの足と足の間踏み込むと虚をついて当て身を喰らわせる。下半身の動きを封じられて踏ん張りも利かせられず、新王が無様に地に転がされる。

そのまま串刺しにするように剣を逆手に構えるフォルティス。それが突き立てられる寸前、ヴァスガルトは肢間に置かれた足を挟み込んで身ごと捻り、彼を引き倒していた。

さすがに地に転がったままで打ち合いが出来るはずもなく、彼らはそれぞれ反対方向に転がって距離を取ると、間合いを外して立ち上がった。

「惜しいな、獲れたかと思ったんだが」

こともなげにフォルティスが言うのける。どっ、どっ、どっ……としかし対するヴァスガルトの心臓は、緊張からか早鐘のように打ち鳴らされていた。

「冗談、こんな簡単に終われるかよ」

呼吸を整えようとするが、しかし鼓動は自制を越えて更に早くなっていく。そのことはヴァスガルトに不安を与えていた。恐れではない——不安。

それは対峙するフォルティスにしてみれば好機に他ならない。今度は彼が先手を取る形で、再び鉄剣が打ち合わされた。両者とも剣を握る手に全力を込めて、互いに押し切ろうと闘ぎ合う。

「どうした、そこまでか？ 自分の目が曇っていたかと思うと、悲しいな」

「く……好き勝手言いやがってよ！」

力比べの最中だというのに、こちらを嘲ってみせる余裕ぶりのフォルティスに、ヴァスガルトは強く臍を噛んだ。転がった時に砂を食ったか、口の中が苦い。

体格から鑑みるに、ヴァスガルトが押し負けるということはそうそうないはずであった。しかし、現に彼はフォルティスに押し負けてしまっている——フォルティスとて彼が実力を出し切れていないと見切っていたからこそ、本来勝ち目のない純粋な腕力の勝負に持ち込んだのである。

「クルヴォレクの血も所詮何の意味もなかったようだな。お前は俺に勝てない。なら、ここで楽にしてやろう」

悲しげに言い、フォルティスは下腹部に蹴りを喰らわせて強引に間合いを離す。

「何の意味もないって？ お前に何が分かる！」

「分かるさ。そこまでやっても、結局お前は俺に勝つことは出来なかった。死は過ぎた野心の代償だ。恨むなら、己が弱さを恨むがいい！」

あまりの侮辱に苛立たしげに声を荒げるヴァスガルトだったが、しかしフォルティスは憐れみの色さえ加えて彼を嘲った。

——殺したい！ 殺したい！

地鳴りのように激しく強く打ち鳴らされる鼓動は、いつしか明瞭な叫びとなって彼の中に響いていた。衝動が、今にも彼自身から強引に主導権を奪い去ろうとしている。

「……そこまで言うなら見せてやるよ、竜の血の力ってやつを。けしかけたのはお前だ、今更後悔しても遅いからな」

後悔などするものかよ——しかしフォルティスがそう言い返すことは叶わなかった。先ほどまでの鈍い動きから一転、神速の斬り込みをヴァスガルトが見せていたからだ。

受け流すような余裕は与えず、その尋常ならざる膂力は受ける体ごとフォルティスをたっぷり数歩分は吹き飛ばしていた。辛うじて体勢を崩さずに堪えた彼に、さらにヴァスガルトが迫いする。

力も速度も、先ほどまでの数段上をいっている——しかし、血に飢えた獣のような気配を帯びて振るわれる剣は、実に単調で直線的だ。あっさり数合でそれを見抜くと、すぐにフォルティスは難なくそれを受け流せるようになり、ついには守勢から攻勢へと転じて見せた。

「確かに力は大了なものだよ、しかしな、御しきれない力じゃあ俺には通用しない」

理性の薄れた目に焦りを宿したヴァスガルトを、攻め手は緩めずフォルティスが叱責する。意味が通じたか、或いは単に焦りの為か、獣と化したままの新王が、ぎりっ、と嫌な音を立てて歯噛みする。

「畜生に墮したかヴァスガルト、俺の知る相棒は竜など飼い慣らしてみせると言ってくれただろうがな。——憐れだ、もはや見るに堪えん」

ヴァスガルトの剣を大きく外に弾くと、フォルティスは止めとばかりに大きく剣を振り上げる。新王はその動きを両の目で捉えていたが、しかし超人的な膂力をもってしても、いや、その力を以って振ったものを受け流されたが故に、容易に剣を引き戻すことが出来ない。

次の瞬間には、見詰める両の目の間にあの剣が振り下ろされ、そうして死ぬのだろう。そのような時に至ってさえ、内奥の叫びは止むことを知らずにいた。

殺したい！ 殺したい！

殺したい！ 殺したい！

違う！——と、ヴァスガルトが叫んだ。

勝ちたいんだ！ この男に！

我知らず、彼は己ならぬ声に打ち克っていた。強く純粋な願いが、憑き物の欲望を組み敷いたのである。

だが、現実が変わる訳ではない。時は無常に移ってゆく——が、今のヴァスガルトにとっては、その流れはひどくゆったりと感じられた。

フォルティスの剣が振り下ろされる。ゆっくりと。

あれを受けてはいけない。しかし自身の剣を振り戻すには力が足りない。ならば。

迷わず、ヴァスガルトは剣を手放していた。勢いよく河向こうへと投げられたそれには目もくれず、彼は空になった手を全力で引き戻す。

フォルティスの目に、初めて驚愕の色が現れる。ヴァスガルトが振り下ろされる剣を掴むや、勢いと臂力に任せてそれを折り取ったからである。

半ばから折り取られた剣は、狙いを外れて空を切った。両腕を振り下ろしてしまって、フォルティスが無防備な上体を晒す。ヴァスガルトは、折り取った剣をその胸の中心に向け、杭を打ち込むようにして深々と突き込んだ。

抗いがたい力に、フォルティスが膝を折る。糸の切れた人形のように後ろに倒れこもうとするのを、ヴァスガルトが刺した剣先が支えていた。

そこに至って、ようやく彼の刻は早さを取り戻した。

「フォルティス！？」

すぐには、自分がそれをやったのだということが理解出来ない。我知らずヴァスガルトは驚声を発していた。

ごぼっ、と吐き出した血でその彼の体を汚し、途端に蒼白げな顔に変わりながらも、しかしフォルティスは笑った。嘲笑ではない。それは実に満ち足りた笑顔だった。

「どうした？ お前は勝ったんだ、少しは嬉しそうにしるよ」

声を発するだに苦しげに見え、とても軽口を言う余裕などあろうはずもないというのに、それでもフォルティスは笑うことを止めようとはしなかった。

気付いて、ヴァスガルトが胸の剣を引き抜こうとする。が、ずっとそこに添えられた手は、弱々しくもそうされることを拒んでいた。

剣は確実に心臓を損傷させているようだったから、抜けば死期は途端に早まるだろう。そう思い至って、ヴァスガルトはそれはそのまま彼が押さえるのに任せて、彼の上体を寝かせて膝上に抱くようにした。

「済まないな、何から何までお前に押し付けちまって」

時折咳き込みながら、掠れた声で囁くようにフォルティスが語り掛ける。

「いいさ、好きで始めたことだ。お前に頼まれたからって訳じゃない」

突き放すように、ぶっきらぼうにヴァスガルトが応えた。その彼の声も掠れている。

「なら、そういうことにしておくか。——そうだ、ティレイのことも頼まなくっちゃな」

もはや見えているかどうか定かでない視線を、フォルティスが河向こうに向ける。

「ティレイを？」

「あいつも俺と同じ、メリーシャヤに人生を狂わされたかわいそうな奴だ。出来れば、あいつも救ってやって欲しい」

「……………俺は王だ、頼まれなくたって、俺の後ろにいる奴は全員守ってみせるよ」

「そうか、頼もしいな。ああ……もう俺の仕事はなくなったみたいだ。……さあヴァス、次の仕

事を探さなけりゃ……な……」

そこで、フォルティスの言葉は途絶えた。

手向けの言葉も浮かばず、その軽くなった体をヴァスガルトは抱え上げた。

「殿下は、ご自身が倒れた後には速やかに降伏し、あなたさまの傘下に加わるよう仰せられました。その命には従いましょう——ですが、一つだけ条件がございます」

いつの間にか背後に佇んでいた男が、立ち上がった新王の背中にそう語り掛けた。驚きもせず、聞こう、とヴァスガルトは振り返る様子も見せずにそれに応えた。

「その方は、我々の手で葬らせて頂きたい。それさえお許しを頂ければ、我々はあなたさまの忠実な剣となり盾となりましょう」

その老人——ロシェ王ヴロク＝オーゼンはそこまで言うと、こちらを見もしないヴァスガルトに向けて跪き、そして頭を垂れた。

「好きにしろ。但し、墓碑に家名を刻むことは許さん」

頼む、と言い掛けたただその一言を喉下で押し止め、代わりに新王は冷然とそう告げた。

そう、自分は王なのだ。齒向かって敗れた者に情けをかけては王威に関わる。だから表に出すことはないが、むしろヴロクの申し出はヴァスガルトにとっても有難いものであった。

表情を殺し、胸元を血に染めたフォルティスの遺骸をヴロクに下げ渡す。そうして、いまや中原唯一の王となったヴァスガルトは、河向こうの忠実なる臣下たちに向けて雄々しく手を差し上げると、彼らに勝利の声を上げさせたのだった。

「き、貴様っ！ 余が誰か分からぬと申すか！？ 余は一なる王国レスレンティオが王、キュクノス＝アダンであるぞ！」

いっそ憐れなほどに狼狽し、それでも玉座は渡すまいとするその小男は、どこか母親に縋りつく赤子のさまにも似て玉座に張り付いていた。

「一なる王国？ そんなもんがどこにある。寝言を言うには随分と早いはずだがな」

「不埒者、余を愚弄するか！ 誰か——メリーシャヤ、メリーシャヤはどこか？ 余を一人にするな、メリーシャヤ！」

不意にその女の名を口にすると、まるでそれまでのやりとりがなかったかのように、不安げに小男は首を巡らせた。

抜き身の剣を下げた目の前の男たちもその視界には入っていないようで、メリーシャヤを探しに行こうとでもいうのか、彼は立ち上がるとふらふらと歩み出そうとした。

が、目の前に立ちはだかった男は、どんと突き飛ばして再び彼を玉座に押しやった。

「何だ、何者だ貴様！ 余を王と知っての狼藉か！？ 身の程を知れ、打ち首にしてくれるぞ！」

それで小男はようやくまた彼らに気付いたようだったが、しかし話は再び振り出しに戻ってしまったようだ。もはや取り合う気力もなくして、男は高々と剣を振り上げる。

それが何か不思議な興味深いものであるかのように、小男がその切っ先をぼんやりと眺めてくる。男はそのような様子にも寸分の躊躇いも見せず、玉座ごと彼を一刀両断にして見せた。

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ。——身の程知らず」

ロシェ併合後、ヴァドステン陥落までの道程は困難を極めていた。

敵は北のヴァドステン大公ではなく、東のウィーゼン大公だった。ヴァスガルトとフォルティスの一騎打ちと機を同じくして動いたウィーゼン大公ヴォートス＝ルスオレンは、ロシェ領ラフダニ、ヴァドステン領ゼシューマに侵攻、瞬く間にこれを併合して版図を広げると同時、スウォン＝ジュナに睨みを利かせてきたのだ。

だが、フォルティスとの約束を重んじたヴァスガルトはこれに構わず、総勢一万となった兵のうち三分の一を自ら率いてヴァドステン攻略を開始してしまう。

残された六千の兵は宿将タナヴィス＝ヴィセル、ヴロクの推挙で登用されたダーケン＝ディリゼを軸にレスレントに陣を構え、ウィーゼン大公に立ち向かった。質量とも勝っていた新王国軍ではあったが、しかしムオゼト、ゼシューマ二方面からの波状攻勢に梃子摺り、一時はレスレントを奪われロシェへの後退を余儀なくされる一幕もあった。

一方、ヴァスガルトが直接指揮を執った北征軍も、ゼシューマから放たれた遊撃部隊に翻弄された挙句、兵糧を焼かれて進撃を断念せざるを得ない状況に追い込まれる事態となった。

結局は後方からの援軍が間に合い、退却してきたヴァスガルトの軍がロシェ攻略中のウィーゼン大公軍を後方から攻める好位置を占めたことによって撃退、一転反攻に出てレスレントを取り戻しはした。しかしその時には被った被害はすでに甚大なものになってしまっていて、ヴァスガルトも北征の一時断念を余儀なくされた。

劣勢を巻き返すことも出来ぬまま、冬の訪れが休戦を強要する。状況から考えれば悪いことではないのだが、しかし軍中の士気は低く、重々しい雰囲気疲労感を強めていた。

前線ではそのように事態は深刻化の一途を辿っていたが、しかし王国全体を俯瞰するなら、そ

う悪いことばかりが続いた訳ではない。マズレンに置かれた王宮では、ザルマーオ、ベオレフスという二人の王子が日を同じくして誕生していたのである。同日といっても双子ではなく、腹違いの兄弟ということになる。先に産まれたザルマーオは市井の女キャレリの子、そして後のベオレフスが正妃メルエーヴェの子であった。

後の継承問題を懸念したメルエーヴェが、出産の直前であるにも関わらず、事実がどうであれ公にはベオレフスが先の出生であると報じるよう厳命する一幕も見られたが、とにかく、この慶事は後方のみならず前線の兵士たちの士気を高めることにもなった。

そのことばかりが理由ではないにせよ、軍の再編成を済ませたヴァスガルトはこれを機として大反攻に転じ、先ずは元来ロシェ領であったラフダニを占拠した。

ここにはゼシューマ、ウィーゼン双方から相次いで大軍が押し寄せ、レスレント攻防にも勝る激戦が繰り広げられたが、しかし宿将タナヴィス＝ヴィセルはこれをよく守り通した。

他方、ロシェからの北征を断念したヴァスガルトはダーケンを伴ってムオゼトから東進、これによってヴァドステンを攻略した。

当時のレスレンティオ王ラズモーヴを毒殺し、中原のみならず大陸全土を劫火の底に沈めた狂える宰相キュクノス＝アダンを、もはや意味を失った玉座共々葬ると、ヴァスガルトはダーケンに後事を任せてヴァドステンに留まる。

軍を任されたダーケン＝ディリゼはそこからゼシューマ攻略に向かった。すぐにこれを落とせずとも、それでラフダニを守るタナヴィスの負担は軽減されるはずだった。

いつの頃からか辺境救済から大陸統一へとその目的を変えた戦争は、まだその終わりを見せない。だが、それはもうヴァスガルトの手を離れたといつてよかった。今の彼には、別の目的がある。

メルクドネアを滅ぼすこと。フォルティスの遺言がなくとも、その存在を知れば彼はこれを滅ぼしていただろう。人以上の存在、人を脅かす存在など決して認めない——そのことは今や彼の信念ともなっていた。竜の力も、ティレイの魔術も、彼にとっては信念を貫き通す為の武器でしかない。それは彼自身無自覚のことではあろうが、いつの頃からか、彼の中にはどこか自棄的さえある民衆救済の使命感が芽生えていて、竜の血が引き起こす殺戮衝動以上に強く彼の心を支配していたのである。

さて。

ムオゼト、ゼシューマにおいて激戦が繰り広げられている現在、両都市と隣接するロシェが安全であるなどとは誰にも断言することは出来ない。

それでも、誰もメルエーヴェがロシェに王宮を移すことを止めることは出来ず、勢いスウォン＝ジュナの王都は彼女の意向のままにここに遷都された。彼女にしてみるとダロウエは勿論のこと、マズレン、ロシェも仮宿に過ぎず、旧王国に倣ってヴァドステンに本拠を構えるつもりであったようだが、しかしそれについてはヴァスガルトが断固として反対したのだった。

実際、ヴァドstenはキュクノスの無策の為にすっかり荒廃してしまっていたから、とても遷都どころの話ではない。結局、ヴァドstenの南に新たな城都を築くことが正式に定められ、ロシェはメルエーヴェの意向通りそれまでの仮宿とされた。

また、元来王宮の主であるはずのヴァスガルトがロシェに滞在する時間はこれまで以上に少なく、精力的に前線に赴いて兵を鼓舞したり、長い戦いの疲れを労ったりしていたが、実のところ大半の時間はヴァドstenでのメルクドネア探索に費やしていた。

かつては大陸一の大都としてその壮麗さを誇った旧王都ヴァドstenは、今では華も人もなく、打ち捨てられた遺骸の如くそこに横たわるのみであった。

なるほどこの荒れようでは、守るべき価値も、或いは攻めるだけの価値もない。千の兵を率いて攻め寄せるや否や、投降するから助けてくれ、兵糧を分けてくれ、と乞食の如くに群がった百あまりの人民は殆ど住人の全てであったようで、彼らを他の都市に移住させてやると、もうここで生きた人間に出会うことはなかった。

代わりにヴァドstenの主の如く幅を利かせて振舞ったのは、いつからいたものか活死体や骸骨兵というような死霊の類で、これの為にメルクドネア探索は遅々として進まなかった。

「——最後っ！」

鋭い号と共にヴァスガルトが鉄剣を横一閃に薙ぎ払うと、三体ばかり残っていた骸骨兵は胴ばかりでなく全身の骨をばらばらにして吹き飛ばされてしまった。さすがにここまで粉碎されては、再生も困難であるようだった。

「まったく、数ばかり多くて、うっとおしいったりゃありゃしねえ」

めきっ、と嫌な音を立てて、ヴァスガルトの足元でカタカタと顎を鳴らしていた頭蓋が踏み潰される。その新王一人ばかりは余裕綽綽という態であったが、しかし背後から聞かれたのは揃って安堵の吐息であった。

無理もない。ヴァドstenに足を踏み入れてより後、これまで昼も夜もなく彼らは死霊の群れに襲われているのである。しかも退治してみたところで、観察してみると、どれも間を置くと何事もなかったかのように復活してみせるのだ。無論、先のヴァスガルトのように粉々にまで粉碎してしまえば容易には復活してこないものの、それでも甦りを食い止められるかどうかは定かでない。

ヴァスガルトが自ら育てた近衛兵二百が今は三交代でメルクドネア探索を行っているのだが、それも遅々として進まず、徒労感が疲労の色を強めてしまっていた。今も、冷静に対処すれば決して怖い相手ではないはずの骸骨兵に、彼らは思わぬ痛手を被っていたのだ。

「仕方ない、今回はここまでだ。皆、引き上げるぞ」

嘆息交じりの号令に従って、六十余りの兵らは来た道に戻り始めた。それでようやく皆生氣を取り戻したということは、ヴァスガルトには見えていて辛いものがある。

「これで西側はあらかた調べ尽くしましたね、見落としがなければ、後は北で終わりとなります。——陛下、魔女どのの助力を乞うことは叶いませぬか？ 敵も魔女、我々では見付けられ

ぬよう、あやかしの術を用いているやも知れませぬが」

羊皮紙に描かれたヴァドステンの概略図にまた一つ×印を付け足しつつ声を掛けてきたのは、今もゼシューマ攻略の指揮を執っているダーケン＝ディリゼの長子、ダルアムであった。

魔女としてのティレイの存在は一般には嚴重に秘匿されていたが、しかしその一方でダーケンのような近習の者や、或いは息子ダルアムのように近衛を務める者などにはその存在は明らかにされていた。

彼女はヴァスガルトに協力を申し入れたとはいえ、一つところには決して留まらず、こちらから連絡をつける術はなかった。とはいえこれまでは、必要と思われる時には彼女の方から現れてくれたのでそれでもよかったのだが、しかし今回のことに限っては一向に姿を現す気配はない。

しかし、ダルアムの申し出も仕方ないとは思えども、この件に関してだけは元よりヴァスガルトは彼女に助力を乞うつもりはなかった。フォルティスの言葉を信じるなら、メルクドネアにいるのはティレイを凌ぎ、彼女を使い魔として用いる魔女である。下手に手を借りれば罠に落ちる恐れとて少なからずあるだろう。

「ティレイ……ね。ま、そーなんだけどな。悪いけど、もーちっと頑張ってくれや」

気安く腕を肩に回し、にっ、と笑いかけてヴァスガルトはその話をはぐらかした。王自らにそう言われては、近衛兵二百の長たるダルアムとてそれ以上のことが言える訳でもない。何か考えがあるのだろうと一先ずは口を噤んだ。

「にしても、自分で呼んだくせに影も見せないってのは、性質が悪いったらねーな」

さすがにヴァスガルトも終わりの見えない探索に倦んだものか、ぼそり、と口中で呟く。それが聞こえた者など、耳下で囁かれたダルアムくらいのものであっただろうが――

『招いたとはいえ、こちらから使いを遣る前に土足で踏み込まれてはね。礼を欠く客人に開く門戸は備えておられませぬ。――とはいえ、性質が悪い、とは聞き捨てならぬ言いざますね？』

その女の声は、明らかにその呟きに応えてのものであった。

無論、ダルアムの声ではない。信頼の故か、或いは薄情なだけか、他の近衛兵たちは先に帰途についてしまっていたし、いたとしてその中に女がいるはずもない。女は戦場に立つものではない、というのは当代の習いであったし、ヴァスガルトにもそれに異論はなかったから、目の届く限り彼の軍に女はいないのだ。最精鋭たる近衛ともなればなおさらのことである。

となれば、声の主が何者であるか、という想像にどれほど選択の余地がある訳でもない。魔女。ヴァスガルトもダルアムもすぐにその結論に辿り着いていた。

「悪いな、待ってられなかったもんでよ。田舎者なもんで、礼儀に疎いのは勘弁してくれや――だが、聞き捨てならない、つーのは怖い言い方だな？」

どこからとも知れず響いてくる声に、敵意を剥き出しにした笑みをヴァスガルトが向ける。ダルアムの肩から腕を外すと、腰の剣に手を掛ける。

『無礼のほどは、田舎育ちというばかりのことではないようですけれど？ さて、どのように詫びていただきましょうか……ふふ、この寂れた城都をずっと彷徨わせるというのも面白そうですけれどもね』

姿を見せる気配はまるで見せぬまま、嫣然とした口調で女はさも楽しげに不吉なことを言い放つ。高みからこちらを見下ろすようなその不遜な視線を感じて、癪に障ったヴァスガルトが歯を剥いてみせる。

「メリーシャヤ、だな？ 姿も見せずに話を進めるってのは無礼とは違うのか？」

『あら、先に無礼を働いたのはそちらさまではなくて？――』「――ですが、ええそうね、無礼に無礼で返すというのも己を貶めるばかり。……………こうして向かい合うのは初めてでしたね。

妾はいと古き都メルクドネアの主メリーシャヤ＝バレル、以後お見知りおき頂ければ幸いですわ
」

言葉の響きが不意に変わったかと思えば、物陰から、魔女はいともあっさり二人の前に姿を現した。腰まで伸びた淡い金の髪、深い碧の瞳、触れれば折れるかと思われるほどしなやかな肢体を薄布の如き濃紫のドレスで着飾ったさまは、一目見たなら男ならずとも感嘆の吐息をつかずにはおられぬだろう。

だが、視覚に訴えるその艶やかさより先にヴァスガルトが嗅ぎ取ったのは、そのあまりの禍々しさであった。魔女——その呼び名に相応しい凶気を帯びた女を前に、ちりちりと首筋を蠢くものがある。

「魔女なんぞと、長く付き合うつもりもないけどな。俺はヴァス——」

「いいえ、今更紹介などして頂かなくとも、あなたさまのことは重々存じておりますわ。若き中原の覇者、新たな王国の王。或いは、竜を屠りその血を聞き召すも、その呪わしき力に恐れ慄くばかりの者。違ひまして？」

測るまでもなく明らかにヴァスガルトの間合いに身を置いていながら、しかしメリーシャヤは嘲りの色を些かも減じるものではなかった。

「ほーお、詳しいな。覗き見が趣味か？」

「趣味？——ええ、楽しみがないとは申しませんが。ティレイを側に置かせたのには、それなりの意味がありまして、ね」

さすがのヴァスガルトも、魔女と対峙するのはこれが初めてのこと。まるで手が読めない、という現実が尋常ならざる緊張を彼と彼の忠臣に強いていた。鏡面のように張り詰めたその緊張のなかに、しかしメリーシャヤは無造作に言葉を投じてくる。

「ティレイ？」

「妾の愛しい使い魔……側に置いて、色々とお役に立ちましたでしょう？ あなたさまが王位を望んでおられると伺って、その器量を測るつもりで遣わしたのですけれど」

思わず問い返していたのは、ヴァスガルトではなくてダルアムの方であった。が、ちらりと一瞥を向けるのみでそれには構わず、魔女はあくまでも新王に向けて語り掛け続ける。

「使い魔、ね。ティレイはお前が俺を王にしようとする訳は教えてくれなかったが……そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか？」

人を人とも思わない魔女の口振りは、聞く者に嫌悪を通り越して憎悪すら覚えさせたが、ヴァスガルトはしかし慎重さを保った。剣を持つ手は固く握り締めているため血の気が引いて色を失っていたが、それでも彼はそこから力を抜くことはしなかった。

「訳？」

その言葉がさも意外であったかのように首を傾げ、それからメリーシャヤは玉を転がすように笑った。手の甲で口元を押さえ、ひとしきり笑い終える——と、ヴァスガルトがそれを鋭く睨んだ。

「何がおかしい？」

「いいえ、少し驚いてしまっただけ。訳、というほどのことはないのですよ。あなたを王位に就けようとしたのは、妾の不肖の息子がそれを捨ててしまったから。それで仕方なく次善の策をとった訳なのですけれど、ならばいっそ古いものは皆取り払ってしまおうと思いましたが、ね。——アダンも他の大公も、所詮は同じ穴の貉でしたから」

こともなげに——彼女にしてみれば真実そうであったのだろうが——あたかも自室の内装を取り替えるような、そんな気軽さでメリーシャヤは応えていた。人の想いも死も、取るに足らない

ことであるかのように。

「お前が——お前が、この戦争を起こしたのか!？」

いよいよ激昂し、ヴァスガルトが吼える。

「妾が? いいえ、幕を切って落としたのは、知っての通り、市井上がりの宰相キュクノス＝アダ。妾はあれの野心をくすぐっただけですわ」

「それはつまり、お前が仕掛けたということだろう! そんな莫迦げたことの為に、フォルティスは死ななければならなかったというのか!!」

激発する感情のまま、ヴァスガルトの剣が閃く。固い手応えがして——そして、確かな現実感を持っていたはずの魔女の姿は、霞が風に払われるようにして掻き消えてしまった。

ただ、その像を被せられていたらしい骸骨が、一閃を受けて粉碎されてしまう。

「.....幻?」

「相手は魔女だ、それぐらいは芸のうちにも入らんだろうさ。——なあ?」

その光景に我が目を疑ってか、驚愕の面持ちで呟いたダルアムに、ヴァスガルトがこともなげに応える。剣を振るって発奮したものか、すでに彼は冷静さを取り戻していた。

『まあ、ジュナ王にお褒め頂けるとは、夢にも思いませんでしたわ。——フォルティスの運命は、今にして思えば、ラズモーヴが妾に逆らった時から定まっていたこと。妾とてティレイを遣わしてあるべき処に彼を戻してやろうとはしたのです。その手を払ったのは他ならぬ彼自身、もはや妾には為しようがありませんだ』

媒体を崩されて再び声だけとなり、メリーシャヤはその問いに応えた。その響きは確かに愛息の死を悼む母親のそれであったが、しかし、感じ取られるべき感情の色は空虚だ。

「魔女を使役し、更には王をも下僕とする女帝に、為しようがなかっただと? もういい、お前はこれ以上フォルティスの名を口にするな。友を汚されるのは我慢ならん」

『悲しみの形は人それぞれ違うもの、あなたさまがそのように仰られるのでしたら、妾はそのように致しましょう。——このままとりとめもなく語らうのも愉快なもの.....ですが、そろそろ本題と参りましょうか。』

ジュナ王ヴァスガルト、我が下に降るおつもりはございませぬか? あなたさまの勇名、今や大陸の端から端まで馳せております。妾が手を取られれば、大陸統一の折には千年の安寧を約束いたしましょう。王家の為にも、また臣民全ての者たちの為にも、決して悪い申し出とは思われませぬが、いかが?』

穏やかならぬヴァスガルトの噴気も暗黒の如くに飲み込んでしまって、そのように魔女は冷然としたままで告げる。対して、王は憤然としたまま、吐き捨てるようにして応えた。

「手を取れと言うなら、差し伸べてからというのが筋だろう——どちらにせよ、俺がお前の軍門に降ることはない。王威に取り付く寄生虫め、俺が退治してやるから待っている」

『まあ、月並みな台詞ですこと。妾が寄生虫とは中々面白い例えですけれどもね。——正しく例えるなら、妾は母。力なき子らを護り導く者。王威などはそれを為すための手段の一つに過ぎないのです。あなたがそれを拒むというなら、妾はまた新たな依り代を探し出すだけ、些かも定めが変わるものではありません。』

ですが.....妾も性急にことを進めようという訳ではございませぬ。人の心は移ろうもの、しばらくは心変わりを待つと致しましょう——少しばかり、手助けなどして差し上げながら、ね』

メリーシャヤの口振りにはまるで変わるところはなかったが、しかし、ざわり、とした不快な感触が、ヴァスガルトに空気の変化を感じさせていた——突如、右方から射掛けられた一矢を、彼は抜き身の剣で払い除ける。

「手助けだと？ 魔女め。貴様、俺の兵に何をした！」

その一矢を契機として立ち現れた、ヴァスガルトとダルアムを取り囲む無数の鎧武者たち。新王には、鎧に描かれた竜貴の紋章も諸々の顔の一つ一つも、それが自らの懐の内であったものであるとすぐに見出していた。

先にこの城都を去ったはずの六十の近衛兵——二人を取り囲んでいるのは、正にその彼らであったのだ。憎悪を剥き出しにして隠そうともしない視線が真っ直ぐに向けられる先は、彼らが王と仰ぐべき貴人であった。

『人は人外の力を恐れるもの……間近でそれを目の当たりにするこの者たちは、特にその思いが強うございました。妾はその恐怖をくすぐっただけ。そう、アダンの野心をくすぐったのと同じように。』

これは現実の縮図——近い将来に避け難く顕れる悲しい現実の縮図なのです。守るべき臣民に矛を向けられて、あなたはいかがなさります？ 彼らの歪んだ感情に身を委ね、彼らの思うさまに任せますか？ それとも、自らの怒りに任せて彼らを滅ぼしましょうか？』

恐怖、疑念、焦燥、或いは後悔や絶望——様々な感情は渾然として渦となり、次第にその輪を狭めてきている。メリーシャヤに正気を奪われたというなら救いはあったかも知れない。しかし、彼らは扇動こそされ、魂を抜かれ操られているものではないようだった。

王の側にあってこれを護る者。文武共に優れ、最も信頼されるべき近衛兵たちが、護るべき王に自らの意志で牙を剥いている。その事実は、ヴァスガルトを大いに動揺させるに足るものであった。

ことに彼らは、新王が自ら選りすぐり、そして鍛え抜いた者たちである。裏切るはずのない者たちによる叛逆、それはメリーシャヤの言葉にとてつもない重みを与えていた。

「俺は……絶対に死ぬ訳にはいかない。ここで死ねば、俺たちの戦いもフォルティスの死も、全てが無駄になっちまうんだ。俺が強いてきた多くの犠牲の為、苦しみ喘ぐ臣民たちの為に、俺は何を犠牲にしても、この暗黒の時代を終わらせなけりゃならないんだよ。

——お前ら、そこを退け。今なら全部なかったことにしてやる」

「——黙れ！」

鋭く、とはいいいようもなく氣勢を衰えさせた弱々しい叫びが、ヴァスガルトの耳を打つ。叛逆したとはいえ、彼らがそのような口をきくとは思いつまなかったのだろう、新王は我知らずそれを言った兵を睨み返してしまっていた。

その視線の鋭さに完全に気圧されてしまいながら、しかし、それでも彼はその後を続けてくる。

「き、貴様！ 竜殺しだと？ 莫迦な、そういいながらその実、貴様、魂を竜に喰われた魔人なのだろうが！ 我々にはそのような人でなしを王に据えておくことは出来んのだ！ いつ本性を現すとも知れん暴竜の化身になど！！」

睨み付けはしたものの、それきりどうすることも思いつけずヴァスガルトはそのまま固まっていたのだが、しかしそれで気を大きくしたか、彼は段々と語気を荒げて叫びを上げるまでになっていた。

方便を用いようとすれば、幾らでも言い繕うことは出来たのかもしれない。だが、今のヴァスガルトは焼きごてを喉に突き込まれたかのように口が動かず、焦燥から何を反論することも出来なくなってしまっていた。

魂を竜に喰われた魔人——それはヴァスガルト自身が最もよく自覚し、そして最も恐れていることを端的に示している言葉だった。だから、その効果は言葉を発した一人の近衛兵の想像を越

えて、新王の心の内奥深くにまで刃を突き立ててしまっていた。

「お前たち！ 自分が忠誠を誓った陛下に向けてどうしてそのようなことが言えるのだ。陛下は常に我々のことを思いやり、万民に平和を与える為にこそその剣を振るわれておられるのだということは、我々こそがよく知っていることではないのか？」

確かに陛下のお力は尋常なものではない、恐れる気持ちは私とて分からんではないよ。しかし、そのお力を陛下が私情の為に用いたことがあったか？ 断じてそれはない。魔女に唆された者たちよ、お前たちは真に見るべきものを見失っているのがどちらか、それすらも分からなくなってしまったというのか？」

動揺に打ち震えるヴァスガルトに代わって前に出たのはダルアムであった。彼は殺気だった叛逆者たちを目の前に置いても、些かも怯まずに朗々と道理を唱えてみせた。それを聞いて、対峙した者たちの表情にはありありと苦しげな色が浮かんでくる。

「キュクノス＝アダンを唆してレスレンティオのラズモーヴを殺した魔女が、今はお前たちを唆して陛下を亡き者にしようと企んでいるのだ。真の敵は魔女メリーシャヤ、こやつを滅ぼす為にこそ我らと陛下とはここに赴いたのではなかったか？ それを忘れて叛逆の意志を貫くというなら、憐れだ。もはやこれ以上は何も言うまい」

その口舌に、幾つかの者たちは確実に戦意を削がれたようだった。迷いを強くした者も多いだろう。しかし、それらばかりが全てではない——むしろ道理に反発するように、敵意に固まった者たちも少なからず見られた。彼らは、ダルアムに気圧されて後ずさる者たちとは逆に前へと一歩踏み出し、とうとう抜刀して身構えてきた。

もうこれ以上の問答は意味もないことだろう。ダルアムは内心深い悲しみを抱いたが、しかしそれを表すことはせず、腰の剣に手を掛けた。

と、それを制したのは、ヴァスガルトだった。新王はダルアムの前に伸ばした腕でそのまま彼を後に下がらせると、自らが剣を抜いて構える。

「悪いが、譲ってくれ。こいつらを戦いに巻き込んだのは俺だ、ならば、引導を渡してやるのも俺の役目だろう」

言ったと同時に、向かい合う十余りの叛逆者たちのなかにヴァスガルトは身を投じていた。乱戦。しかし、どれほどの間も置かずに決着はついてしまっていた。

立っているのはヴァスガルトただ一人。他は皆地に臥して動かず、彼の剣を鎧を鮮血で赤々と染め上げていた。

もはや何を見るでもなく虚ろになった目を宙に向け、しかし言葉には乗せられるだけの憎悪と毒を乗せて、呟く。

「——メリーシャヤ、見ているな？ 俺にはお前に迎合する意志はかけらもない。今は負けを認めてやるが、いずれ絶対にお前は俺がこの手で滅ぼしてやる。それまでの命だ、今はこのかび臭い廃都で悠々と過ごしているがいい」

このヴァドステン何処かに身を置いているはずのメリーシャヤは、しかしそれには何も応えることはなかった。ただ、埃を孕んで吹いた風が、まるで魔女の嘲笑のようにヴァスガルトを挑発しているかのように流れた。

仮の王都ロシェへと戻った傷心のヴァスガルトを待ち受けていたのは、全く予想外の事態であった。

大胆な奇襲奇策を用いてスウォン＝ジュナ王国国境部を翻弄したウィーゼン大公ヴォートス＝ルスオレンが、突如その自領を南のアザフ＝マイエ帝国に明け渡したというのだ。

その理由としては、一つには四大公領を飲み込んで巨大化した王国に対して短期決戦を挑むも膠着し、長期化したことが国力の乏しさを露呈させたこと、重ねて、レスレントでのフォルティスの死とヴァスガルトによるヴァドステン併合が決定付けた旧王国の崩壊が、一大公領に過ぎない小領ウィーゼンの孤立を浮き立たせた、ということが考えられた。

だが、この時ヴァスガルトが頭に描いた理由は、それとは全く別のことであった。しかしひとまずその想像は隅に置いて、彼は納得しかねるという態で顔を顰めさせた。

「時宜が合わん。ラフダニ、ゼシューマを得たとはいっても、我々はいまだウィーゼンに取り付いてもいないのだぞ？ 国力が乏しいといって、そうそうすぐに玉座を捨てられるものか？」

ロシェの王城内、謁見の間での朝議の折である。興国の頃には猪武者に過ぎなかったヴァスガルトも、そろそろ玉座に腰を落ち着けた姿が板についてきたようだった。

正妃メルエーヴェも王子ベオレフスを抱いて彼の隣に座を置いていて、その体にはもう次の子を宿していることが遠目にも見て取れるようになっていた。

この日はラフダニ防衛を一任されていたタナヴィス＝ヴィセルも臣下の長として朝議に参加していて、彼と近衛兵長ダルアム＝ディリゼがその脇を固めている。後は言葉通りの有能さを示して家名を回復したマレーヴ＝ターニオスやその他の近臣が序列に則って左右に並び控えていた。

今はタナヴィスが自らもたらした凶報——アザフ＝マイエ帝国によるウィーゼン大公領併合——をヴァスガルトに献じたところであるのだが、王は彼に対して先の異論を向けたのであった。

「私とて、にわかには信じ難い事態であるとは思いましたが、しかしこのことに限っては疑う余地はない、と思われます」

王にそのように言われても、タナヴィスははっきりとヴァスガルトの目を見返して応えた。

「ほう、言うな。何か根拠があるとでも？」

「は、……申し上げにくいことではあるのですが……」

謎掛けを愉しむように問い返すヴァスガルトに、しかしタナヴィスはそこで言葉を濁してしまう。その表情の翳りには気付いても、影の深さには気付かず、更に王は問い掛けを続ける。

「どうした、何か憚るようなことがあったか？」

「非常に解釈の困難なことで——しかし、この者の働きかけというならこの速やかな併合劇にも納得は出来るのです。魔女ティレイ。彼女が今ウィーゼンの城中にいる、と斥候から情報がもたらされました」

そのタナヴィスが発した名に、ざわり、と謁見の間そのものがざわめいたように感じられる。その名は公には秘匿されていたが、ヴァスガルトの活躍の陰に隠れたティレイの功績は有実無実の噂となって臣下の間に流れて知れ渡っていたから、ここにいる者でそれを知らぬ者はいないはずであった。

味方であれば心強いが、敵に回れば魔女が恐ろしい存在であることは疑いようもない。ことにティレイはその出自からジュナ王に仕える理由までの一切を明らかにしようとはしなかったから、その存在を王から知らされていた者でさえ、彼女を信用出来る者は少なかったのだ。不安が現実のものとなったことは、大きな動揺を与えるに足りている。

「そうか、ティレイが」

ただ一人——いや、正確にはダルアムもだが——驚くこともなく応えたヴァスガルトはしかし

、やはりな、という呟きは心の内に留めた。脇を見れば、ダルアムも彼と同様の意見であるようだった。

魔女メリーシャヤの策動。ヴァスガルトの次の候補として帝国の支配者ユルベナフ＝マイエを選び出したというなら、性急と思える併合劇もあの魔女は楽々とやってのけるだろう。

場の動揺はまだ長く尾を引いていたが、しかし一瞬でそれは鎮まり、彼らはただ一点に視線を集めた。

ヴァスガルトが立ち上がった為だった。彼は壇上から場を見渡すと、そこにいる全ての者に向けて告げた。

「よし、直ちに全軍を率いてウィーゼンを攻めるぞ！ 久々に俺が先陣を切る、怠けた兵には将共々喝を入れてやるぞ。——ティレイに関しては必ず生かして捕らえる。殺すこと、逃がすことどちらもまかりならん。直々に問い質したいことがある、捕らえたらすぐに俺の下へ連れてくるんだ。いいな？」

この頃にはスウォン＝ジュナ王国は常設軍を制度化していて、それをういてウィーゼン大公領と接する国境線を護っていたのだが、ヴァスガルト参軍の報が広まるとたちまち臨時召集の新軍が編成され、それは瞬く間にラフダニに集結した。

常設軍と併せて、その総数は実に一万を越えた。ヴァスガルト王は宣言通り先陣に立ってこれを指揮し、ウィーゼンに正面から侵攻する陣立てをとるが、しかし旧大公軍——否、今や帝国軍と名を変えた新生の軍は地の利を生かした要撃を繰り返して新王国軍の進撃を阻み、実に包囲網の完成までに四半年もの時間を費やさせた。

大兵力を動員した新王にとってこの南征の長期化は、兵糧の喪失という事態によって軍団の維持を困難にさせるだろう、という先の反省を生かした旧ウィーゼン大公の読みであった。だが、しかし事前に街道の整備など国策を充実させていたメルエーヴェはこの策を易々と打ち破り、それどころかそこから更に続く長期のウィーゼン包囲をも達成させる大補給線を実現させていた。

この後援を得たヴァスガルトはウィーゼン包囲をヴィセル公に委ね、自身は帝国の援軍として南の港都ゼファンから北上してくる帝国軍本隊の迎撃を務めた。そうして更に四半年の後、ついにウィーゼンは陥落したのだった。

ヴァスガルトは決戦宣言から半年でこの最後の公都を落としたことになるのだが、新王はそれ以上は軍を進めず、帝国に対して停戦を提案した。攻めれば落とせていただろう中原最南端の港都ゼファンは中立地帯として独立させ、これを緩衝地帯とすることで両国の衝突を食い止めようとしたのである。

批判はむしろ国内から発生し、新王に大陸の完全な統一を求める声が相次いだ。しかしそれに優先する目的を持つヴァスガルトは構わず、交渉の為に自ら帝国領に赴くことさえしてみせた。この間、帝国には新王を亡き者にしようとする不穏な動きもあったが、しかし今の彼に対して常人に用いる毒や刺客というようなものが役に立つはずもない。そのこともあってだろう、停戦交渉は終始有利に進められ、結局交渉は王国側の提案通りに決着した。

それから直ちに中原に戻ったヴァスガルトは、しかしすぐにロシェには戻らず、途中、占領したばかりのウィーゼンに立ち寄っていた。四半年にも及んだ攻城戦で城壁は形ばかりのものとなっていたが、その市外には討ち取られた最後の大公ヴォートス＝ルスオレン他将官の首が晒され、それ以上に死兵の遺骸が累々と積み上げられていた。

それを横目に入城した彼が向かったのは地下牢である。日も差さぬ城の最奥部——饅えた匂いのするそこは牢番一人の他には人の気配もなかったが、しかし、牢番がランタンを手に先導した

先には、小さく蹲る姿が一つあった。

このような場所には不釣り合いな少女——或いは黒い外套を羽織った魔女の居場所というのはこのように薄闇の中であるのかもしれないが——が、鉄格子の向こうに蹲るさまは奇妙という他ない。それでも現実に少女はただ一人そこにいるのだ。ティレイ。杖を奪われた魔女。

「これがこの女の持っていた杖でございます。今は大人しくしておりますが、何を考えているものか……陛下、どうぞお気をつけて」

牢番がくぐもった聞き取り辛い声で言い、差し出してきたのは一振りの短い杖だった。明らかに彼女を見下した物言いに新王が一睨みすると、訳こそ分からなかったにせよ、身の危険を感じた牢番は即座に彼から離れる。

古木から削りだしたらしいその杖は、紛れもなくティレイが用いていた呪具に他ならない。だが、そこには複雑な紋様こそ刻まれていたが、ヴァスガルトが手にとったところで、彼にはそれをどのように用いるものかなど見当もつかなかった。

彼がそれを半眼で眺めている間に、牢番が手早く鉄格子の錠を外す。それでも少女は向こうを向いたまま反応を示そうともせず、その背中を眺めながらヴァスガルトはそこをくぐった。

「しばらく見ないと思ったら、こんな悪巧みをしてたとはな。……俺に手を貸してくれてたんじゃなかったのか？」

その声をきいてようやく反応を示したティレイは、びくり、と驚いたようにして一層身を縮こめさせた。怯えているものらしく、こちらを見る気配もない。

「前はあんだけ自信たっぷりにしてた奴が、随分と小さくなっちゃったもんだ。何を恐れてる？俺か——メリーシャヤか？」

返事はない。が、答は明らかだった。

ヴァスガルトに聞かせられた名に、ティレイがひどく怯えている。彼はその震えが落ち着くまで、決して短くない時間をじっと待った。

「またあたしの力を借りに来たの？ 残念だけど、あたしにはもう何の力もない……杖なんて、あったってもう飾りにもならないわ」

口振りは以前のままでも、その響きは自嘲の色ばかり目立って弱々しい。蹲ったままであったから、小さい声は一層くぐもってしまって常人には聞き取るのも困難であったが、ヴァスガルトであればこそ、それも拾うことが出来ていた。

「そうか……ま、それはいいんだ。もうお前に荒事を頼むつもりはないしな」

新王はなるだけ語調を抑えて穏やかにしたが、それに意味があるかどうかは定かでなかった。応えるティレイの声には、相変わらず気が籠められないままで、皮肉げな物言いも虚しい。

「そうなの？ ああそうね、スウォン＝ジュナも今や大陸最大の王国、あたしの力なんてなくても統一は成し遂げられるものね」

「いや、戦争はもう終わった。帝国とは停戦ってことで話がついたんでな。表向き、俺もお前も役目は終わったってことだ。皆誤解してるようだが、俺だって戦争狂いって訳じゃないんだよ」

「——嘘つき」

愚痴を言うように肩を竦めたヴァスガルトに、ティレイは初めて鋭く言葉を返した。幾分生気の戻った目を、ようやくこちらに向けてくる。

「あんたはそれでも、あんたの中に流れる血はそうは言っていないでしょ？ 今あんたの中には、悲鳴に酔い、殺戮を愉しむ暴竜クルヴォレクの血こそが流れているんだから」

自棄になったように、嘲う。何を思っているものか、その笑みはひどく歪んでいた。

「……知ってたか。ってか、お前なら知ってて当然だよな。——そうだ、俺の中には紛れもなく

確かに暴竜の衝動が息づいている。正直、恐ろしいよ。一度解き放ってしまえば敵も味方もなく、目に見える者全て殺し尽くしちまいそうだよ。

今までは何とか抑えてこれたが、これ以上は抑え切れるもんじゃない。戦争を止めた理由は、結局はそれ一つだな。平和が一番とか、圧迫される民衆の為とか、そんなんはもうどうでもいいんだ。

ただ、あと一つだけやっておかにならんことがある。自分を神か何かと勘違いしてる傲慢な魔女、あれだけは生かしておく訳にはいかないんでな」

珍しく多弁になって、ヴァスガルトはそこまで一息に言った。

「それを……あたしに言ってどうしようというの？ さっきも言った通り、もうあたしには何の力もないし、そうでなくとも元を正せばメリーシャヤの使い魔だったというのに」

「使い魔だった、だろ？ もうお前はメリーシャヤの僕ではなくなって、それで魔術が使えなくなった——違うか？」

こともなげに返された言葉がよほど意外であったのだろう、ティレイは大きな目をさらに見開いていた。自分の姿がそこにはっきりと映し出されるのを、逸らしもせずにヴァスガルトも見返している。

「俺だって木偶じゃないんだ、考える頭くらいはあるさ。魔女の成り立ちなんてのは知らないが、要はそういうことだろ？俺としたらその方が都合がいいんだけどな」

その反応に新王は苦笑で返したが、ティレイは聞くにつれ段々と見開いた目を半眼の形に歪めていった。

「ちょっと見直したわ……あんたの頭なんて、酒と女で埋まってるもんだと思ってたから。

確かにそう。あたしはメリーシャヤに魔力を取り上げられて、魔都メルクドネアを放逐されたの。アザフ＝マイエ帝国皇帝ユルベナフ＝マイエを次なる王に据えることが出来れば帰順を認める、という条件付きでね。でも、それも失敗した。あたしにはもう帰る場所がないの」

もう自嘲の色は皮膚の下にまで沈殿してしまっただけのように抜けなかったが、再びティレイはその表情を下に向けた。膝を抱え俯いたその姿は、見下ろすヴァスガルトの目にはひどく小さく映る。

「ふん……魔女の城ってのはそんなに居心地がいいのか？捨てられてもなお帰りたと思うってのは、あんまりよく分からないんだがよ」

「居心地？最悪よ、暗いしかび臭いし。食べる物だってろくに貰えなかったしね」

「？だったら——」

「でもね、魔女が恐れられず、蔑まれずにいられる場所はある場所はないの。人は、弱い人間ほど力ある者を忌避しようとする。あんたみたいな莫迦には分からないかも知れないけど、あたしはメルクドネアの外では、いつだってそういう視線に晒されてきたの。

あんたにその悔しさが分かる？あたしがあの連中に何か恨まれるようなことをした！？何もしてない！ただ、力を持っているというだけじゃない。だとしたら、あんたはどうして恨まれないの！？」

羨望。ティレイは羨んでいる。ヴァスガルトを——いや、そうではない。少女は自分以外の全てを羨んでいるのだった。

メリーシャヤの使い魔として育てられたティレイには、温かみのある思い出などはろくにないのだろう。愛情を注がれること、或いは育むこと、そのようなこととは無縁の世界に属してきたのだから。

しかし。

「お前の気持ちなんか知るかよ。俺が恨まれてないって？ 莫迦言うな、恨んでる奴なんてお前よりよっぽど多いぞ？」

俺が殺した将兵にも家族はいる。もちろん、戦死させちまった味方の兵にもな。戦争の為に重税を課せば飢える村もあるだろうし、ひどい話、征服した街やら村やらでのそれまでの失政ってのまで俺のせいになされてる始末だよ。

そいつらには、出来るだけのことはしてるつもりだが、だからって恨み辛みがなくなる訳じゃない。——帝国に行った時に、俺を暗殺しようって奴が何人も来たけどよ、俺にとっちゃ自分の領地を歩く方がよっぽど怖いんだよ。泣きながら心中覚悟で斬りかかってくるような連中の方が、な——そいつらに、戦争を終わらせて平和な国にする、って言ったって誰も納得なんかしやしない。でも、俺にはそう約束することしか出来なかった」

自嘲めいて、しかし覚悟の上でのことであるから後悔の色などは微塵も見せず、ヴァスガルトはそう語りかけた。少女は呆けたようにそれを見上げている。

その顔に向けて、なあティレイ、と新王が呼びかける。

「お前、帰る場所がないって言ったな。メルクドネアの外では恐れ蔑まれる、って？ なら、俺のところに来いよ。俺は一度だってお前をそんな目を見たことはないぞ。魔女だろうが何だろうが、俺にとっちゃそんなん関係ないからな」

呆けたままでいたティレイは、彼が何を言ったものか要領を得ず、そのまま首を傾げた。いつもの意地の悪さも戻らず、子供じみた表情で彼の顔を眺めてしまっている。

「フォルティスにも頼まれたしな。……あん時は何を言われてるのかさっぱり分からなかったんだが、今になってようやくその意味が分かったよ。——ティレイ、メルクドネアは俺が滅ぼす。俺がメリーシャヤの悪夢からお前を解放してやる。だから、お前は俺のところに来い」

照れ隠しに頭を掻くなどしてしまって、せっかくの台詞もさまにはならなかったのが悲しいところだが、しかし眼差しは真摯なままヴァスガルトは告げた。

「……なあに、あたしに後宮に入れとでも言う気？」

そんなことはまっぴら御免だ、というようなことが表情にありありと書かれている。だが、それとは別に彼女のその表情には、ここに来て初めて、明るさを見出すことが出来た。

「んー……まあ、それも悪くないんだがな。ほら、お前頭いいからよ、俺の相談役にでもなって貰おうかと思ってんだ。お前は今まで通り、好きにしてくれりゃいい」

「……でも、あたしは帝国の側について、それでここに入れられているのよ？ 裏切り者の魔女を近くに置くだなんて、周りが許さないでしょ？」

ティレイにいつもの毒が戻り始めたのをヴァスガルトは素直に喜んだが、しかし少女は、やはりこれまでの経緯がある以上、不安を払拭することは容易でなようだった。

その反応が意外とでもいうように新王は豪快に笑うと、それから、べーっ、と舌を出してみせた。それを指差しながら器用に言葉を継ぐ。

「ああ、それは心配すんな。うちのメルエーヴェは人を丸め込むことにかけてはフォルティス以上だからな、大丈夫、うまいことやってくれるさ」

確かに、ヴァスガルトの活躍を影で支えているのは間違いなく正妃メルエーヴェである。辺境の小都市ダロウェから興り、数年でここまでの版図を獲得するに至ったスウォン＝ジュナ王国を平らかに治めている手腕は尋常のものではあるまい。

あの女ならやりかねない、と確かに納得して、しかし、だけど、とも思ってしまう。が。

「あんたも大したものだと思うけどね。——ま、処刑されたって文句の言えない身の上だもの、言う通りにするしかないでしょ」

「その通り。聞き分けのいい奴は好きだぞ」

にっ、と笑って子供にするように頭を撫でようと伸ばされた手を、ティレイは邪険に払い除けた。好きにしろ、と言われても望みなど何もないが、ふと、一つだけ思い浮かぶものがある。一つだけ、強い後悔と共に思い出されるもの。

「……じゃあ、一つだけお願いがあるんだけど。いい？」

「ああ、なんでも聞いてやるぞ？」

どのようなことであろうと聞き入れるつもりなのか、自信たっぷりにヴァスガルトは後を促す。ティレイは一瞬こそ躊躇いをみせたものの、言い始めるともう言い淀みはしなかった。

「……フォルティスのお墓にね、花を供えてあげたいの。彼が死んだ理由の殆どはあたしだったんだもの」

「はあ？ そんなことか……そりゃ構わんけどよ。だけどなティレイ、あいつが死んだのは——」

「言わんとすることは分かるけど……あたしはそんな風には割り切れないの。こればかりは仕方ないわ」

どのような無理難題を吹かけられるかと内心冷水を浴びたようになっていたヴァスガルトは、魔女らしからぬ他愛のない願いに、すっかり拍子抜けしてしまった。それでもティレイは後悔の重責に表情を歪めていて、場の雰囲気悪さに、新王は話題を元に戻すことにした。

「ま、いいけどな。——じゃ、お前はメリーシャヤを忘れて、俺のところに来てくれるんだな？」

「——ええ」

この時には、ティレイはもはや躊躇いはせず、明快に応えることが出来ていた。思えば、自らの行動を自らの意志で定めたのはこれが初めてのことである。

妙に嬉しくて、薄く笑う——ヴァスガルトに気付かれるのは癪なので、喜びの殆どは心の内側に押し留めて。

地下牢を出ると、外界は眩い光で彼女を迎え入れた。そこは優しくも厳しくもなく、彼女には無関心であるようだったが、しかしはっきりと影を作っているヴァスガルトの背中だけは、今のティレイには確かな頼もしさを感じさせていた。

レスレント城外に、近衛兵が群れをなして座り込んでいた。土が剥き出しにされている他は何もないところだ。今は背後の城が彼らの上に大きく影を落としている――

「なあティレイ、どうにもよく分からんのだが」

「分からなくて結構、いいから続けて」

半目を開いて不平を言おうとしたヴァスガルトに、ティレイはすげなく応える。

総勢二百弱もの無骨者がずらりとそのようにしているさまは不気味なことこの上ないが、この場において唯一の女性となるティレイは、男臭さには構わず、一人一人念入りに検分するようにその間を歩き回った。

何をどうして見分けているものか、魔女は彼らの中から何人かをすでに選び出していて、選ばれた者たちは右なり左なりと群れの外に追いやられた。

自然の中に身をおいて土の風のその他様々な存在を感じ取り、さらに自らを強く感じ取ること――ティレイはおおむねそのようなことを彼らに求めたのであるが、しかしヴァスガルトにはそれが何を意味するのかいまだ要領を得ていなかったのだ。

少女は新王のところには最も多く足を運んでいたのだが、しかしその度に不合格だの不許可だの鈍感無能役立たずだのと散々に貶していくのである、元来気の長い方でないヴァスガルトにはとても堪えられるものではなかった。

「止めだ止めだ、こんな訳の分からん真似、いつまでもやってられるかよ！　なあ、お前らもそう思うだろ？」

とうとう我慢しきれなくなってしまって、土の上に大の字に寝転がってしまう。一人でそうするだけならまだしも、彼は左右の者にも同意を求めてしまって、彼らはどちらを取ることも出来ずに、はあ、と気のない返事を返してきた。

「はいはい、合格、不合格、と。――あんた、自分が言われた通りに出来ないからって、周りを巻き込まないでよね。迷惑だわ」

つかつかと歩み寄ったティレイはヴァスガルトから向かって右の兵、左の兵、とそれぞれ判定を下して、それから彼自身に向き直った。冷然と指を突きつけて、迷惑呼ばわりさえする。

「あーの一な一、いきなり訳の分かんねーこと言われてさあやれって言われたって、出来るわきゃねーだろが。もっと分かり易く教えろっての」

まるで大きな子供が小さい母親に駄々をこねるようなあべこべな光景であるが、ともかくヴァスガルトは腹筋だけで勢いよく跳ね起きると、そのように口を尖らせて不平不満を並べてきた。が、それでティレイの態度が変わる訳でもない。

「あら、出来る人はとっくに出来てるんだけど？　それなのにあんた、王さまがそんな投げ遣りな態度ってのは、幾らなんでも情けなさ過ぎるとは思わない？」

「思うかよ。大体こんなことして何の意味があるってんだ、俺が教えろと頼んだのはメルクドネアの陥とし方だぞ？　あぐらの組み方じゃねえっての」

すっかりとぐろを巻いたヴァスガルトがさらに投げ遣りな言葉を返すと、とうとうティレイは肩から溜息を吐いた。

「ああそう、分かったわよ。じゃ、あんたはもう何もしなくてもいいわ。メルクドネアを攻めるのはこの人たちにやってもらうから、あんたは思う存分後宮の女どもと乳繰り合ってなさい」

ひらひらと手を振って追い払うようにすると、それきりティレイはもう彼を顧みようとはせず、再び近衛兵の検分に戻ろうとした。待てよ、とヴァスガルトが慌ててそれを引き止める。

「はあ……あんた、自分が戦いを仕掛けた相手のこと分かってる？　今までみたいなの力任せの戦い方じゃ、メルクドネアには、陥とすどころか辿り着けもしないの。

その実力のほどはヴァドステンで一度見せつけられたんでしょう？ まずはあれの魔術に抵抗する術を身につけなければ何も始められない。今やっているのはその初歩も初歩、それを身につけるだけの資質があるかどうかの見極めなのよ。ここで根を上げてるようじゃ、連れて行ったところでメリーシャヤの駒にされるだけ。

特にあんたなんか、竜の血のせいで力ばかり強くなってるんだから、敵に回られたらお終いなよ。いないほうがまし。さ、分かたらほら、さっさと帰ってちょうだい」

振り返るなり半眼で睨みやったティレイは、もはや新王を邪魔者扱いにしかしていない、とはっきり伝えてきた。再びその場を離れてしまうと、それきりヴァスガルトが何を言っても戻ってくる様子はない。

「畜生、何様のつもりだってんだ。メリーシャヤを倒すのは俺の仕事だぞ？ それなのに俺を外すってのはどういう了見だ、あの女」

その場であぐらを組みつつ毒づく。すると、先まで周りにいた者も離れてしまっていたので誰も聞いていないと思ったのだが、陛下、と背後から声がかかった。

「よお、一等賞。落ちこぼれを笑いにきたか？」

或いはその声は身近に聞き慣れている声であったから、振り返ることもせず彼は応えた。「まさか、そのような——ですが、ティレイどののことをそのように言われるのは感心しませんな？ 魔女殺しを果たそうとする時に、先ず魔術に対抗する術を学ぶというのは理に叶っております。私とて、ヴァドステンでのことがなければこうまで真剣に取り組めはしなかったでしょうが」

いきなり揶揄で返されたダルアムは——実のところ、この検分でティレイに最初に合格と言わしめたのが彼であった訳だが——慌てて首を振ったが、しかしそれは置いて新王に忠言を呈じた。

「分かってるさ。だからって、出来ないものは出来ないんだよ」

そのようなことは言われずとも分かっていたから、ヴァスガルトはまた拗ねるようにしたが、くすり、とそれを見たダルアムは苦笑を洩らした。

拗ねたままの目でこちらを睨む彼に、失礼、と一言断って、それから言葉を発するダルアム。「出来ない？ いえ、陛下がこれをなさることが出来ない、というのは在り得ません。陛下は戦場においては誰よりもはっきりと戦場の気というものを感じ取っておいでです。ティレイどの自然の気を読めと仰られましたが、つまりは同じことなのですよ。

かの魔女は心の隙間に忍び込む業に長けているということですから、その触手を感じ取りつつ、なおかつ隙を与えないように心を強く保つ、というのがこの訓練の目的です。

随分と難しく考えておられるようですが、これはむしろ陛下には容易いのではないですか？」

苦笑が尾を引いたままでダルアムは言ったが、しかしヴァスガルトはもう笑われていることには構わず、なるほど、と一言呟いたかと思えば、礼の一つもいわぬまま再び意識を集中させ始めてしまった。

戦場では、まず感じられるのは殺気だ。時には、目で見るとより先にそれで敵の所在を読み取っていることもある——そうでなければ、あのよう目まぐるしく敵味方の入り乱れる混戦の中で生き残ることなど出来ないからだ。

殺気を感じ取り、またそれが自分に向けられているかどうかを感じ取る。更に怯えや恐慌、油断、その他様々な感情を意識下の何者かが知覚し、戦場が自分の中に立体化される。

敵を味方を察知し、その中でどのように動けばよいのか、ということが思考を越えて導き出される——そのような感覚をヴァスガルトは幾度となく味わっている。

そのような知覚を再現させようとする、すぐに緩急定まらぬ風の流れ、周囲の者たちの呼吸、土の温かさ、様々な情報が目を閉じていても感じ取られた。その中で一つだけ明らかに毛色の違う凄まじく強い力がある——自身の内面からこそ吹き上がってくる、暴力という他ない禍々しい力。

身を心の中から食い破ろうとするかのような、身も竦むような内圧に、全身から嫌な汗が噴き出してくる。やがてそれは茫洋と黒く広がる彼の内宇宙に暴竜の形を取って現れた。その前に自分もまた具現化するのを、他ならぬ彼自身が俯瞰している。

いや、俯瞰しているばかりではなく、対峙している彼の視覚もまた現実感を帯びて伝えられ、そこに向けて暴竜はゆっくりと近づいてきていた。一步、また一步、と後退りしながらも、剣を暴竜に向けて構える。

千の兵も、無数の投石器も、魔女ティレイもここにはいない。暴竜は他ならぬ彼を狙って、城の如き巨軀を近づけてきている。伸びてくるその影が、或いはその存在感が、巨大な顎より先に、すでに彼をすっかり飲み込んでしまっていた。

足が竦み、もはや後退りすることさえ許されない。ついに暴竜は彼の元に辿り着き、眼下に彼を睨み下ろすと、上下に牙を乱立させた口を大きく開いて——

ばかり。

「——はい、そこまで！」

一瞬、自分が暴竜に喰われたものだと疑わなかったが、しばらくして——実際、決して短くない間硬直していたものらしい——そうではないことに気付くと、ようやくヴァスガルトは目を開いた。

激しい動悸がする。レスレント城の影の中にいるというのに、弱々しい照り返しの光を感じるだけでも、目に鈍く痛みが走った。その痛む目の前では、ティレイが両手を腰に当てて仁王立ちしている。後ろで心配そうにこちらを覗き込んでいるのはダルアムだった。

「あれ……クルヴォレク……？」

ばかり。

「誰がクルヴォレクよ、失敬な。いいからさっさと目を覚ましなさい」

言われて、ようやく自分が寝惚けた顔、それこそ悪夢から覚めたような引きつった表情をしていることに気付く。ティレイに殴られたと気付いたのはそこからたっぷり一拍置いてからのことだった。

「お前、さっきのもお前だろ！」

「何よ、助けてあげたんでしょ。感謝しなさいよ」

急に頭に冴えが戻って、それでヴァスガルトはティレイに噛み付いたのだが、しかし彼女は見透かしたような顔でさらりとそれを受け流した。その物言いに、ようやくまともに働き始めた頭の中を、幾つも大きな疑問符が浮かんで埋め尽くす。

「あんたがどんな風を感じたかまでは知らないけどね、暴竜の血とやらが目を覚ましそうになってたわよ。勘弁してよね。今のあたしじゃ、覚醒されたら一溜まりもないんだから」

芝居がかった物言いをして、ティレイがさも恐ろしげに肩を竦める。その様子は言うほど恐れてもいないようであったが、しかしヴァスガルトは、すまない、と素直に頭を垂れた。

「いいわよ、別に。——ダルアム、こういう時は殴るなり蹴るなりして目を覚まさせなさい。危ないってことは分かってたでしょ？」

「は？……ええ、まあ……」

急に話を振られたダルアムは、どう応えたものか迷ったのだろう、すっかり言葉を濁らせて

しまった。だが新王はその彼にも、上下の別などまるで気にせずその頭を下げてきた。

「いや、俺からも頼む。情けない話だが、自分じゃどうしようもないんだ」

「は……は！ 畏まりました」

「……畏まるのは勝手だけど。ヴァス、あんたには暴竜を抑えられるようになってもらうからね？」

姿勢を正して応えるダルアムを横目に、ティレイがヴァスガルトに注文をつける。は？ と彼が目を丸くするのも構わず、少女は言葉を続けた。

「ダルアムや他の連中と違って、あんたは自分を抑えるのとは別に、暴竜も押さえ込まないや駄目なの。あの女なら、絶対にそこから狙ってくるからね。逆に暴竜の力を完全に制することが出来れば、それは最大の武器になるし。いやいや、諸刃の剣とは正にあんたのことね」

からからとティレイは笑ったが、それが果たして笑えることだろうかということは甚だ疑問である。ヴァスガルトもダルアムも疑わしげに眉を顰め、顔を突き合わせた。無論、それに構うような彼女ではないが。

この日は結局ここでお開きとなったが、生ける諸刃の剣と評された彼は、一人内面に巣食う暴竜を制するべく精神修養を始めることとなった。

その一方でダルアムら近衛の中から選ばれた者たちもメルクドネア攻略の為の修行を始め、ティレイはその双方の監督に忙殺された。

そうして時は流れる。若い王国の脆さを露呈させながら。

愛妾キャレリがザルマーオに続き二女クレヴィオを出産したこと、また正妃メルエーヴェが王子ベオレフスの次の子を宿したということは王国にとってこの上ない慶事であったが、しかし、それも平和の象徴と言わしめることは出来なかった。

アザフ＝マイエ帝国との停戦は有効で、大きな戦闘はそれ以来経験されていないが、しかしそれとは原因を異にする小規模の戦いが王国各地で起こっていたのである。

その殆どは、レスレンティオ王国への回帰を唱える叛乱であった。ラズモーヴ王や王子フォルティスという正統の血族はもはやこの世にないから、恐らくは大公領単位での独立が本懐であるのだろう。マレーヴ＝ターニオス、ヴロク＝オーゼンのように新王国で重用されているかつての大公の領地では反発というほどのものはないが、その他ムオゼト、ウィーゼン、ヴァドステン旧大公領は完全な武力制圧を受けた土地であるから、強引な占領施策への反発は避け難いものとなっている。

戦争によって絶えず国外へと向けられていた臣民の目が、停戦によって国内に転じられたということもあるだろう。メルエーヴェがいかに政治手腕に長けているとあって、神ならぬ彼女に万民を平らかに収めることが出来る訳もないから、どこかしらに不満がわだかまるのも無理からぬことではある。しかし、この叛乱の頻発はそれを鑑みた上でも不自然なことこの上なかった。

扇動者がいる——その想像は妥当である。

この頃には帝国の監視と恫喝の役を兼ねる意味でウィーゼン領主に封ぜられていた重臣タナヴィス＝ヴィセル公爵ばかりは不用意に動かす訳にはいかなかったが、その他の諸侯に対しては、メルエーヴェは叛乱の鎮圧と共にこれの扇動者を見出して捕らえるようにと王命を発し、王領全土に徹底的な搜索網を敷かせてみせた。だが、そこまで手を尽くしたというのに、彼女の力では尻尾を掴むことすら叶わなかった。

この事態に際しても、王国の要たるヴァスガルトは我関せずという態を崩さずにティレイの下での修行に専念した。自身が表舞台に立たないこともまた民心の動揺を招いていることは承知していた——この間には、正妃や愛妾との不仲説やあちこちでの浮気、果ては王の死亡説さえ囁かれた——が、それでも彼は現状打開への最短路を選択していたのである。

やがて、メルエーヴェがベオレフスの弟妹として双子のオスドウェル、ヴェレスを出産した頃には、また新しい噂が様々な場所で囁かれるようになっていた——旧レスレンティオ王国最後の王妃メリーシャヤが、何処かの土地にて王国の再建を図っている、と。

それまでに流れた噂は幾つもあつたが、しかしメルエーヴェはそれらを余さず網羅し、危険と思われるものに関しては確実にこれを封殺してきたのだ。が、今回の噂だけは出産の前後で思うように手を回せず、しかも異常な速さで広まってしまったので、彼女にはもうどうすることも出来なかった。

単なる噂で済めば何の問題もなかったのだが、これは臣民以上に、王家への敵対者に絶大なる効果を及ぼしていた。叛乱を起こすも悉く鎮圧され、疲弊し絶望の淵に立っていた各々の叛乱軍の結集、或いは動かずとも旧王国への忠誠を捨てずにいた貴族、豪族の合流——そのようなことがまるで示し合わされたように起こったのである。

混沌としたうねりは堰を切って流れ出し、溪流がいつしか大河へと変わるように、集合また集合という風にして一点へと集められていった。そこは、表向きにはレスレンティオ王国の象徴たる大都、裏を知る者には魔女メリーシャヤの膝元である場所であった。

災厄以後、最も目覚しい復興を遂げ、人々に花の大都と言わしめた城都。旧王国の遷都によって更にその華やかさに磨きをかけながら、しかし叛臣キュクノス＝アダンの失政によって見る影もなく荒廃した背徳の街。

廃都ヴァドステン。

結集した叛乱軍は数万の規模に達し、眼前に築かれようとしていた新王都を脅かそうとしていた。

しかしその頃にはヴァスガルトは集められるだけの兵を新ヴァドステンに集結させ、この示威行動に対抗していた。

遮るもののない平原を挟み、南北新旧の王都ヴァドステンに分かれて対峙した両軍は、一触即発の緊張をそれぞれに孕んで休まらなかった。

史上最大の決戦——その幕は今この瞬間にも切って落とされようとしていた。

「これは、忌まわしき過去全てとの対決である！」

進撃を前に高ぶる兵たちの前に立ち、ヴァスガルトはそのように語気荒く言い放った。

この戦いは民心の中に残る旧王国信奉を払拭する為のものであると共に、メリーシャヤ——恐らくは災厄の時代から歴史を陰で操ってきただろう魔女との決戦でもあったからだ。

後者に関しては、彼は敢えてそれを兵や臣民に告げようとはしなかった。悪戯に不安を煽りたくなかった、ということもある。だがそれ以上に、そのようなものは初めからなかったのだ、と思わせておきたいというのが彼の正直なところであったからだ。

彼はこの戦いが自らの最後の戦いであると言い、だからこそ決して敗北は許されないのだ、と断じた。

最後、という言葉に一瞬は動揺が走ったものの、歴戦を経た彼の兵たちは確かにその呼び掛けに応え、激しい号を返した。

進軍——間を置かず敵軍も侵攻を開始し、両軍は鏡写しのように陣を組んで向かい合った。数で劣る叛乱軍がこのような行動に出るのは無謀であるが、しかし荒れるに任せた旧ヴァドステンでは籠城もその意味もなさないから、選択の余地はなかったというべきであろう。

そして、衝突。交戦は二度三度と繰り返されたが、しかし趨勢は一度目の交戦で決してしまっていた。軍といったところで、叛乱軍など所詮は烏合の衆。寡兵を利した奇策を用いての野戦であればこそ善戦していられたものの、このように正面からぶつかってしまえば、正に百戦錬磨の新王国軍の敵ではなかったのだ。

統制を欠いた叛乱軍は、しかしそれでも果敢に抵抗を繰り返したが、ついに四度目の交戦に至って敗北を認め、戦場に膝をついた。

どれほどの被害もなく勝利を得た新王国軍は投降した叛乱軍将兵を捕縛し、いまだ抵抗の意思を捨てない残党どもを狩り出そうとしている——まず異変に気付いたのは誰であっただろうか。身を震わせる言いようのない悪寒に、いつしか敵味方もなく、彼らは一様に同じ方向を振り仰いでいた。

ざわり、と不穏な音が響いたかと思うと、旧ヴァドステンの深い闇の中から溢れ出してきたのは、常世に在らざるものたちの禍々しい威容であった。

蝙蝠の翼を生やした獅子、口元を火の舌で赤々と照らした蜥蜴、醜く太った巨人——その他雑多な妖鬼魔獣の類は、黒い津波の如く城都から溢れ出すと、次には混乱する新王国軍へと怒濤の如くに襲い掛かってきた。

もはや叛乱軍も正規軍もなく、人々はただ不意の脅威に晒され逃げ惑うばかりとなったが、しかし、彼が動いたのは正にその時であった。

「隊列を乱すな！ 戦闘はまだ終わっていない、油断は死を招くぞ！ だが忘れるな、勝利を掴むのは我々以外の何者でもないのだということを！！」

その力強い号は恐慌をきたした兵たちの腹にまで重く響き渡り、確実に正気を取り戻させた。と同時に、兵間を割って進軍を始めたのは彼、ヴァスガルト＝ジュナに率いられた近衛兵の一団であった。

瞬く間に前線に踊り出た彼らは、旧ヴァドステンの城門前を埋めた魔獣どもに躍りかかり、戦端を開いた。ヴァスガルトもその後方で足を止めると、身の丈を越す強弓を引き、上空に翼を広げて旋回する黒い影を、一つ、また一つと射抜いていった。

その雄姿を見るに、兵たちも戦意を取り戻し、次第に戦列に戻り始める。まともに戦えば人間の敵う相手ではなかったが、しかしそれでもここに数万の兵が揃っていることもまた事実である。数を頼みに反攻を開始すると、次第に彼らは先までの勢いを取り戻していった。

「よし、ここはもう大丈夫だな。近衛は俺に続け！ 残りの者は俺たちが戻るまでここを死守しろ、いいな！？」

丁度矢を撃ち尽くしたところで、強弓を捨てたヴァスガルトは剣を抜いて旧ヴァドステンの城都に突入してゆく。近衛兵は彼の後に矢尻の隊列で密集し、彼の作った道を更に広げてゆく。それに護られるようにして、ティレイがただ一人後に続いていった。

形もろくに残っていない城門の跡を通り抜けると、空気が途端に暗く重苦しいものになる。それは雰囲気というような穏やかなものではなく、明らかな質感をもって彼らを圧迫してきていた。

「お、静かなもんだな？ 出迎えの一つもあるかと思ってたのによ」

そのようなものは感じていないというように涼しい顔で呟いたのはヴァスガルトだ。常人には耐え難い見えざる圧迫もなきが如く振る舞えるのは、一つには暴竜の血の力であり、一つにはティレイの鍛錬の成果であった。

周囲には、彼らの他に動くものはない。妖鬼魔獣は全て出払っているらしく、だからといって以前のような死霊の歓迎もないようだった。

「前座だけでも充分盛り上がったと思うんだけど。あんた、どうでも暴れないと気が済まないの？」

呆れて、ティレイが後ろから彼に蹴りをくれる。涼しい顔をしているのはヴァスガルトの他には彼女くらいのもので、兵長のダルアムを始めとする近衛の面々は、彼らもティレイの鍛錬の賜物で魔都の気配に呑まれこそしなかったが、しかしこれに耐えるだけでも心身の力を削がれているようだった。

「そうは言っていないだろうがよ。拍子抜けだって思っただけだ」

「そう思う時点で人間じゃないわよ、あんた。……ま、そうでなきゃメリーシャヤ相手に喧嘩なんか吹っかけられないとは思っただけね」

憮然として応えるヴァスガルトに、ティレイが肩を竦める。と、そこに出てきた名前に、新王は表情を引き締めた。

「んで、メリーシャヤのねぐらはどこだ？ そいつを見付け出さないことには何も始まん」

しかしそれを聞いてのティレイの反応は、全くもって彼の期待したものではなかった。軽く首を左右に振ると、知らない、とだけ短く応える。

「——は？」

「知らない、って言ったの。ヴァドステンの下、という以外にはね。……自由に行き来が出来るのはメリーシャヤだけで、あたしは必要な時にはメリーシャヤに連れて行かれてただけだったし

」

「お前、ここまで来させておいてなあ——」

頭から唾り付こうかという勢いで怒鳴りかかるヴァスガルトに、しかしたじろぎもせずティレイは口元で人差し指を立ててみせた。彼がそれで大人しくなったのを確かめてから、言葉を続ける。

「叛乱軍を呼び寄せたのも、魔獣を放ったのもメリーシャヤよ。あんたもアザフ＝マイエの王も傀儡にし損ねて、御大自ら立つ他に手段がなくなったんでしょね。——なら、あんたがここにいる限り、あの女は絶対に仕掛けてくる。今となっては、あんたは邪魔者以外の何者でもないんだから」

「……ほんとかよ……」

半信半疑でヴァスガルトは眩きを洩らしたが、それに応えたのはティレイではなかった。以前にも聞いた、どこからともなく響いてくる幻惑の声音。

『およそその通り、と言っておきましょう。まこと男というものは理解し難いもの、何故そうまで争いを好むのでしょうか？』

メリーシャヤ。声音こそ鷹揚であったが、その存在は一同に鋭く緊張を走らせた。

「争いを好む？ ああそうさ、男ってのは野蛮な生き物だ。戦うこと、勝つことってのをいつもどっかで考えてるもんだよ。だがな、それは守るものがあるからだ。家族、同胞、臣民、まあ色々あるけどな。

俺に言わせりゃ、理解できないのはお前の方だ。お前は支配を求めている。何の為に？——お前に守るものがあるのか？」

しかし吞まれず、むしろヴァスガルトは魔女に問いを返しさえした。そこに魔女がいるかのように、視線を鋭く変えて。

『守るもの？ ええ、ありますとも。妾が守るのは、大陸全土、生きとし生けるもの全ての平らかな安寧。

あなたさまは辺境の民の渴きを潤す為に国を兵を興されました。ですが、その戦いが今に至るまでにどれほどの犠牲を強いてきたか、存じておられますか？ あなたさまが臣民と呼ぶ者たちの安寧の為に、そうでない者たちが強いられた辛苦に思いを巡らせたことは？

一なる王国、一なる王があらねば、争いが止むことなどはあり得ますまい。それが妾には悲しいのです。例え魔女よ独裁者よと罵られようとも、妾の願いは曲げられませぬ。その助けとならぬのなら、あろうことか妨げになると言って憚らぬのであれば、妾はあなたさまを亡き者とせねばなりません。しかしそれは望まぬこと、叶うならば手に手をとって世を治めたく思うところですが——」

「——なるほどなるほど、大層なお題目じゃねえか、それがお前の建前って訳だ。だが、それでお前の胆が見えたとは思えねえな。

何にしる俺はお前と手を組むつもりはない。殺すと言うならやってみろよ、足元すくってやるからよ」

『……そう。残念ですわ』

メリーシャヤの最後通牒をヴァスガルトが一笑に付したと同時に、ざむ、と響いたのは幾人もの全身を鎧った男どもの靴音であった。

眼前の影が深い闇に変じたかと思うや、彼らは突如その中から現れ出でた。その数は近衛の兵数とほぼ同数、振る舞いようを見るに、骸骨兵とは違って容易に侮れるものではないようである。

。

彼らは皆頭部を完全に兜で覆っていたが、しかし最前に立つ男だけは兜を脇に抱えて悠然とそこに立っていた。

屍兵であろうから病的なのは当然かもしれないが、しかしくたびれた白髪も、紫変して爛れた面差しももはや正視に堪えるものではない。が、それでも視界に納めてみると、その顔立ちはどこかフォルティスのそれを想起させた。

「……ラズモーヴ……？」

うめくように呟いたのはティレイだ。動揺に打ち震える声音に、僅かに怒りの色が混じる。

「……は？」

「ラズモーヴ＝レスレント——フォルティスの実の父君よ。魔女の助勢を買ったとはいえ、中原の統一を保ったのはそれだけの資質を有していたということ。フォルティスを鍛えた剣腕は当代随一、兵を用いれば百戦して負けなしと言わしめた武の巨人よ」

事情が飲み込めずに眉根を顰めたヴァスガルトに、ティレイが解説する。なるほど、その立ち姿には隙はない。だが。

「ほーお。……っても、所詮は活死体だろ？」

「そう……なんだけど」

活死体というのは、死体を魔術で甦らせ、下僕として用いるものである。その時にはもう魂は抜けてしまっているから、出来上がるのは大抵が愚鈍な木偶の坊に過ぎない。

だが、ラズモーヴは毒殺されていた。恐らくはメリーシャヤの仕込んだ毒によって。それは果たして単なる毒であったのか？ 生きながらにして活死体として作られたものだとするなら——『さて、お喋りはそこまでにして頂きましょう』

ティレイの思索を遮り、魔女が囁くと同時、ラズモーヴを筆頭とした死人の群れは再びその声を契機として行動を開始していた。抜剣し斬り込んでくる勢いは尋常のものではない。

この場この期に及んで油断する者など彼の下にいるはずもないが、しかし、それでもこの勢いを受け流すことは困難であるようだった。

敵軍の将たるラズモーヴを引き受けるのは無論ヴァスガルトの役であったが、竜血を啜った彼でさえ、膂力においては拮抗させるまでが限界となった。愚鈍な死人であれば、とその力を逸らそうと試みるも、ラズモーヴは先を取ってそれを許さず、それどころか隙を突いて彼の体勢を崩そうとさえしてくる。

その間にも周囲からは間断ない剣戟の響きに混じって、悲鳴だの肉を打つ音だのが聞こえてくる。一瞥を向ける余裕もないが、自軍が一合から劣勢に追い込まれたであろうことは想像に難くなかった。

「くお……………おっ！」

無理矢理引き出した全力以上の力でラズモーヴを弾き飛ばし、彼は視線は敵から外さずながら、態勢を持ち直すよう自軍に向けて檄を飛ばした。

勢いを殺せず転倒したラズモーヴが、全身を覆う鎧の重さに起き上がれずにいるのを確かめると、それでようやくヴァスガルトは乱戦の中に割って入って、敵味方を引き離しにかかる。

と——

ぶうん、と風切り音を鳴らして、倒れていたはずのラズモーヴの剣筋が彼に迫る。反射的に身を屈めた新王の頭髪を掠めて、剛剣は勢いよく通り過ぎていった。

「うおっ!？」

乱戦の最中で体勢を崩したところに、四方から更に幾筋もの軌道が彼を狙う。しかし、ヴァスガルトが振り上げた剣は、そのどれをも受け止めようとはしない。

ぎいんっ！

一際大きく響いた合音は、彼がラズモーヴの剣を受け止める音であった。他の剣は鎧で、或いは振り上げた腕で受けている。

ラズモーヴほどの突出はなくとも、どの剣筋も常人の膂力は軽く凌いでいる。だが、そのいずれも新王の体に傷を作ることは適わなかった。

いつの間にか、彼の体が燐光を帯びている。まるでそれが剣撃を受け止めているかのように、ヴァスガルトは涼しい顔をしているのだ。

兵団の隙間から剣を打ち下ろしてきていたラズモーヴが、不意に体を退かせる——転瞬、顔の高さで剣を合わせていた形からそのまま袈裟懸けに振り下ろされた王の剣は、眼前の屍兵を二人まとめて一撃で両断していた。

その彼の豹変を脅威と見てか素早く敵軍が退き、それでようやく両軍が二つに分かれる。たっぷり距離が開くと、燐光は霞のようにふいと消えてしまった。

「だらしないぞ、ダルアム」

その呼び掛けに、面目ない、と応えたのは足元に倒れた彼であった。

太腿の辺りが赤く血に染まっているから、そこを突かれて身動きを封じられていたのだろう。倒れてからは剣を捨てて盾だけで先の猛攻を防いでいたもののようだ。幸いにして他に大きな傷はなく、意識もはっきりしているから、止血さえすれば大事には至るまい。

見回せば他にも手傷を負った者は少なからずいるようだった。致命傷を負った者も。城都の外でも戦闘は続いているはずだった。人外の者どもとの戦いは実際以上の消耗を兵に強いていることだろう。ならば、決着を長引かせる訳にはいかない。しかし——

「負傷兵は後方に運びなさい。盾持ちは前衛、後衛は今のうちに彼らの手当てを。——どうしたのヴァスガルト、勝ちを諦めた？」

差し迫った苦境を前に動揺する彼をよそに、兵の統制を取り戻したのはティレイであった。正しく指示さえ与えられれば、すぐに近衛は即応の機敏さを見せた。それを確かめてから、彼女は新王に呼びかける。

冗談だろ？ とヴァスガルトは鼻で笑ってみせたが、しかし悲しいかな後の言葉が続いてこない。強がりであることなど、もはや確かめるまでもなかった。

「そう、なら安心したわ。あたしやフォルティスが見込んだ男がこの程度だなんて、そんなのお話にもならないからね」

それでも、弱腰な態度になどまるで気付かないという風に、ティレイは落ち着いた笑みで返した。

「……。ああ、魔女を倒すって言ったのは俺だからな。今さら前言撤回なんてみっともない真似、出来る訳ねえって。よっく見てろよ、驚かせてやるからな。

——メリーシャヤ、まどろっこしいことはもう終わりにしようや。決着つけようぜ、俺とお前だよ」

片手持ちにした剣を、ヴァスガルトは肩の高さに掲げてみせる。差し向ける先は、ラズモーヴでもましてやその他の屍兵どもでもなく、その背後に鎮座する巨大な闇であった。

『決着？ いいでしょう、そろそろ妾も見世物に飽きてきたところ——此度を幕引きと致しましょう』

闇が、膨れ上がった。屍兵を飲み込み、ラズモーヴを飲み込み、更に勢いを増してそれはヴァスガルトらをも一息に取り込んでしまった。城都を覆い尽くさんまでに肥大し、唐突に弾けるかのようにそれが掻き消えた後、彼らの戦場にはもう屍兵もラズモーヴも、またヴァスガルトとティ

レイの姿もなくなってしまっていた。

「……陛下？」

取り残されたのは近衛たちばかり。ダルアムの眩きの届くところには、もう王の姿はなかった

。

闇の中で、ヴァスガルトは浅い悪夢のような感覚——暗闇の中で足場を失い、奈落へと落ちて行くような——を覚えていた。

それが夢でないと分かるのは、側でティレイが喧しく喚き立てているからだだった。

「ヴァスガルト、どこ？ いるんでしょ、返事なさい！」

側で、といったところでこの無明の闇の中では、見通しなどきくはずもない。とりあえず聞こえてくる声を頼りに、そちらの方に手を伸ばしてみる。と、手は意外なほど簡単に人肌の柔らかい感触を探り出していた。

が。

「ちょっと、どこ触ってんのよ！」

何やら穏やかでない場所を触ってしまったらしく、ティレイは力いっぱい彼の手をつねってきた。何も見えない以上は不可抗力だと思うのだが、それを言ったところで聞き入れてはくれないだろう。

「痛ー……お前なんか触ったって嬉かねーっての。——で、これはどういう状況なんだ？」

「多分、メルクドネアに向かっているのね。何もなければ、その内に視界も開けると思うけど」

つねられた辺りを擦りながら彼が尋ねると、ティレイは幾分不安げにそう応えた。多分？ と聞きとがめたヴァスガルトが問いを繰り返す。

「今までにあたしがメルクドネアに連れていかれた時と同じだから。でも、状況は随分違うわよね。あたしもあんたも、今はメリーシャヤにとっては敵以外の何者でもないんだから。それですんなり拝謁を許してもらえと思う？」

「ん？ ああ、大丈夫だろ」

「……は？」

自らの懸念を軽く受け流されて、ティレイは間の抜けた表情で彼の顔を覗き込んだ。この闇の中であるから、実際にはお互い表情は知れなかったが、今回ばかりはその方が彼女の為であっただろう。

「ラズモーヴがまだ残ってるからな。メリーシャヤにとっちゃ、あいつが俺用の駒なんだろうよ。生半な手が通じないってのも分かってるだろうし、何より、あの女はまだどっかで俺を屈服させることを企んでやがる」

およそ半生をメリーシャヤの下で過ごしてきたティレイに向けて、ヴァスガルトは更に彼女の想像もしないことを言った。

この男は先の戦闘と合わせて二度ほどメリーシャヤと言葉を交わしたことがあるばかりだ。しかしそうでありながら、すでにかの魔女の本性を見抜いているというのか。長年、飼い殺しにされていただけの自分より、敵として対峙した彼の方がよく魔女を理解しているというのか。

その想像は、何故かティレイに嫉妬に似た感情を覚えさせていた。

「おお！」

しかし、情緒の欠片もない彼がそれに気付く訳もない。唐突に視界が開けたかと思うと、そこには壮麗な地下都市の景観が広がっていた。

そこは白亜の聖都レイゼルクや、廃墟となる以前の華の大都ヴァドステンと比べても全く遜色のない大都市であった。各々の区画は整然と整理され、放射状に幾筋も走った大路は真っ直ぐ伸びて一点に集結している。

一万の民衆さえ収まりそうな大広場。そしてその向こうには、それらの壮麗さの集約とも思える巨城がそびえていた。

しかし、近づくにつれ、都市は違和感を露にする。

「……無人？」

ここには、動くものの気配、生活の温かみというものが全く感じられないのである。よく手の込んだ箱庭のような、うそ寒い景観……そう感じるのは、そこを照らす冷淡な魔光のせいばかりではあるまい。

「全く、って訳じゃないけどね。でもまあ外れじゃないわ。普通、生きた人間でメルクドネアに入ることを許されるのは、メリーシャヤが魔術士としての素養を見出した者だけらしいから。後は身の回りの世話をする骸骨がいるくらいだし」

「……そっか」

話が途切れる頃には、二人は大路の一つに降ろされていた。石畳を踏む感触に、奇妙な安堵を覚える。そこは場所としては城までどれほどの距離もない辺りのようだった。

迷いようのない一本道だというのに、道案内のつもりか、ラズモーヴが先の方からこちらを見返してきている。ふとヴァスガルトがそちらに一步踏み出すと、死人はくるりと向こうを向いて、すたすたと歩いていってしまう。

「付いて来い、ってか」

にやり、と笑ってヴァスガルトもそれに続く。ラズモーヴや彼の歩調に合わせようとする、小柄なティレイばかりは小走りにならねばならなかった。

それには構わず、歩きながらもヴァスガルトは住居と思われる左右の建物を覗き込むようにした。しかし、それらはまるで箱を彫り抜いたように戸枠窓枠が開いているだけで、実際には戸も窓も何も嵌められてはおらず、また中を覗いても人の姿どころか調度品の類さえ見ることは出来ない。

「からっぽ……だな」

「死者の都とかっていうのが一時期流行ったんだそうよ——災厄より前の時代にね。お偉いさんが死後の魂の抛り所として築いたものらしいんだけど、そんな道楽の為にここまでやるってのは、とっても正気の沙汰とは思えないわよね」

「んだな、死んだ後になんて興味もねーや。——って待て、災厄より前だと？」

災厄以前——正しくいうなら、災厄直後のこともそうだが——の歴史というのは、とうに失伝されたものだといわれている。というのにティレイはこともなげにその一端を覗かせたのである。ヴァスガルトが驚くのもむりからぬことではあろう。

「メルクドネアが出来たのは、て言っただけ。メリーシャヤがそうだとはいってないわよ？ ま、あれも普通よりはよっぽど長生きしてるんだらうけどね」

考えが筒抜けになっているかのように、ティレイは先んじて応えてしまう。悔しそうな表情を浮かべると、ふいとヴァスガルトはそっぽを向いてしまった。

会話が途絶えてしまえば、三人の足音の他には何の音もなく、耳鳴りが喧しく感じられるほどであった。会話を再開するのもばつが悪いというのか、彼は鼻歌を歌ったりわざと歩調を乱してみたりと一人でやっていたが、そのうちに彼らは大広場まで辿り着くことが出来ていた。

「ようこそ、ヴァスガルト＝ジュナ。直にお目にかかるのはこれが初めてのことになりますね」

大広間の奥、城門の前のところにその女は佇んでいた。メリーシャヤ＝バレル。その柔らかな物腰からはとても想像のしようもないが、しかし彼女は間違いなく最強最悪の魔女であるはずだった。

ヴァスガルトとティレイは大広間の中ほどのところで足を止めたが、メリーシャヤに使役されるかつての覇者ラズモーヴは、そのまま進んで魔女の側に控えた。

「目の前にいるのが、本当に生身だってんならな。まあいいさ、後でたっぷり確かめてやる」

「まあ、それは楽しみなこと。けれど、それは勝者への褒美と致しましょう。かつての我が夫、ラズモーヴとの勝敗が決した後でじっくり、ということで」

どのような意味にとったものか、メリーシャヤは嫣然と口元に手を当てて笑った。

「へっ、褒美とはな。そーゆーのは犬にくれてやってくれ、俺はお前から施しを受けるつもりは毛ほどもないんでな」

鼻で笑って、ヴァスガルトも挑発で返す。魔女は表情を変えなかったが——しかし、代わりに前に出たラズモーヴのその行動は、如実に彼女の意思を示していた。

「魔女って割に、意外と短気だよな」

ぼそり、と振り返ってティレイに囁く。だが彼女が何か言い返すより先に、ヴァスガルトはもう前に進み出てしまっていた。

「さすがに余裕ですこと。竜の血の恩恵、ということかしら？ けれど、それでは不公平ですからね……」

不可思議な言葉での詠唱、それは耳障りな響きであるが、しかし奇妙に韻を踏んだものでもあった。魔術——ヴァスガルトは身を固くするが、しかし何かを仕掛けられたという感触はない。

すらり、とラズモーヴが鞘から剣を抜き放つ。ただの鉄剣であったはずのそれは、今は不気味な青黒い光を刀身に宿していた。

「！——ヴァスガルト」

「——ああ、分かってる」

ティレイの警告を先んじて封じ、応じて彼も剣を抜き放つ。剣は冷めていて光を放つことはしなかったが、しかし、彼の体は先程のように再びほの白い燐光を放ち始めていた。

「そうそう、先に誤解を解いておこうと思うのですが」

と、新旧の王が間合いぎりぎりに対峙したところで、メルエーヴェが口を挟む。

「ラズモーヴは死んだ訳ではありません。正しい儀式と仮初めの死によって人という種の限界から解放された超越者……妾が命じればその通りの働きを見せますが、しかし活死体のように魂なき木偶と思われるのは些か心外ですのでね。

まあ、どうというほどのことでもないのですけれど——だから、あなたが息子を殺した、ということもしっかりと理解しているのですよ」

正に魔女の如く笑みを浮かべるメリーシャヤ。フォルティスのことを持ち出されて、怒気と動揺とを露にヴァスガルトが睨む——視線が僅かに逸れた一瞬、その機を逃さず、ラズモーヴは一息で間合いを詰めてきた。

下段からの斬り上げ——剣で受けていては間に合わない。咄嗟ながら、ヴァスガルトは石畳を蹴って後方に飛び退いていた。切っ先が浅く彼の腕を掠める。

「！」

鉄の硬度をもはるかに凌ぐ燐光の鎧を裂いて、切っ先は軌道を腕に赤く残していた。深い傷ではない。ただ、傷を負う、ということは彼には随分と久しい出来事であった。

血の滲み出る一筋の傷痕を、指でなぞる。しかし、ヴァスガルトの感情を占めたのは動揺ではなかった。歓喜。対等に戦える相手に、ようやく彼は巡り合ったのだ。

「さすがに、フォルティスの親父ってだけのことはあるな。面白え！」

感情と共に燐光をさらに昂ぶらせて、今度はヴァスガルトから攻める。一合、二合——初撃から渾身の力を籠めた剣勢を、しかしラズモーヴは危なげなく受け止めてしまう。

半端な膂力では逆に振り回されてしまうほどの重量の鉄剣を、ヴァスガルトは枯れ枝のように軽々と振り回している。常人が受ければ持ち手を碎かれかねないそれを受け止めているのだ

から、ラズモーヴの膂力とて並ではないのだろう。

双方、合を重ねる度に手傷の数も増していったが、しかしどちらも致命傷というほどのものはない。決定打に欠ける、というのが正直なところか。

仕組まれた剣舞の如く、剣戟は繰り返されてゆく。まず状況を変えてきたのは、ラズモーヴの方だった。

「フォルティスの仇——」

口の端から漏れたかすかな呟き。しかし研ぎ澄まされたヴァスガルトの感覚であればこそ、そのようなものでも容易に感じ取ってしまっていた。

振るわれる剣に、僅かな乱れが生じる。ラズモーヴはその一瞬に、新王の剣の軌道を外へと弾き出していた。

虚を突かれて硬直するヴァスガルトの正に心臓をめがけて、切っ先が突き込まれようとしている。剣を手放したとて間に合いはしないだろう。青黒い光は確かに燐光の鎧を無力化している。勝敗は決したかのようだった。

否。

剣が燐光を裂いて彼の胸の上に乗ろうかという瞬間、切っ先から光が消失する。切っ先だけではない、次には刀身全てから光は消失してしまっていた。そうなってしまえば、竜鱗の硬度を得たヴァスガルトの肉体を前に、単なる鉄剣などにはもう意味は与えられない。

燐光に阻まれた突き込みなど構わず、次の瞬間には、大上段から振り下ろされたヴァスガルトの剣がラズモーヴを袈裟懸けに斬り伏せていた。両断とまではいかずとも、鳩尾の辺りまで辺りまで切り裂かれては、致命傷であることは間違いなさそうであった。そう、彼が人間であったならば。

「——ティレイ!？」

だが、ヴァスガルトはラズモーヴの命数を測るより先に、振り返り彼女に呼びかけていた。

「全く、世話の焼ける男……驚いた？ 杖がなくても魔術は使えるのよ」

少女は笑って言ったが、しかし余裕綽々とはいかなかった。顔は血の気が引いて蒼白となり、笑顔もよく見れば引きつっている。先までの様子とはうって変わって、死の影が覗けるかというほどにティレイは憔悴してしまっていたのだ。

ヴァスガルトとて、ラズモーヴの剣にかけられた術を破ったのがティレイだというのは容易に想像がついた。がしかし、メリーシャヤの加護も魔術の媒介たる杖も失った彼女が正しい手順を踏めるはずもない、ということもまた想像できるのである。

その不安は的中していた。

「外法で妾の術を破るとはなかなかのもの。ティレイ、見直しましたわよ。——但し、利口とは言い難いけれども、ね」

メリーシャヤが、遠くから少女に憐憫の視線を送る。憔悴の故だろう、その言葉を聞く余裕さえなく、とうとうティレイはその場に膝をついてしまった。背中を激しく上下させて、苦しげに咳を繰り返す。

少女が口にしたとおり、魔女が常に杖を携えているからといって、それがなければ術を使えないという訳ではない。が、杖のあるなしが術士の負担を大きく左右する、というのもまた事実である。

第一に杖は魔力に干渉する為の媒介である。そして第二には、支配した魔力を増幅する役割も負う。だが、ティレイの憔悴はそればかりのことではない。

水盆から水をすくったとて水面に穴が空かぬように、魔力もまた何処かに空隙が出来れば、自

然とそれを埋めようとする働きが生じる。大掛かりな魔術を用いれば空隙もまた大きくなる。第三に、杖はこの逆風から術士を守る働きを持つ。となれば、杖がなければ逆風は直接術士に襲い掛かるのである。

今まさに、その苦痛がティレイを責め立てていた。

ラズモーヴの体から剣を引き抜き、ティレイに駆け寄ろうとする。

「来ないで！ まだ——」

「まだ終わってはいない。その子の言葉は正しいですわ」

ティレイの叫びを遮り、メリーシャヤの言葉が涼やかに響く。その時には、ヴァスガルトの無防備な背後から、ラズモーヴが彼を羽交い絞めにできていた。

鎖骨肋骨を通過して、ヴァスガルトの剣は腰骨まで届いていたはずだった。骨格の重要な部分を壊されたとは思えない力に、新王は動きを封じられてしまっていた。

「人ではない、と先に申しましたでしょう？ 甘く見るのは勝手ですが、手間をかけた甲斐もないというのでは拍子抜けもいところ。……まあ、所詮はこの程度、ということなのでしょうけれど」

背後を向けてしまって、魔女の姿は見えるはずもないが、しかし声は明らかに彼に近づいてきていた。ラズモーヴの拘束はさらに強まっていき、次第に呼吸すら覚束なくなる。燐光の鎧が効力を失うようなことがあれば、骨も肉も構わず締め潰されるだろう。

「では、もう終わりに致しましょう。人に馴れぬ獣は縊られるが世の定め。……これだけの器を失うのは残念でなりませんけれども、それも仕方のないこと」

声が、すぐ耳元の辺りから聞こえてくる。吐息のかかる距離から、魔女がこちらに手を伸ばしてきているのが気配からでも分かる。ラズモーヴの拘束さえなければ、手の届く距離。ほっそりと冷たい指先が、両のこめかみに当てられる。

好機。恐らくは最初で最後の。

ずっと理性で抑え続けてきた声——禍々しい暴竜の衝動に、ヴァスガルトは今こそ身を委ねた。

燐光の鎧が、見る間にその色を変える。理性の象徴たる白から、暴虐の衝動を象徴する暗い赤に。

もはや、そこにヴァスガルトという人間は存在していなかった。そこに在るのは、竜の巨体から人の体へとその器を変えた、人竜とも呼ぶべき存在。

まずその暴力に晒されたのは、彼を羽交い絞めにするラズモーヴであった。鋭敏な感覚は確かに気配の変化を感じ取っていた。だが、しかしそれが行動に反映されるより先、人竜は羽交い絞めにされた下から腕を伸ばして死人の腕を掴んでいた。そのまま、抵抗する間も与えずにこれを耑り取る。

両腕を肩口から引き千切られて、反動でラズモーヴが背中からどうと倒れ込む。取り上げた腕を放り捨てると、もはやそれを顧みることはせず、振り返りざま空いた手を背後のメリーシャヤに向けて伸ばした。

「小癩な……！」

人竜の伸ばした手は、狙いを違えずにメリーシャヤの頸部を捕らえていたが、しかしそれでも彼女はそう呟くことが出来ていた。何がしかの魔術で防いでいるのだろう、その抵抗はラズモーヴの膂力を明らかに凌いでいた。

それでも、それを支えるのは所詮女の細い体である。人竜の逞しい指は、万力を締めるようにじわじわと魔女の首に喰い込んでいく。

「己を捨てても妾の首を獲ろうというのか。下らぬ。そのような企み、魂ごと打ち砕いてくれるわ！」

人竜は確かに魔女に圧迫を加え始めていたが、しかしまだ余裕は魔女の方にこそあるようだった。自らの首にかけられた野太い指には構わず、ヴァスガルトのこめかみに当てられた細い指に意識を向ける。

掠れた声で、詠唱が始まった。響きだけでも聞く者に不安を与える、禍々しい旋律。

危機感を覚えて、人竜が手に籠める力を更に強める。だが、ヴァスガルトという枷から解き放たれた無制限の暴力を以ってしても、魔女の不可視の盾を打ち破ることは容易ではない。

更に、更に内奥の力を引き出そうとする竜人のこめかみから、どろりとした不快な感触が流れ込む。それは正に魂を蝕まれるような感触であった。

憤怒の渦のような激情の中に、やにわに虚無感が染み出してゆく。一瞬、指先から抜け出そうとした力を、人竜は慌てて取り戻す。

微動だにしない二人の間で、人竜の物質的な攻めと、魔女の精神的な攻めの闘ぎ合いが静かに交錯する。

どれほどの時間が流れたであろうか、もはや魔女の術も完成して、二人は彫像のように動かずにいる。揺らいだのは、赤黒い燐光の鎧であった。人竜の口から放たれた悲鳴のような咆哮が、無人の地下都市に木霊する。

揺らぐと共に、光は衰え、掻き消えようとする。横たわるティレイの疲れと痛みで霞む瞳に、どうしてかメリーシャヤの喜悦に歪む口の端が確かに映った。だが。

ぼきり。

魂の底から搾り出したような——いや、実際そうだったのだろう——地下都市の隅まで届こうかという竜人の咆哮の中でも、その単調な音は重く低く響いて聞こえてくる。

人竜はそれでもなお力を籠めることを止めず、もはや抵抗をなくした魔女の細い首を、ついには上下に締め千切ってしまった。

メリーシャヤの首が、ラズモーヴの腕と胴と同じ高さに落ちて転がる。その静けさが戦いの終わりであると、一部始終を見守っていたティレイでさえ、その現実を受け入れるまでには長い時間を要した。

頭部を失った体は、落ちた頭に引きずられるようにくずおれ、そうしてティレイの視界は燐光の赤に染まっていった。

緊張が解けて、意識が失われていくのが分かる。暗くなってゆく視界の中で、燐光は再び色を変えつつあった。

「……ティレイ。ティレイ？」

初めは遠く聞こえた呼びかけが、段々と近くに聞こえてくる。やがてそれはずっと近いところから聞こえるようになり——そうして、ティレイは目を覚ました。

「——なっ!？」

何をしているの? と怒鳴りつけようとしたものだったが、しかしひどい頭痛に遮られてそれはろくに声にもならなかった。

気が付いてみれば、彼女は今、ヴァスガルトに背負われていたのだった。彼はそうして先ほどから地下都市をあちこちさ迷い歩いていたもののようである。

何をしているものかと思えば、

「おお、ようやく目え覚ましたか。これでやっと出口が分かる」

……出口を探していたものようだ。

「悪いけど……出口なんて知らないわよ、あたし」

ぴたり、と足が止まる。

「それより、……正気なのね。どうして？」

「正気? 俺はいつだって正気だが？」

「寝言はいいから」

「……………。ん一、どうして、ってもな。俺ももうクルヴォレクに乗っ取られたまんまかと思っ
てたんだが。どうしてだろな？」

ヴァスガルトがメリーシャヤを倒した、というのは表現として正確ではないだろう。なぜならその時にヴァスガルトはクルヴォレクという強大な力に存在そのものを委ねていたのだから。正確を期すなら、魔女を倒したのは彼ではなくクルヴォレクである、というべきであろう。

この時、ヴァスガルトの魂はクルヴォレクに呑まれたとっていい。暴竜に体を譲り渡した、
と言い換えることも出来よう。ともかく彼としては、人間として正気を取り戻す、ということは
必ずしも期待していなかったのだ。

しかし、彼は今こうして存在を取り戻している。暴竜に呑まれて後の状況など知りようもない
から、彼にとってすれば不可思議という他にあるまい。

「そんなの、あたしが知る訳ないじゃない。何でも聞けば分かるって思わないでよ」

確かに知る訳はない。だが、想像することならば可能である。

暴竜とて、無尽蔵に力を蓄えている訳ではあるまい。何ととっても、今は実体を持たず彼に憑
依しているだけの存在であるのだから。であれば、その存在がメリーシャヤとの対決で消耗さ
れた、ということもありえなくはないだろう。魔女の仕掛けた術と何がしかの干渉を起こした、
ということもあるかもしれない。

しかし。

暴竜と魔女が共倒れになって、ヴァスガルト一人が無事に生還する、などと都合のいいことが
起こるものであろうか。言いようのない不安が、頭の隅を過ぎる。

「ん一、ま、奇跡ってことか」

「奇跡ねえ。……まあ、便利な言葉だこと」

呆れて溜息をつこうとしたティレイだったが、しかしとんとんと体が揺すられて満足に息も吐
けない。ヴァスガルトが再び歩き出したのだ。

「ちょっと、どこ行くの？」

「どこ……って、早いとこ出口探さないと駄目だろ？」

「いやまあそうなんだけど。——って無駄よ、待って、無駄なの。死者の都ってのは生者が立ち

入らず、また死者が迷い出さず、というのがお題目だから、出口も入り口もないの。探すだけ無駄なのよ」

とうに処刑されているはずの身で、後のことなど考えていなかったからこそ、ティレイもこの場にまで同道したのである。当然、生き残ることなどは考えもしていなかった。だから、こうして生き残ってしまうと、もうどうしたものか分からなくなってしまう。

だが、ヴァスガルトはそこまで殊勝な性格はしていないのだろう。ティレイに言い聞かされても、まるで諦めてくれる気配もない。

「っても、こんだけのもん、造る時には出入り口はあったはずだろうからな。どっか塞いだ跡くらいはあるんじゃないか？ 外に何か合図が出来れば、掘り出してくれるさ。

……なあティレイ、もし——もし、お前に娘が出来たら、俺の息子に嫁がせちゃくれないか？ 約束だ、な、いいだろ？」

莫迦なことを言うものだ、とティレイは鼻で笑った。メリーシャヤとの繋がりこそないとはいえ、この忌まわしい魔女の血を後に残す訳にはいくまい。そのようなことをしては、こうまでしてメリーシャヤを倒した意味もなくなってしまうのだから。

「諦めるなよ？ お前だって幸せにならなきゃな。そうでないと、フォルティスとの約束も破ることになっちゃう」

笑ったきり何も言わないティレイの心情を推し量ったものか、呟くようにヴァスガルトが語りかける。

「約束、ね。そんなのあたしの知ったことじゃないんだけど。——ね、そういえばあたしを後宮に入れるのも悪くないって言ったわよね？ あれは、どこまで本気だったの？」

少し意地悪くなって、尋ねる。一拍、沈黙が流れた。

「あー、そんなこと言ったっけか？ んー、……そりゃ本気で言ったんだよ。側にいて貰いたいって、今でもそう思うぞ」

そう言う彼がどのような表情を浮かべているのか、背負われたティレイに覗き見ることは出来ない。ただ、その言葉には嘘はないのだろう、とそれは確信が持てた。何ととっても長い付き合いである。

「ふーん。なら息子の嫁だなんて回りくどいことしないで、はなからそうすりゃいいじゃないの」

僅かに浮いた声で、挑発するように言う。が、ヴァスガルトの反応は意外に冷淡であった。

「そうしたいのは山々なんだけどな。駄目なんだわ、御免な」

え？——と問い返そうとして、そうしてやっとティレイは気付いた。ヴァスガルトの背中が、異様な熱を放っているという事実に。今まで気付かなかったのが不思議なほどだ。それは到底、常人が堪えられる体温ではない。

「ちょっと、ヴァスガルト？」

「黙ってるよ。いいから」

「そんな訳にいかないでしょ？ 降ろして！ 早く！！」

狼狽して背中から降りようともがくティレイを、しかしヴァスガルトはどうあっても降ろしてやるつもりはなかったようだった。それからほろくに言葉も交わさず、黙々と歩を重ねてゆく。

ティレイの呼びかけはいよいよ狂気じみてきて、ついには悲鳴へと変じていった。そうしてそのうちにヴァスガルトは倒れ、少女は逆風の痛みなどないものかのように、一人出口を探してさ迷い歩いた。

どれほどの時間が経ってのことだっただろうか。全く見当外れのところから道が開かれて、二

人はようやく救助の手によって外界へと運び出された。

外にいたのは、ただ疲れ果て、呆然とした兵士たちばかりであった。

王は勝利し、その長い戦いを終えたのだ——ティレイはただそのように彼らに告げた。

鬨の声も何もなく旧ヴァドステン城都とその周辺は静かで、誰もそこで起こったことの顛末など理解出来はしなかった。

ただ印象的だったのは、戦いが終わった、と聞いた時に浮かんだ彼らの安堵の表情であった。

結局、旧ヴァドステンでの戦いに関しては、集結した叛乱軍を鎮圧したものである、という説明に終始し、それ以上のことが公にされることはなかった。

敵であれ味方であれ、戦場に居合わせた者であれば、そのような説明で納得できる訳もなかったろうが、幸いにして、深い事情に立ち入ろうとして民心の不安を煽るような者は現れずに済んだ。

ともあれ、この戦いの後、しばらくは王国を脅かすような脅威はなく、人々はようやく平穩に手を届かせることが出来たのだった。

それは、多くの犠牲の上に築かれた平和である。悲しみは決して少なくはない。それでも、故人の死を悼むだけのゆとりが与えられるのも、平和の恩恵に違いなかった。

正妃メルエーヴェは多くの戦死者、戦争被災者の為に喪を発し、彼らを弔った。喪が明けた後も彼女は残された者たちをよく保護し、そればかりでなく臣民の為に幾つもの施策を打ち出していった。

そうして時は流れ、やがて戦争も過去のこととなった。あえて旧ヴァドステンの戦いに言及する者ももはやいない。ただ、自ら最後と宣した戦いの後、一向に姿を現さないヴァスガルトの安否に関しては、巷で様々に囁きが交わされていた。

実際には、彼は死んではいない。だが、もうそれと大差もないようであった。今では彼は廃人然としてもはや人前に出せる姿ではなかったのだ。メルエーヴェは彼を後宮の奥に置き、実際には幽閉しているのと同じ扱いをしてしまっている。

始めは他愛のない噂話であっても、何年も王が姿を現さなければ、それはやがて真実味を帯びていった。そうして噂は王国の外へとも流れ、そして、一人の男を動かすこととなる。アザフ＝マイエ王ユルベナフ。停戦の陰でじっと機を窺っていた彼は、これを真実と見るや直ちに兵を動かし、中原侵略の為に兵を起こした。

力を蓄える時間は十分に与えられていた。ユルベナフは緒戦から大軍を動かし、怒濤の進撃によってゼファン、ウィーゼンを併合、ウィーゼン公タナヴィス＝ヴィセルを捕らえて、かつて一時なり自国領としていた旧ウィーゼン大公領を回復させてしまった。

非道の王は更に大軍をウィーゼンに送り、かつてヴァスガルトがそうしたのと逆写しの進路で、スウォン＝ジュナ王国へと短期決戦を挑もうとする。

だが、帝国の領土は後にも先にも、これ以上に拡げられることはなかった。

国の支柱たるヴィセル公を欠いたことで、侵略を待たず瓦解するかと思われた王国軍は、しかし二つの新星——王と竜の血を継ぐ二人の王子、ベオレフスとザルマーオという勇士によって甦った。

若き二人に指揮された軍は瞬く間にウィーゼンを奪回、更にはヴィセル公奪還という離れ業をもやってのけた。それに留まらず双王子は難進不越と恐れられたダファルマン山脈を踏破、この困難な道程でベオレフスという片翼を失うも、最大の難関たる港都リュッセドを背後から攻略、帝国領侵攻の橋頭堡を築き上げた。

ゼファン—リュッセドの海路を確保してしまえば、国力において帝国を遥かに凌駕する王国がこれを屈服させるのにはもうどれほどの時間も要さなかった。

帝国はその領土の北部、及びそこに内包される帝都ラダウェルスを占領されるに至り、無条件降伏を宣言。皇帝ユルベナフ＝マイエは捕らえられ、一族郎党共々処刑されることとなった。

その快進撃をよそにヴァスガルトが王位を末子オスドウェルに譲る旨遺言を発したのは、ザルマーオが大陸統一の報を彼の待つ後宮にもたらしたのと機を同じくしてのことであった。

初代王はそのまま息を引き取り、またザルマーオも彼の寢室の閉ざされた扉の前で不可解な狂死を遂げたという。

この時にはすでにクレヴィオ、ヴェレスという二人の王女もこの世を去っていて、次代の王の座には、ヴァスガルトの遺言の通り、少年王オスドウェルが据えられることとなった。それは実際には、息子の後見役としてメルエーヴェが実権を保持するということである。女王の独裁に反発の声も少なからず聞かれたが、しかし彼女は巧みにこれを封殺し、臣民に対しても善き母であり続けた。

この頃には最大の政敵は、王国初期から布教権を活用して勢力を伸ばしたナバニール教団——つまりはサルディエ＝ローデンウェリであったが、謀略に長けた彼であっても、メルエーヴェを権力の極みから追い落とすことは困難であった。

しかし、そのメルエーヴェも所詮は人の子、迫り来る死に抗えるものではない。彼女が齢五十を目前に天寿を全うすると、残されたのは繰り手を失った傀儡——王の持つべき徳を悉く欠いた愚昧なオスドウェルのみであった。

彼はサルディエが手を下すまでもなく、自ら失政を繰り返して王家の声望を失墜させていった。結局、母の死後半年を待たずに彼は王座から引き摺り下ろされてしまう。

それから、一年半の空位時代が過ぎる。光輝を失い地に塗れた玉座を継いだのは、ヴァスガルトの孫にあたる善良朴訥なる若者、ラティアルト＝マージュであった。

ジュナの家名を継いでいないのは、母の死に因する諸々の不幸な事情による。幼くして母ヴェレスを失い、父共々メルエーヴェによって宮廷から遠ざけられていた彼であったが、オスドウェルを除けば、彼が唯一の血族である。女王なき今、彼が王位を継ぐことは自然な流れであったといえる。

しかし、ここにも裏はある。勢力を持たず宮廷で孤立無援となる彼に手を差し伸べたのは、ナバニール教団教主サルディエであった。自身も敬虔な信者であったラティアルトにとっては、さぞ頼もしい後援であったことだろう。

彼にはメルエーヴェのような巧妙な政治技術はなかったが、しかし教団の綿密な情報網が活かされ、また自身の誠実さもあって、よく臣民に支持されていた。三代王の時代こそ黄金時代であると評する者もいた。

しかし、平和は脆く平穩は儂い。

周到な準備を以って王家を糾弾したのは、他でもない教主サルディエであった。巧妙に操作した民衆の声を追い風に彼はラティアルトとオスドウェルを処刑台に追いやり、新王家を立てて教団の傀儡とした。

旧王家派と新王家派、この対立が、再び大陸を戦火の朱に染め上げてゆく——

ダロウエに築かれた王の陵墓には、竜殺しの勇名からとって屠竜王と刻まれている。

彼がダロウエに兵を興してから大陸統一までに要した時間はおよそ二十年余り。それにより得られた大陸の平らかな平穩もまた二十年余りのことであった。

果たして、彼の為した功績の価値とはいかばかりのものであったのか——それを量れる者は、いない。